浅野誠

ワークショップ・授業

２０１５～２０２１年

２０１６年3月に「ワークショップ・授業　２００７～２０１４年」を発刊した。それを引き継いで、今回は２０１５年以降の私の授業・ワークショップについてのブログ記事を編集した。「ワークショップ・授業」についての収録は、これで最後になりそうだ。

というのは、２０２１年をもって、大学授業を終えることになったからだ。沖縄リハビリテーション福祉学院での年４回のワークショップは続くかもしれないし、他にも何度かワークショップを行うかもしれないが、一冊にまとめるほどではないだろう。体力上も、何十人も相手に２時間以上かけて授業・ワークショップを行うことに無理を感じるようになったからだ。

２０１５年～２０２１年の授業ワークショップは、琉球大学・沖縄県立看護大学・沖縄リハビリテーション福祉学院、そして、学童クラブ支援員研修が中心になった。学童クラブ支援員研修については、２０２０年１０月に発刊した「沖縄の子ども・教育・福祉２０１３～２０２０年」に収録したので、今回は割愛した。

１９７２年から５０年間にわたって続けてきた私の授業ワークショップも、いよいよ終わったというわけだ。いつか、授業ワークショップ論を改めて書くことにしたいと思っているが、実現するかどうかは心もとない。

２０２２年2月

目次

琉球大学「特別活動の研究」　ｐ４

２０１５年度前期／後期　　２０１６年度前期／後期

沖縄県立看護大学「教育学」　ｐ７０

２０１５年～２０２１年

沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科「対人援助基礎演習」　ｐ１２０

２０１５年～２０２１年

沖縄県中小企業家同友会大学　ｐ１３５

２０１５～２０１９年

多様なワークショップ　ｐ１４２

活動的で創造的な南城市学童保育クラブ指導員　2015 年 07 月 16 日

西崎特別支援学校高等部３年生と教職員相手にワークショップ　2015 年 11 月 22 日

実演風ワークショップで、子ども達のやる気を育て、「人見知り」「指示待ち人間」を超える

――沖縄県立教育総合教育センターでのワークショップ――　2019 年 05 月 31 日

ワークショップ・授業論　ｐ１４７

「浅野誠ワークショップシリーズ№.７　楽しいワークショップ」完成　印刷へ　2015 年 02 月 22 日

「浅野誠　ワークショップ・授業　２００７～２０１４」をＨＰにアップロード　2016 年 03 月 19 日

講義式に圧倒されて、「アクティブ・ラーニング」が広がらない　問題提起連載１　2018 年 09 月 09 日

一方向的講義　問題提起連載２　　2018 年 09 月 19 日

1980～2000 年代での一方向的講義・授業の改革への動き　　問題提起連載３　　2018 年 09 月 27 日

講義形式が一律にまずいというわけではないが　　問題提起連載４　　2018 年 10 月 12 日

知識の効率的伝達手段ではなく、知の共同創造としてのワークショップ　問題提起連載５　2018 年 10 月 17 日

共同の知　アクティブ・ラーニングが目指したいワークショップ的ありよう　問題提起連載６

2018 年 10 月 22 日

知の創造　問題提起連載７　　2018 年 10 月 29 日

理論と実践の相互関係・循環関係　アクティブ・ラーニング 問題提起連載８　　2018 年 11 月 03 日

琉球大学「特別活動の研究」

※　文中に登場する「人生、何に価値を置く」「リレーお絵かき」などは、本書ｐ１４７掲載の「楽しいワークショップ」に掲載されているもので、ご参照ください。同書は本書掲載の授業でテキストとして使用することが多いものだ。

2015 年度前期

１．最初は緊張　ぐんぐん盛り上がる　2015 年 04 月 18 日

１７日　第一回目の授業。登録希望者が溢れて、人数制限しなくてはならなかったのは残念。後期によろしく。いつも以上に多様な学部学科から集まって、人数の多い学科がない。さらに北海道教育大学釧路校から交換学生５名が加わる。だから、初対面がほとんどで、最初は緊張が強かった。

自分の魅力を伝える自己紹介、物語を作り伝える、ほめ言葉つくし、「お父さん、お母さんになって」と頼む、など、いろいろと活動する中で、盛り上がる。発言がどんどん出てくる。

「人生、何に価値を置く」では、じつに多様な考えが出

しあわれ、グループで一つにまとまった案は、どこも出ず。一位に多かったのは、子ども・配偶者・友人・親といった人間関係。そして、仕事、休、食といったところ。人間関係を大切にする傾向が強い点が印象的。

最後の、「こんなクラスをつくりたい」のリレーお絵かきは、異常に盛り上がった。できた絵に一文字漢字でタイトルをつけたが、これが多種多様。「楽」「笑」「絆」などの定番に加えて、「普」「騒」「荒」「税」「標」などは初めて見る。

ともかく何かにつけて多様なのが今回の特徴か。いくつかの絵の写真を紹介しよう。

２．興味深い発言が続く　2015 年 06 月 07 日

第一回目の４月から二か月近くたって、２回目の授業を５日にする。

５日の授業では、アイスブレーキングの後、「将来設計尋ね人」「２０年後の地球・日本・沖縄」「なりきろう」「進路物語を創ろう」「沖縄の教育は、先進国型？　途上国型？　沖縄独自型？」と続けた。

受講生が発表や発言をする機会が、とても多い流れになった。

「２０年後の地球・日本・沖縄」での各グループ活動の報告発言なども、尻込みすることなく、どんどん出てくる。それも、グループごとに実にバラエティに富むものだった。「なりきろう」では、コミカルなもの、妖精物語のようなものなど、「えーっ」「なるほど」「美しい」などと、聞き手をうならせるものが続出。

最後の「沖縄の教育は、先進国型？途上国型？沖縄独自型？」では、４本のマイクを使ったが、途切れることなく発言が続いた。いつもだと、どこかの意見に偏ることが多いが、今回は、三つの意見と、二つの意見をブレンドしたものの５～６グループに見事に分かれた。それでも、多様な発言が相互に絡み合って、興味津々のものとなった。

３０人ぐらいの発言が終わった時に、時間の都合で打ち切りとなったが、続ければ、さらに３０分以上必要な討論となった。しかも、「かぶる」意見は少なく、一人一人が個性的な考えを出していたのが特徴的だ。

受講生６０人の２回目の授業で、これほどの討論になることは記憶にない。どうしてだろうか。

特別支援学校の先生２人が参加していたが、そのご感想によると、最初から、なにかゆったりして、安心で

きる雰囲気があり、意見交換しやすい感じだったとのこと。私がゆったりと構えていて、「怒らず」「介入もせず」に、討論を聴いているのが、現場教師としては驚きのようだった。看護大学での授業でも、そんなことを言われた。

各討論のはじめだけは、私が指示するが、後は学生相互が、自ら立ち上がって発言を続けていく。もしかち合ったら、お互いに気づかいして、順番を作っていく。

ここ数年、私は授業進行で司会役をしないし、途中で私の発言をすることも、とても少ない。受講生と一緒に発言に耳を傾け、発言内容を味わっている。それだけ、味わい深い発言が多いのだ。

無論、何もしないのではなく、活動と討論の「仕掛け」「道具立て」は、私が準備している。５、６回目の授業にもなれば、その役割もだんだん受講生が取るようになるのが、例年の運びだ。

そうした力をつけるのが、この授業のねらいだし、特別活動のねらいなのだ。

では、受講生のミニメモをいくつか紹介しておこう。

「将来設計尋ね人」にかかわって

・自分自身の将来について色んな夢や希望を具体的に考えている人が多いと驚きました。

「２０年後の地球・日本・沖縄」にかかわって

・どこに焦点をあてるかによってランキングが変わっていくので、面白かった。

「なりきろう」にかかわって

・水道の水やゴミになりきることで、自然環境を守るという意識を身に付けるという技にびっくりしました。

・実際に外に出て、自然と触れ合うことで、ただ単に教室だけで授業するよりもわくわくする授業でした。

「進路物語を創ろう」にかかわって

・自分がどう見られているか、自分が相手に与える第一印象がどんなものかわかり、またそこから新たな自分の可能性をみつけることができた。

・自分の本心とイメージが真逆で、新しい考えが自分に生まれた。

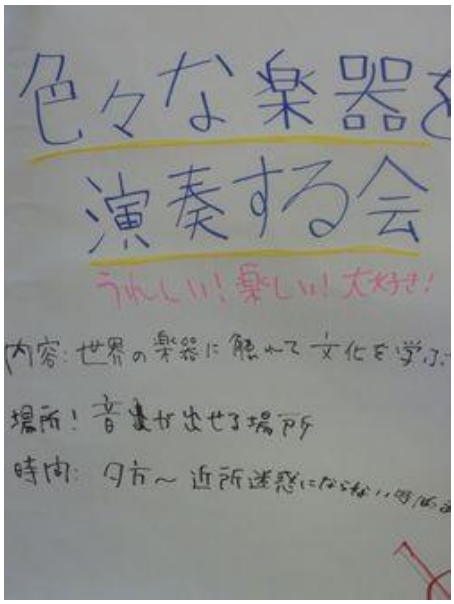
「沖縄の教育は、先進国型？　途上国型？　沖縄独自型？」にかかわって

・沖縄の教育について、発展かとか考えたことがなかったので、自分が沖縄をどう考えているのか改めて考えてみるいい機会になりました。

・「学力」を水準にするか、国を水準にするかという視点の違いで、先進か途上なのか意見が分かれた。いろいろな意見を聞けてよかった。

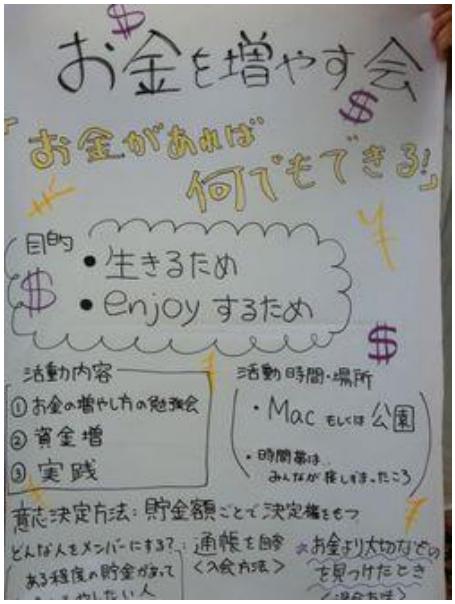
そのほか

・何を言っても許される雰囲気ができているので、より発展的な考えが出るっかなぁと感じました。



３．教室設計　問題解決即興劇　サークルつくり　ミュージカルつくり　　2015 年 06 月 14 日

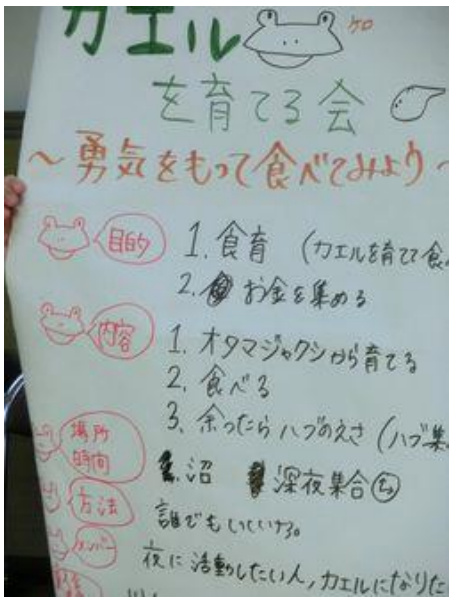
１２日の授業は、燃え上がりました。爆発といっていいかもしれません。即興劇で、ＡさんとＢさんの喧嘩から始まり、まわりの子どもの動き、教師の動きを作り上げていくものです。いずれのグループの喧嘩も迫真性あふれるもので、それをきっかけに受講生の動きが燃え上ったのです。



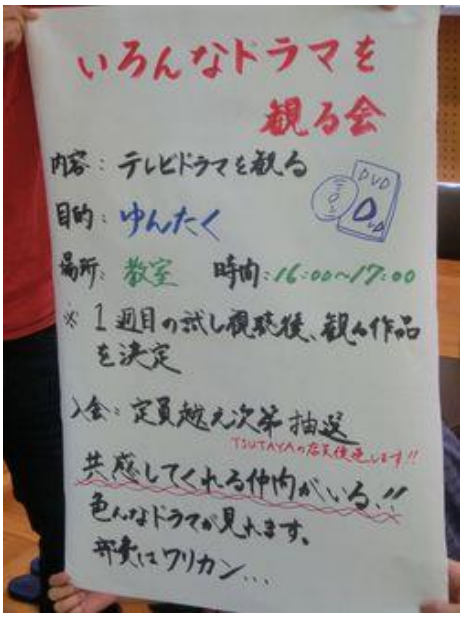
無論、その前の、教室設計も多様なアイデアに満ちていました。

次のサークルつくりは、そのいくつかを写真で紹介しましょう。

ミュージカルは、募集したタイトルで一番人気の「人情」に取り組みました。わずか３０分で、興味深い詩・歌・振り付けで、出来上がりました。



今回の学生も、他大学の受講生同様、「私は人見知りで、クラスメイトとともに取り組むのに緊張して苦労しています」といったことを授業最後に記入するミニメモに書く学生が、異常に多く見かけます。このごろの



学生の特徴でしょうか。とくに受験専門校から来た受験一途で入学して来た学生に多いようです。

教職は「人見知り」では務まりません。だから、教職科目には、「人見知り」な学生は登録しないように思いますが、実はそうでもありません。受験学習が、他者関係経験をとても少なくさせて、小学生以降の成長を止めている、あるいは後戻りさせているのかな、とさえ思ってしまいます。そうした学生も、初体験のワークショップのなかで、いざとなると「人見知り」を一挙に卒業しているようです。

教師の話を聞きながら、ノートに取り、それを覚えて、知識を詰め込むという学習スタイルだと、とても安心してやっていけるようですが、それだけでは、育ちません。人間関係を豊かに、協同創造する体験が、低年齢のままとどまっているのです。「自分の経験した特別活動」のレポートでは、例外的な学生を除いて、ほとんどが書けるような内容がないようです。自習の時間になったというのが、結構沢山ありました。学園祭が３年に一回という例も珍しくないのです。

人間関係を育み、協同創造を豊かに展開するのは、成人にとって不可欠の力量ですが、それを育むのに特別活動に決定的に重要な機会なのですが、それがとても貧困なのです。ですから、共同創造の世界をまずは、ワークショップを通して体験し、さらに、自分たちで共同創造することを、この授業では追求しています。

爆発的に燃え上がってきたクラスで、これからどんな協同創造が生まれてくるのか、期待しているところです。

４．企画作成チームがスタート　2015 年 06 月 21 日

１９日の授業では、企画案がたくさん提出され、それをもとにチームが作られ、そのプレゼン日まで決まった。一覧を示そう。チームテーマは今後発展変化する可能性があるので、１９日現在ということで記入しておこう。なお、都合で、１９日欠席した受講生は、連絡を取り合って、どこかのチームに入って活動を始めることが期待される。

７月３日発表

１．チーム・街トーク

２．他国の行事を体験してみよう

３．離島でのゼロ円生活

４．巨大生物をつかまえる

７月１０日発表

１．年越し・クリスマスパーティ

２．野球観戦サークル

３．無人島で暮らそう

４．理想の恋人討論　ＬＧＢＴもからめて

７月１７日

１．男は女　女は男　男女差別を経験する

２．（予備）

立候補で５人の世話役が決まった（増員の可能性あり）が、積極的な進行で、私もびっくり。

特別メニュー・レポートの提出もたくさん。といっても、単位取得を心配せず、「提出無し」で「頑張っている」人も結構いる。次学期へ持越しにならないように願う。レポートには、「優れもの」がいろいろと出始める。三つの一部を紹介しよう。

Ａ　ミュージカルでは「人情」という題で歌を考えたが、ほかのグループとほとんど被ることがなく、多くの人が集まればその分多くの意見が出るということが感じられた。私もそうであるが、先生がおっしゃられているように人見知りの人が多いと思う。しかし人見知りである人が多いという中でもグループ活動が滞りなく行えるということは人見知りだと思い込んでいるだけなのではないかと思えるようになった。

ワークショップを行っているうちにこのような活動を小中高とあまり行っていない自分に気が付いた。人見知りを増幅させる原因として先生も挙げられているようにノートに取り、それを覚えて知識を詰め込むという学習スタイルだと人間関係を豊かにすることができないように感じる。確かに、就職に学歴が必要となる現代においてはこの学習スタイルが最も無難なスタイルかもしれないが、この学習スタイルでは、社会に出て最も必要とされるコミュニケーション能力が失われてしまうのではないかと思う。

３年に１回しか学園祭を行っていない学校があるというということを先生がブログに書かれていたのでとても驚いた。確かに、学園祭を行うことにより、勉強の時間が削られるかもしれないが、特別活動の最も大きなイベントである学園祭まで回数を減らすということは生徒にとって良くないことだと思う。１年生、２年生のときに３年生の先輩方がどのように企画、運宮されているのかを見ることによって、自分たちが３年生になり学園祭を企画、運営する厳しさを感じながらも成功させる。このことは普段の授業では得られないことであり、将来にとって役立つ経験であることに言うまでもないと思う。なぜ生徒たちが自ら共同創造できる機会を失くすのかという疑問を抱いた。

Ｂ　私も現在の若い世代が具体的な将来のビジョンを持つことなく、安定を勝ち取るために勉強させられているという事態を危惧している。またこのような時世だからこそ生徒と関わりたいと思ったことは私の教師志望理由の一つである。現在は安定の時代であり、「自分らしさ」や「個性」が尊重されているとテキストには記

述されている。一人一人が尊重され「自由」な時代になったからこそ各の思考判断が必要となってくるだろう。私は「自由」であることには責任が伴うと考えている。確かに規則で凝り固まった世界の中では息苦しい。だが一方で規則や秩序によって我々は守られる。このことが今日の若者の社会創造を妨げていると思う。社会が自由である限り私たちは己の為すことに対し責任を持つ必要がある。ゆえに自ら道を切り拓いていく一方で責任を取るというリスクを排除しようとする風潮が生まれることは必然であろう。安定収入、無難に生きられればそれで良いという考え方はまさにこの風潮を反映している。加えて我々の親世代、昭和の古き良き時代に生きてきたものたちは親や教師の権力、社会的認知といった縄に縛られながらも、枠にはめられることによって守られてきた世代である。果たして彼らは我々がリスクを冒してまでも道を切り拓いていくことを快く思うだろうか。この両者の姿勢の差異が個人の興味関心よりも、高学歴・高偏差値・無難なキャリアコースという風潮を作り上げたと思われる。波風を立てずに人生を進められれば良い。そう思っている学生陣の学習意欲が低いのは当たり前である。

　このような状況下で教師の役割は極めて重要になってくると思う。教師として自らの生徒に夢を持たせるということは、意図的にできることではない。しかしながら、私は教師が生徒に対して先を恐れない将来設計のチャンスを与えること、そして自身の選択に付随する責任を取りやすい道を整備してあげることが重要であると考えている。子どもの夢に現実味がないからとあきらめさせ、失敗の少ない道に連れて行く進路教育は誤っていると強く主張したい。医者や公務員になることだけが人生の成功なのだろうか。ミュージシャンになりたい、高校を出て子育てをしたいという夢はだめなのか。私の友人にもいたのだが、音楽や芸術といった分野は進路教育上蔑まれることが多いように感じる。そういったルートでの苦難が多いことは否定しないが、私は一体どれほどの教員がそういった難しい道を選ぼうとしている生徒の意思をくみ取りつつ親の思いを繋げるような提案を探そうと　　（以下略）

Ｃ　「ワークショップガイド　第四章(コーディネイターになつてみよう他)を読んで

●　この章を選んだのはこの章の内容が教師になり、子供たちに何かさせるときどのように監督すればいいか役立つとおもったからである、

●　コーディネイダ一の役割に関しては「特活に関する研究」の授業で浅野先生の活動をみていたから少し知っていたがこの章にはそれに関しての解説があった。

●　大切なのは謙虚であること、そしてこまかな気遣いができることである。

●　基本的にワークショップを進めていくのは参加者でありコーディネイターはそれに手を少し添える程度である。ある程度何をすればいいのかを理解できるよう道筋を作ったりする必要もある。

●　大人であれば恥ずかしさ、子供なら経験の少なさゆえに「何をすれはいいかわからない」状態になるのでそれぞれアイスプレイキングを行ってみたり、段取りをわかりやすく説明するなどの補助を行うのがコーディネイターの役割である。

●　コーディネイターとしての力を鍛えるのには実際にワークショップに参加したりコーディネイターのアシ

スタントをして観察するなどどれも実際にやってみるという感じのものが多い。といってもコーディネイターは経験豊富な人間じゃないとできないというわけでもない。先にも述べたとおりあまり前に出ず、ひっそりサポートができるならだれでも行うことができる、

● コーディネイターをする姿勢は学校現場で子供たちに何かを創造させるときに大変役立つであろう。型に嵌めたやり方がないのだから教師がグチグチ口出しをする必要がないのは当然であるが。今の忙しい世の中でゆっくり見守るというのはなかなか難しいことです。待っている間も世界は動き続け私たちを焦らせます。しかし真に人が成長し発見するのは自分で何かを成し遂げた時である。それができる教師になるのに、ワークショップのコーディネイターの経験は大変役立つと思われる。

５．グループ企画作成ノッてくる。受講生の激しい成長　　2015 年 06 月 27 日

２６日の授業は、グループ単位で、企画作成作業。「人見知り」と言っていた人が、「人見知り」せず、どんどん話し合っている姿がステキだ。私は少々暇して、時々、グループ討論にちょっかいを出しに行く。

来週からの発表が楽しみ。

特別レポート提出がワンサカ。読むのに５～６時間かかった。味のあるものが増えてきた。自分の生き方にからんだものが多い。過去だけでなく、これからの方向についても突っ込んだ検討が目につく。

授業が終盤にさしかかる前に、「これまでの授業を通しての私の成長点」について、ミニメモに書いてもらった。興味津々のものが多いので、いくつか紹介しよう。

ａ　自分の考えにとらわれ過ぎていた自分でしたが、色々な人とかかわることができたおかげで、自分の考えにプラスして他の人の意見も取り入れることができ視野が広がりました。

ｂ　私自身人見知りであったのですが、この授業を受けて、自分の殻をやぶることの楽しさを感じ、新しい自分を発見できました。

ｃ　違うフィールドの方々と出会ったときに、相手の主張を吟味する間を持てるようになった。

ｄ　人前で話すことに抵抗がなくなった。

ｅ　自分がどのような人間なのか以前よりも理解できています。自分自身について記入したり質問されたりすることが、ワークショップで多く、自分自身について考える機会が増えました。そうすることで、自分はどうゆう人間でどうなりたいのか、直した方がよい所など自己理解ができるようになりました。それにもとづき毎日改善につとめることができます。

ｆ　自分の意見をもたず、発表することをよくためらっていましたが、この授業は考えを言うケースが多いので、自分の意見を持ち、それを発表できるようになりました。

ｇ　人間の成長は対数関数だと思う。自分はあまり成長を感じられず、いつも通りな気がする。
ｈ　自分が得意な分野ではしっかりと自信を持ってやりますと言える自尊感情が増えました。
ｉ　他人とスムーズに会話できるようになった。その結果、友達になりやすくなった。

ｊ　「特別活動」では、自分で考える力をつけることができるし、人と関わりながら視野を広げることができるし、他の科目では学べないすごいものだということを学びました。
ｋ　自分の意見を頭の中で、思っていてもなかなか発言できずにいたのですが、グループ活動で意見を言ってみると、同じグループの人たちが「いいね、それ！」などと認めてくれるので、自分の意見をいうことにも自信がつきました。自分の意見をいうことで、自分も授業に関わっている、創っているんだという実感がわきました。

６．企画プレゼン始まる　充実と飛躍　2015 年 07 月 05 日

３日の授業から３回にわたって、グループ企画のプレゼン。今回は、コンピュータ準備の都合で延期になったグループを除いた３グループの発表となった。いずれも、「街トーク」「他国の行事体験」「宮古島一週間宿泊研修」といったチャレンジングな企画

学校現場に新風と、生徒に喜びと発見・充実をもたらすものだろう。気概を感じる。
無論、最初のプレゼンなので、次回以降の発表グループに参考になることが多い。
ということで、この日の授業の前半と後半では、討論の質がとびきり飛び上がる。私も驚いた。受講生が「生徒目線」から「教師目線」へと飛躍し始めたのだろう。自らが楽しみ充実するにとどまらず、生徒が楽しみ充実するためには、どんな指導をすればいいのか、ということを考え始めたということだろう。
あるミニメモレポートは、次のように、授業時間内に認識が発展したことが記されている。

企画１の発展・応用の提案の欄
住みやすい町づくりをした後にそれを県に提案するなどのその先の活動を見据えて行うとよいと思った。
せっかく話し合うんだったら、対象や目的があった方がよいと思った。
↓
プレゼン資料を読んだら、「行政に提出」って書いてあったので、活動にリアリティがあって良かったと思います。
↓

実際に、自分たちの手で「町おこしした」という経験があれば、「自分たちが動けば変わるんだ！」ということを知り、社会の若い人々に蔓延している「諦め感」というものもなくなるのかなと考えた。却下されたら却下されたもののどこを直せばよいのか等のように何度でもトライする力も身に付くと考えた。この企画はすごい。

ここで時間の検討討論のために注目してほしいポイントをいくつか書いておこう。

・教師の指導の方針がどれだけ具体化されているか。「指導構想」のなかの「組織形態・組織方針」「段取り」「指導のポイント」欄に注目。それらに書かれていることが、プログラム・シナリオ・プレゼンにどう貫かれているか。

・「登場する生徒たち」に書かれていることが、他の文書とプレゼンとにどう貫かれていて、生徒たちの成長がどのように保障されそうなのか。

今年は、特別レポート提出が多いだけでなく、充実したものが多い。だから、目を通すのに、ずいぶん時間がかかる。中味もいいものが多い。

「教師になったらやりたい特活」のなかで、簡潔に多くの活動を出したものを紹介しよう。

・生徒達の仲が深まるようなアイスプレイキングを主な活動とする特活。

・地域の特徴を生かした活動（沖縄だと海の生物観察や亜熱帯に分布する植物の学習など）。

・クラスの全員を別の係に分配してそれぞれに役割を与える。係決めを行う。

・地域の人たちに協力してもらい、１日職業体験を行う。

・資料「楽しいワークショップ」のＮ０.16 進路物語を創ろうを実際に行ってみたい。

・自分たちの住んでいる地域を紹介する地域新聞づくり。

・生徒が企画し運営する特活（生徒がやりたいことを話し合い、学校で実施可能な範囲で活動を行う。）。

・地域清掃

・近くにある動物園や水族館に行き、命に触れる。

・体育館で班対向のスポーツ大会を開催する。その際の種目は運動が苦手な人でも気軽に参加できるようなものにする。

・いじめについての討論会。

・老人ホームやその他介護施設を訪問しお年寄りのお世話をする。

・生徒の悩みや問題を解決する手掛かりとなるようにカウンセラーを招いてお話してもらう。

・受験に向けて合格した先輩、残念ながら失敗してしまった先輩のどちらも招いてこれから受験を控えている生徒にアドバイスをしてもらう会。

「この授業で得た特活のワザ」のレポートも一つ紹介しよう。

この授業の授業者である先生は、最初の授業では私だちと一緒に活動に参加しながら場の進行をしていた。活動中の先生は学生に話を聞いてまわったり、自分自身も楽しそうに活動したりしていて、学生たちも気軽に話を先生にふったりと、学生たちとの交流を盛んに行っていた。回を重ねるごとに先生は進行を学生に任せるようになっていき、自分たちの気づかないうちに自然と進行役が先生から学生へと移行していた。この浅野先生の様子をみて私は、「すごいな」と思った。教育者たちが、「生徒が主体となって～」「生徒たちが自主的に～」と授業内容を試行錯誤しているなかで、この授業では学生が自然と主体的に動くようになっていた。自分も受講者の１人であったため、客観的に何か私たちをそうさせたのかは分析はできていないが、授業に「楽しさ」を盛り込む中で、「ねらい」を活動の中に盛り込んでいるところに学生が自然と学んでいる要因があると考えた。活動が「どのような能力を養うため」のものなのか、「ねらい」は何か、ということがしっかり考えられている活動づくりもワザの一つであると考えた。また、この授業を通して一番学んだワザは、教師も一緒に楽しむことと、場の進行を自然と移していく授業づくりを行うことである。今まで学ぶことのなかったワザがこの授業にあったと考える。

特別レポート提出は、次回が最終だ。次回のプレゼンも楽しみだ。

７．最終盤で著しい成長をみせる受講生たち　2015 年 07 月 19 日

１０日授業が台風のため、繰り延べになり１７日に実施。最終回は２４日に教室を１０１教室に変えて行う。

４グループの企画プレゼンがあった。実に多様な企画だ。プレゼン後の検討討論も、質的に高くなってきた。

最初のころは、見知らぬ受講生同士で「人見知り」を感じ、共同活動への不安を感じていた受講生が多かったことがウソのように感じるこのごろだ。企画を共同創造する力がついてきたばかりか、対象とする生徒が直面する課題に対応させて、企画をアレンジしつつ、教師の指導をいかに展開するかというところにも、目が向けられはじめている。

今回は、そんな成長を感じるミニメモ・レポートなどをごく一部に限って紹介しよう。

Ａ　たくさんの人の感想にあったように、私自身もこの授業を通してかなり成長したと感じている。今までは、自分の意見を言うことにあまり自信がなく、できれば自分の意見は何も言わずに周囲の意見をただ聞いていたいというのが正直な気持ちだった。そのため、自分自身の意見をもつことがあまりなく、周囲の意見に流されることがかなり多かった。

実際、この授業の最初の方はグループの中でしきってくれる人になにもかも頼ってばかりで、自分の意見も

あまり考えずに周囲の意見に合わせていたところがあった。だが、何回か授業を重ねていくうちに自分の意見をちゃんと考え、それを発言できるようになってきていることに気づいた。今になって振り返ってみると、この授業は他の授業とは異なり、自分から動かなければ何も始まらない、このことに気づき始めてから私は変わってきたと感じる。普段受けている授業のように常に受け身ではいけないのだ。この授業では、普段の授業では経験することのないような経験をたくさんする。そのため、授業が終わると毎回大きな疲れがでてくる。だが、それと同時に他の授業では全く得られないような大きな達成感も得ることができる。この達成感の１つ１つが私の成長につながっているのだと思う。

Ｂ　受講前特別活動は学級会のようなある種特別なことをする時間と認識していたのだが、特別活動における実践は実に豊富なバリエーションがあることを知った。また生徒が自主的に企画に取り組むことに加えて、そのために教師がどのように働きかけていくのかという視点の大切さも授業を通して実感することができた。子どもたちを放って自由にさせるのではなく、「時には適切な働きかけをすることによって、生徒の創造を広げていく時間」が、この授業を受講する中で見出した私の特活のイメージである。

次にこの授業で得たアイデア・ワザだが、今回の集中講義を通して自分の授業運営において活用したい点をいくつか見つけることができた。一つは、「パス使用」を前提に置くことである。（※私の授業では、発言が自分の順番に回ってきた時、パスする自由がある。パスが三人続いた時、活動が行き詰まっているので、その活動は終わりにする）　現在の教育、少なくとも私がこれまでに受けてきた授業では一人一人すなわち全員が必ず発言しなければならないと指導される授業が多かった。指名されたら必ず答えをいわなければならないという場面も多々あった。そういった誘導自体を否定する気はないが、「パス」の権利が生徒の心に余裕をもたらし、結果として主体的な発言を生み出していたがゆえに良い工夫点であると思った。今は発言出来ないが、次の討論で発言しようといった生徒が自身のストラテジーを構築する機会を与えることにもつながり、生徒の自主性を引き出す上で活用したいと考えている。発言を引き出すという点ではもう一つ「好きな位置で話したいときに話す討論」も私にとっては極めて斬新であった。ちなみにこの討論スタイルの良さを実感したのは、沖縄の教育が先進・途上・独特のいずれに当てはまるかということを話し合った時間である。私たちが習ってきた「話し合い」、または授業時における発言は立場を明確に分けたり、司会や教師が発言権を与えたときにのみ発言が許されたりするものが大半であった。こういった型にはまった討論は生徒たちに明確で根拠に基づいた意見を述べさせる訓練にはなっているかもしれないが、ときに生徒の積極的な発言を妨げているようにも感じる。この授業での討論は対照的に議題間、肯定・否定の中間に立つことが許されているため、個々人の主張に際して微妙なニュアンスが尊重されている、また形式張っていないため、生徒たちも身構える必要がない。

Ｃ　この授業で私が思ったのは、特活は自分を変える場だと思った。他の授業でも言える事だが、他の授業ではそれを第一にしていない気がする。しかし特活はそれが第一にある気がする。そしてその方法は多種多様だ。その一例として即興演技を挙げたい。（中略）特活は多少無理強いになってしまうが、自分を変える場に設定

することができる。他の教科でも自分を変える場はできると思うが、無理強いできるのは特活だけだと思う。表現は無理強いと言うあまり好ましい表現ではないが、要は特活にしかできない方法があるということだ。私はそういう面を特活の授業で活かしていきたい。しかし全部を無理強いするわけだと特活が嫌われるし、多様な場を設けることが、児童生徒へのニーズにこたえるということにつながると思うので、時折こういう無理強いを強いる活動を入れて、他の特活の時間でその変化を感じ取れるような授業構成にしていきたい。

Ｄ　この授業を通してアイスブレイキングの重要性を感じました。これがあるかないかで、その後のグループ活動の活発度に大きく差がつくのではないかと思います。

私は、教職科目の他の授業で、学生数や学生の所属学部のばらつきが特別活動に関する研究の授業と似たような授業を履修しています。その授業は、近年の教育の問題について６人程度のグループで討論を行って、それを発表する形式です。グループのメンバーは皆異なる学部で、前期の後半に入った今でもよそよそしい感じが続いています。話し合いを始めようと思っても、会話の糸口が見つからないのです。特活の授業のときのような「騒々しさ」がないので、他のグループも同じような雰囲気だと思います。

以前、授業で沖縄の教育が先進国型か発展途上国型かという討論かありましたが、あの時に多くの学生が多様な視点から自分の意見を発表していて、教育について真剣に考えている人がこんなにいるのだと良い刺激を受けました。だから、教育に関する問題について、多くの学生が自分なりの意見や考え方を持っていると思うのです。

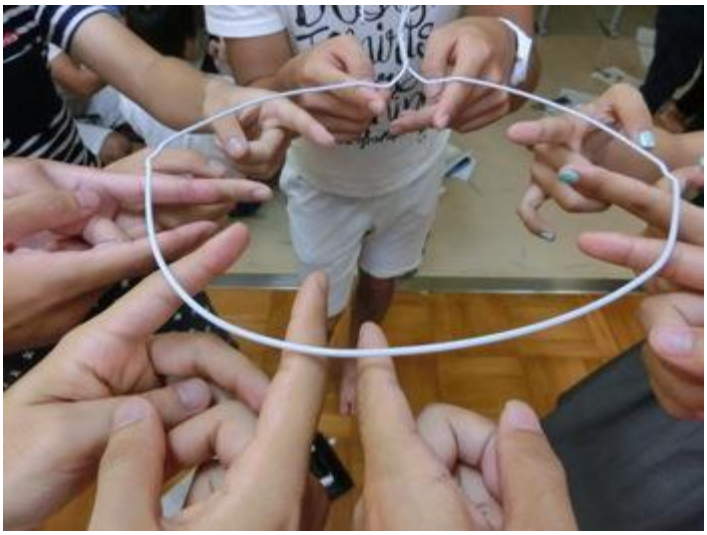
なぜ、同じようなグループワークでも議論の活発さにこんなにも差が出てしまうのか考えると、やはりアイスブレイキングの効果が大きいのではないかと思います。私自身はあまり人見知りではないので、はじめはアイスブレイキングが重要だとは考えていませんでした。むしろ授業時間にゲームばかりやっていて大丈夫なのかなとさえ思っていました。しかし実際やってみると、短い時間でもなんとなくその人との接し方がつかめる気がしました。それがわかると、討論を始めるときもこの人にはじめに意見を聞いてみるといいのではないかなどということがわかり、進めやすくなりました。そしてなにより、アイスブレイキングからスムーズにグループワークに移行することで、皆笑顔で始まるという二とが話しやすい雰囲気をつくるのだと思います。

Ｅ　ＬＧＢＴの企画は、少し上から目線のような気がした。アクティビティも同性同士をつくることはよかったが、そこからの発展がなかったし、カップルは出来なくても良いという視点も必要だったと感じた。

Ｆ　野球部のクラスメイトを応援する企画で、教師が見守る役で考える時に、生徒に声掛けをしないで見ているという立ち位置だった。しかし、生徒かよくわからない人たちが声かけをして、実際のクラスでやってる姿が想像できなかった。先生と登場人物の関係をもっとはっきりとさせると現実性が出ると思いました。

Ｇ　理想の恋人をゲームによって決めたなら、相手の性別に意識が行くのではなく、相手自身に意識がいって

しまうから、教師の意図がずれてしまうと思う。よって、ゲームをする前に性別に目を向けるように教師が働きかけることが必要だと思います。



写真は、あるグループがしたアクティビティ　輪を皆で支えながら、下までもっていく。意外に難しい。この活動を、チームワークつくりのきっかけにしようとする。

終了　興味深い浅野評価　　2015 年 07 月 26 日

２４日に終了した。なぜか空前の好成績で、出席者全員が単位取得であった。毎回の授業がドラマ的なのだが、今回も今回らしいドラマがいくつも生まれた。

「人見知りだと思い込んでいる学生が半数以上」「自分が受けた小中高校の特別活動については、印象に残る記憶に乏しくて、限りなく無に近いイメージ」　ここから出発して、初対面がほとんどだった受講生の半数以上と親しくなるほど、人間関係が豊かに広がり、人見知り卒業の人が続出。多様で特別活動の豊かなイメージを持つ。そして、共同で特別活動の企画を作成し、実演。そのなかで、子どもたちの現実とかみあう指導を考え、生徒目線から教師目線への移行。

それらの課題を追求し人間関係を築くなかで、驚き・発見・飛躍・ショック・再挑戦・再飛躍が次々と生まれていく。それらが、最後のミニメモに反映し、自己の成長を書きこむ学生たちだ。

ここでは、最後に受講生が書いた『担当教師浅野誠へのコメント』のいくつかを紹介しよう。私にとっても興味深いものが続出

A

始めて浅野先生を見た時に「何だこの人」というのが第一印象でした。授業もこれまでに経験したことのないものが多く、その中で先生がしていたことは、発表についてのコメントをしたり活動の中に少し入ってきたくらいで何を教えてくれるのかな？という感じでした。しかし徐々にグループでのワークが増えてきて、その中で教師が特活を通してどのように生徒とかかわるのか、どういう取り組みをするのか等、教師に必要な力や技術、考え方を出してきて、とても参考になることが多かった。最後まで楽しい授業でした。

B

最初の先生のイメージと今の先生のイメージは全く違います!!　あんなに暴れるかのように、みんなをまとめていた先生が今は静かで、みんなのことを見守っている、みんなの企画の中で良くでていた「自主性」を養うプロだと思いました。

C

浅野先生は計画的で、最初に人見知りを無くし、自分の意見をもたせ、順序があり、素晴らしかった。最後の方は、聴いているだけかと思ったら、捉え方のポイントを教えてくださり、すごく参考になりました。意外と見ていないようで、きっちり一人ひとり見ていて、抜け目がなかった。だけどそうすることで素の自分でやることができた。

D

今までに関わったことのない雰囲気をまとった先生だったので、最初は恐怖と不安しか感じていませんでしたが、生徒主体の授業を行う際には、こういう介入方法があるのかとお手本になりました。そして、たくさんの特活を考案しているのですが、それぞれ分野が異なり、多様なので、とても体験することが楽しく、「こういう特活ってどうやって考え出されるんだろう」と考えるようになりました。

E

最初のころ、授業を受けている生徒の目線でしかコメントを書くことができなかった。しかし、授業を受けていくと、先生の行動に注目したコメントを書くようになっていた。授業者としての目線が育ってきたと感じた。
授業をうけていくことで、自分の可能性に気付くことができた。人見知りだとおもっていたが、自分の殻をやぶることの楽しさを感じた。

F

授業前半のワークショップでは私自身が思っていたより、初めての人と何気ない会話ができて仲の良い友達もつくることができて、全体を通してみると楽しかった。
浅野さんが、目の合った生徒にさりげなく話しかける授業のスタイルは参加していて、居心地がよかった。

G

大学で㈜このような講義を受けるとは思いもよりませんでした。めちゃくちゃアグレッシブでとても大変でした。友達を作りやすくなった。人前に出る度胸もついた。

H

企画案の評価に不服で正直「チクショー、クソヤロー」という気持ちだったが、それをバネに新しい企画を作り直して、より良いものすることができました。今思うと本当に良いモチベーションになったと思います。

特に私は先生の授業中の態度や姿勢や方針（？）に感銘を受けました。現場の先生たちは授業の際、どうしても教師中心の授業をしてしまうことが多いのかなと思います。私自身受けてきた授業のほぼ全てがそうでした。この授業を受けて私自身直感したのが「教師が一歩後ろに下がる勇気」が必要だということです。

2015 年度後期

１．緊張から笑いへ　　2015 年 10 月 10 日

この科目を琉球大学で担当して、７回目になる。受講生は、毎回異なる新しい顔を見せる。中学高校免許取得希望者を対象とするので、法文学部、理学部、教育学部が多いが、工学部、農学部、観光産業学部もいる。まれに医学部もいるが、今回はいない。

毎回そうだが、ワークショップ型授業に慣れていない受講生で、受講生相互が初対面同士なので、最初は「何がおこるのか」と不安と不思議さが入り混じった顔付きから始まる。だが、進行につれて、笑い顔がぐんぐん広がる。

９日の一回目の授業は、私の定番ワークショップ、「リレー式に物語をつくる」（テキスト№.３）など→「ボディランゲージで仲間発見」（№.５）→「私の人生で大切にする価値を順に並べる」（№.１３）→「自己紹介・他者発見ビンゴゲーム」（№.２）→「リレーお絵描き」（№.

１０）という流れで進む。
テキストは「浅野誠ワークショップシリーズ№.７　楽しいワークショップ」。

　では、授業終了時に提出されるミニメモから、受講生の「発見・感想・質問など」をアトランダムにいくつか紹介しよう。

・初めて会う人とも交流できるようなレクリエーションの工夫が多く見られたので、とても勉強になりました。特に同じ集団で固まらないように数字をふってわけるのはとっても参考になりました。

・考えている事が全く異なる人と共同で作業を行うと、当たり前の事ではあるけれど、自分の予想していなかった、新鮮で大胆なアイデアが生まれるということを実感した。
・ゲームを通して、他者の人柄や気持ちなどが様々であり、人それぞれの価値観や考えなどが分かりました。また、このようなレクリエーションを通せば、どんな人とでも仲よくなれる気がしました。

・今日の発見。人見知りは思い込み！！
・人の生き方は人それぞれ。自己紹介ビンゴでそのようなことを改めて思った。まさに十人十色だろう。
・リレーお絵かきは、それぞれの個性が出て面白かったです。
・自分が人見知りであることを忘れるくらい自然と人と関わることができた。

写真は、リレーお絵描きでの作品

２．多様な人と頭（論理力と創造・想像力）を使い合う　　2015 年 10 月 17 日

　１６日の２回目の授業。「自動車と運転手」「将来設計尋ね人」「１０年後？」「進路物語」「なりきろう」「沖縄の教育は？」の６つ余りのワークショップをする。感想で多かったのは、「頭を使う」ことだった。正解がないが、頭を使って広げ深めていくこと、そして、想像＝創造をふくらませることが求められる活動だ。

最初の戸惑い段階を終えて、授業の流れ・雰囲気をつかみ、自分から積極的にかかわっていく動きが広がっている。それは、受講生相互が知り合い、「友達」になり始めてことと並行しているようだ。

では、ミニメモからいくつか紹介しよう。

・将来の自分のことをみんなに書いてもらうゲームがすごく面白かった。意外と当たっていると思うことや、そんなことはないと思うこともあったが、自分はこう見られているんだと知れてよかった。
・車と運転手をしたが、久しぶりに視覚というものを意識した。視覚を失う恐怖のため、ペアとの信頼感が生まれるいいものだと思った。
・発言することで、グループの人たちと新たな関係が生まれ人間関係の輪が広がり名前も覚えることができた。

・みんなに、将来の物語をつくってもらったこと、期待のメッセージがとてもうれしくて宝物になりました。
・なりきろうの学習では、意識していないものなので、なりきるのが難しかったが、なにかを意識して考えを掘り下げていくことは、人においては他者への理解につながると思う。
・物になりきり物語をつくることでモノの気持ちを創造することができた。これをクラスメイトの誰かになりきり物語を書いてきたりすることで、他人の気持ちを想像していじめなどが少なくなるのではないかと思った。

このブログのなかの授業記事を読んで、考えたこと、感じたことなどを書くレポートがもう何本も登場してきた。２つ紹介しよう。

「この特別活動の研究、いわゆる特活のようなワークショップ型の講義は琉球大学では珍しいが、近年、教職科目や私か所属している学科においてはワークショップ型の講義が増えてきている。講義の初めにアイスブレイクを挿入したり討論や共同研究を行うことも多い。

しかし、この特活の講義のワークショップにおいて特徴的なことは、ワークショップを通してワークショップを考える、ということだと思った。ブログで取り上げられている受講生の意見や感想は、おおよそ二種類あり、ワークショップを通してコミュニケーションを深められた、という自らの成長の糧になったというような受講生と、レクリエーションの内容と意義に言及し、ワークショップ型講義の展開を学んだ、というような受講生がいる。つまり、この講義は受講生のコミュニケーション能力を向上させることと、ワークショップの展開の二つのことが学ぶことができるということではないかと考えた。

私は今回の講義で感じたことは後者のほうに近かったが、今後の講義でさらにほかの受講生たちと交流するのが楽しみである。

購入したテキストを読み通したが、さまざまなワークショップについて説明と実践例が取り上げられており、とても興味深かった。ワークショップは大学の講義ばかりではなく、当然中学校、高校においても重要視され

ているので、この講義を通してほかの受講生の価値観やさまざまなワークショップの形態を学んでいきたいと思った。」

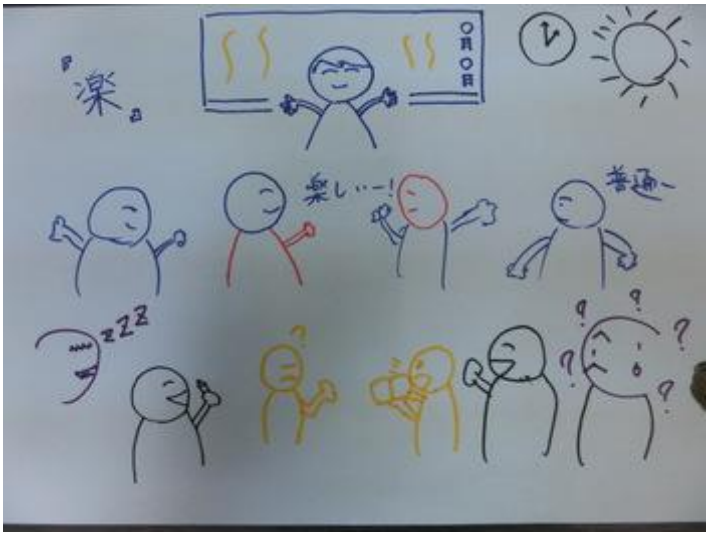
「授業を振り返りつつ、ブログの内容に目を通していくうちに、やられたと感じた。授業が始まった時から、終わるまで、明確な目的があり、その場の雰囲気で授業を行ってはいない、ということであるからだ。というのも、特別活動と聞くと、ただ楽しくワイワイやるものであると認識していたからである。

シラバスを皆で読み合わせをしている時、とても印象に残った発言があった。「適当に読みなさい」　正直、言われた時、頭が混乱した。怒られたのか。それともこちらの聞き間違いか、などと考え、意味不明であった。先生が本当に意図したことか、否かは分からない。しかし私自身は、意表をついて、まさかこんな初めから面白い事が起きるはずがないという空気から、一変して場を和ませようという目的があったのではないかと感じた。

その後も、テンポよく進み、ジャンケン列車に続き､輪になって隣の人に挨拶ゲームや、ボディ・ランゲージあいさつ、番号を言って、同じグループを作る事、どれも単体でやったことはある。ただ、場をうまく和ませて、後のグループワークにスムーズに行くようになっていると気づいたのは、ブログを読んだ後である。

一つ一つの言葉や声がけにも目的があり、うまいこと私たち学生は、たった一人の先生によって誘導されていたのである。アイスブレイクからのワーク、そして場を温めた後の感想交流や、発表などのやりやすさは今まで経験したことのない感覚であった。発言しやすい状況で、発表してと言われたら、やらない人がいるであろうか。何か言いたくなるのは私だけなのだろうか。

さらに、場を温めた後、先生の熱量が低く感じた。２コマ分の授業だから、さすがに疲れたのだろうと考えていた。しかしエネルギーを出してただ疲れているのではなく､授業のメインの学生が発言し、自分達で進行をしている所を邪魔しないようにしていたのではないか。そう考えると、先生の言動一つ一つに意味や意図があり、納得できる。

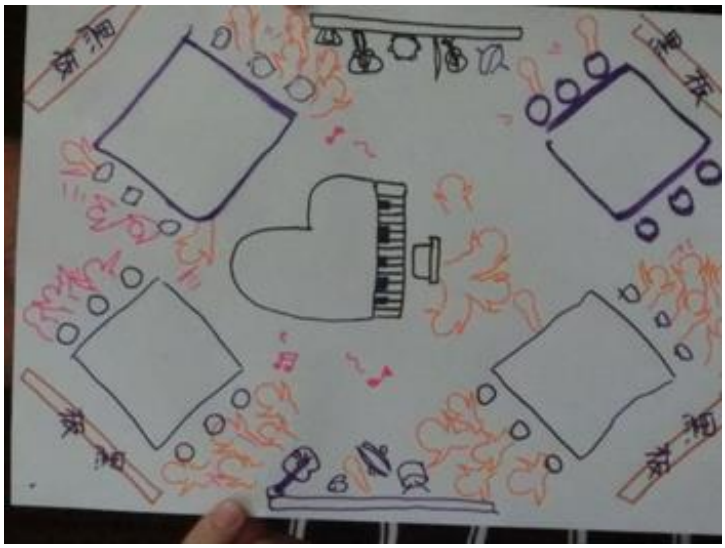


授業一回目ではあるが、先生のように自分も授業してみたいと感じた。そして、次の授業からは、先生が何を意図しているかを逆説的に考えつつ、学んでいきたい。」

写真は、前回授業で出来上がったリレーお絵描き「こんなクラスにしたい」

３．知的アプローチと感性的行動的アプローチとを合わせて　2015 年 10 月 25 日

２３日授業は、「教室をつくる」（中右写真参照）「けんかへの対処の即興劇」「サークルなどをつくる」（下写真参照）「ミュージカルをつくる」の活動で、五感と身体をすべて使っての創作活動だった。教師の話を聞き、文字を読むことを中心に学習しているタイプの受講生にとっては、新鮮、あるいは驚愕の活動だったようだ。



受験学習に慣れている人には、知的アプローチ（しかも、既存の知識の習得）が学習だと思い込んでいるかもしれないが、大学の学習、そしてとくに教師になるための学習、わけても特別活動では、知的アプローチだけでなく、感性的行動的アプローチを欠かすわけにはいかない。しかも、それは体験が大きな要素をなす。しかし、受験学習中心に過ごしてきた人は、その点では大きなハンディがあるようだ。

この両者おのおのを体験深化させ、加えて両者がからんで深まるような学習を期待したい。その点では、授業で行った活動体験をもとに、テキストを参照しつつ、知的な整理深化をレポート提出を通して行うことが大いに期待される。なお、レポート提出は、授業の後半にまとめて出すのでは間に合わない。前半、遅くとも中頃までに、出してほしい。後半は、企画創作と実演のためのグループ活動で繁忙になるからだ。

では、今回も、受講生が書いたミニメモとレポートをいくつか紹介しよう。

・ミュージカルで、各グループばらばらだった内容が一つにつな

がったので驚きました。想像力を使う内容だったけど、みんなで考えながらやると、一つの作品になったのでよかったです。

・ミュージカルをやるのはもっと可愛いものだと思っていたけど、かなり大変だった。みんなの意見を踏まえつつストーリーを作りつつ、周りのグループとのストーリーも合わせないといけないという空気の中で自分がどの役割なのかを考えて行動できたし意見を言うことができたと思う。

・理論で固められた私たちから無理やり感性を引き出す、えげつない授業でした。しかし、感性は教師をやるうえで捨てられないのかなと思いました。

・「つなげる」というのがキーワードだったと思います。人も床の劇も言葉もつながるんですね。

２回目の授業のブログ記事を読んで

・今回の授業もまだ知らない相手との交流が多かった。私は初めて会った相手と会話をすることに苦手意識を持っているため、自分から積極的に話しかけることはあまりしない。

前回までは、自分から声を発しなければ相手と交流することできない内容であった。しかし、今回はそうはいかなかった。授業の初めに行われた「自動車と運転手」というワークショップは相手との信頼感がなければ目をつぶることはできない。そこで、私たちの間には自然にお互いを知ろうという意識が働き、気づけば私もワークをしながら質問したりしていた。知らない相手とこんなにも自然に会話ができることを知らなかった私からすると、このワークのおもしろさに魅力を感じた。

「将来設計尋ね人」では“あのマイクロフォン”が回ってきた。私は人前に立って発表すると心臓の鼓動が恐ろしいくらい速くなり、頭の中が真っ白になって何を言っているのか自分でもわからない状態に陥ってしまう。これは、教師を目指す者には致命的かもしれないと自分でもわかっていたが、自分から手を挙げるなんてできるはずがない。しかし、今回は自分からではなく、“あのマイクロフォン”に選ばれてしまった。大きく深呼吸をして､周りを見渡し、心臓の鼓動が激しくなるのを感じて私は意見を言った。何を話したのか覚えてはいないが、その直後に訪れた達成感は今でも覚えている。大袈裟かもしれないが、今までの自分とは違う特別な自分になった気がした。素晴らしい体験をさせてくれた“あのマイクロフォン”に今は感謝している。

今回の授業は私を少しかもしれないが成長させてくれた。こんな感覚になれた授業は初めてである。この授業の素晴らしさを実感した。

上記では、自分自身のことについて述べてきたが、授業全体の雰囲気や先生の動きについてもいろいろ感じたものがあった。

まずは、今回の授業の流れである。今回の授業のテーマは「想像・創造」だったと思う。初めは自動車になり後ろの運転手が案内する方へ移動していく中で、今はどの辺にいるんだろうといった難しく考える必要のない想像であった。その後も想像（創造）力を使うもので、徐々に難易度が上がっていき、最終的には「沖縄の教育について」という答えのないものへとシフトしていた。初めからいきなり、最後のお題で考えてみろと言われてもなかなか創造（創造）できなかったと思う。授業の流れの中で想像（創造）力を使っていたからこそ、

難しい問いにも頭を働かせて考えきれたと思う。

私はこのことに気づくまで、授業の流れというものを意識したことがなかったし、必要なものという認識もなかったが、今回それがそれだけ無知なことだったのかということを思い知らされた。

「テキスト第６章を読んで発見したこと、考えたこと」

・　第６章を読んで、今の激動の時代に人間と自然の関係、人間相互の関係が変化してきているという事がわかった。自然との関係は「無尽蔵にある生産の基礎となる資源」という考え方から「限りがあるはかない資源」という考え方へ、人間相互の関係は「伝統的で固定的な人間関係」から「個々人が自主的に選択創造する人間関係」へ変化してきている。私は社会創造の項目を読み終わって、「現代社会における年配の方と若者の溝」を発見したような気がした。バブル崩壊以降、自然との関係と人間相互の関係は変化していき、そして今も変化し続けている。つまり、年配の方であるほど「安定の時代」の頃の考え方のほうに近く、若者であるほど「激動の時代」である今現在の考え方に近い。よって考え方が正反対であるため、よく考え方の衝突がおきてしまう。だから、バイト先でも大学内でも年配の方と話が合わず、問題が解決しないまま終わってしまう事があるのかと思った。これを打開するには、やはりお互いの考えを尊重し合い、それを踏まえた上でお互いの考えの間を取った案で解決するのが一番の解決策ではないかと私は考えた。

そして、この関係の変化がワークショップの背景となり原点となっているのだとわかった。「安定の時代」から「激動の時代」に変わる頃に、人間の知識の伝達方法も「大量の詰め込み」から「知の創造」へと変化し、ワークショップ型の授業の位置ができた。このワークショップで行われる「知の共同創造」と「受動から能動」は、まさに人間相互の関係の変化に合ったものである。「知の共同作業」は､個人で創り出した「知」を他人と共有し、また新たな「知」を創り出す。これには、必ず他者との人間関係が必要となってくる。つまり、「個々人が自主的に選択創造する人間関係」を良い方向にもっていくのに最適な方法である。そして、「知」の創造を促すのに必要なのは能動的な活動である。能動的に動かなければ、「知」の創造は始まらない。また、受動的な創造では優れた「知」が生まれず、受動的な人間関係では相手が話しかけてこない限り閉鎖的なまま終わってしまう。なので、ワークショップ型授業を行うと自然と能動的に活動するので、現在の「激動の時代」に行うのに最適な授業と言える。

４．企画グループ決まる　　2015 年 10 月 31 日

３０日の授業では、受講生自身の案と希望に基づいて、８つの企画グループができる。これから一週間の課外活動で、企画案作成とポスター発表準備が進むだろう。やむを得ず３０日に欠席した人は、連絡を取り合って、どこかのグループに入って、活動に参加してください。

今回の企画は、長年担当しているこの授業の中では見たこともない企画が続出だ。この後、企画は変化発展するだろうから、現時点でのおおまかなところを並べておこう。

・クラスでクラゲを飼おう。
・地層探索ウォーク
・年越しジブリ制作
・部活で、離島キャンプ
・缶けり大会
・沖縄本島一周散歩
・野良猫の写真を撮る
・地域調査散策

対象とする校種も決まり、生徒たちの分析も踏まえて、活動を通して生徒たちを成長させる取り組みを、具体的に実現できるような案作成に入る。

６日には、中間ポスター発表。１３日２０日には、実演がある。

大きな楽しみだ。傍聴参加歓迎だ。

授業は前半を終えて、受講生たち自身がつくる活動を中心とする後半に入るが、受講生相互の関係が多様な発見創造を生み出していく。今回も、受講生レポートをいくつか紹介しよう。

・「けんかへの対処の即興劇」では、私はけんかをしている子どもの役をしたのだが、いざ始まると、ほとんど声が出てなかった。私とけんかをしている役の方は、自分の世界に入っていて劇の中でも中心的な役割を果たしていた。「自分も何かしゃべらないと・・」と焦ってふと気づいたのが、その方の手がかなり震えていることだ。余裕の表情で自分の役割を果たしていると思っていたが、この人なりに相当頑張っているんだとわかって少し感動した。私ももっと自分をさらけ出して、恥らいとか関係なくなるように努力しないとな、と考えさせられるキッカケを与えてくれる出来事だった。

・第三回目の授業では、ブログの内容にもあった通り、散在するアイデアを、教室にいるみんなで一つのものにすることが念頭にあり、感性も使う、相手の意見を組み入れて、議論する力など、普段の大学の講義では味わうことが出来ないものであった。第三回目の授業であることもあってか、先生が話をする時間があまり無く、学生自らの力で授業が動いているのが、全身を伝わって感じられる。勿論、参加しているつもりではあるが、流れに逆らわないように必死にしがみ付いて、アイデアや議論をしているのが精一杯である。特にこの授業で感動したのは、みんなでミュージカルを作る前の、テーマ決めの時だ。「床」と決めるまでの過程で、先生は

５つからテーマを決めるといい、多くの学生が迷ったはずである。やる側からすると、わかりにくいものや､創造しにくいテーマだとやりにくいのはわかっているからだ。だが､あえて､床というワードが出たとき､何か起こりそうな予感はしていた。というのも、床に続いて出たワードの多くが普通であったし、先生もそちらに誘導しているかと思いきや､あえてそれに歯向かう形で､床というテーマが異様な存在であった。拍手で決める時も、案の定、床以外で票がばらばらになり、床だけがだんだんと支持されているのか、されてないのかわからなくなってきた。その中で、床をやってみたいと感じてはいるか、変に思われないかなどと思っている人が､だんだんと床を支持する人に後押しされ､床に決まった時は鳥肌がたった。みながそれぞれ、何かを得たくて授業を受けにきて、変わりたいという想いがそうさせたのではないか。その時、人が人を後押しすることが、意識や考えが一致さえいていれば、こんなにも簡単でやりがいのあるものであると感じた。ただ単にそうしたいのではなく、心を動かせば人は変われる、行動できるのだと感じ取った。実際に教壇に立つ時、ただこうしたいからやってと言っても生徒は動いてくれない。実際に、自分の気持ちと生徒の気持ちを限りなく一致させた時初めて､行動してくれる、そして生徒の気持ちが変わっていく。

・「クラブをつくる」アクティビティでは「旅行部」を作ったが始めは現実味がなくてどのようにまとめていいのかわからなかったが、メンバーと話していくうちにだんだん想像力が豊かになりいろんな意見が飛び交った。このようなグループで新しいものをつくりだす作業ではいつも新しい発見がありおもしろい。一人一人面白いアイディアを持っていることに気づくし、みんなのアイディアをぶつけ合う事で新しいものが生まれるし。そのようにして自分の想像力も豊かになるし、相手の意見を尊重することや自分の意見を主張する重要性を再確認できるいい場所でもある。

・第六章にも書かれていたように、ワークショップは各個人が「知」を作り、「知」をシェアすることで、新たな「知」を作り出す。授業中は別の章を扱っていて、どれもバラエティーに富んだ内容となっているが、第１章から第６章まで、［知］の創造（想像）というキーワードで一本の筋が通っていることに気が付いた。浅野先生は私たち学生に直接言ったりはしないが、様々な形態のワークショップを通して、私たち学生に「知」の創造（想像）というファクターをこっそり植え付けていると感じた。次の授業でも「知」の創造（想像）ということを意識して、いろいろな人とかかわりを持っていきたいと思う。

５．受講生作成企画の中間発表　2015 年 11 月 08 日

６日授業では、８つのグループの企画の中間ポスター発表があった。立派なポスター（写真参照）が続出。各企画に共通して言えるのは、創造性というか、独創性溢れる企画ということだ。その創造性は、企画全体だ

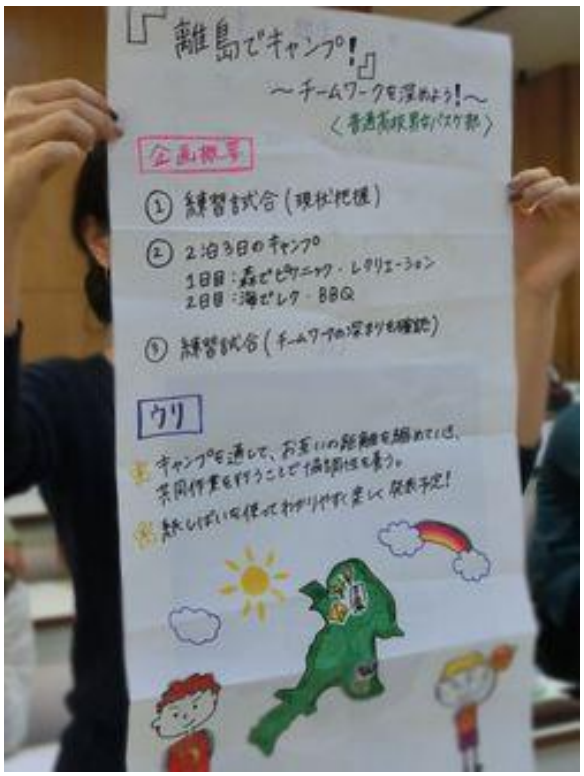
けでなく、企画の具体的実施でも発揮されることが必要だ。たとえば、缶蹴りチームは、缶蹴りという意外性だけでなく、実施ルールでも創造性をみせている。

創造性は実施具体性とも結びつく。「教師が口出ししないで生徒の自主性に任せる」と書くグループがあるが、生徒が自主性を発揮できるための指導の具体が書いていないので、運任せになってしまいかねない。

どのグループも「登場する生徒」の分析はかなり細かいのだが、それが指導構想やプログラムの中にいかに具体化するということで工夫が求められている。

ポスター発表でのコメントも生かしながら、次回のプレゼン・実施、そして最終発表にむけて、どれほどのバージョンアップができるか、期待は大きい。

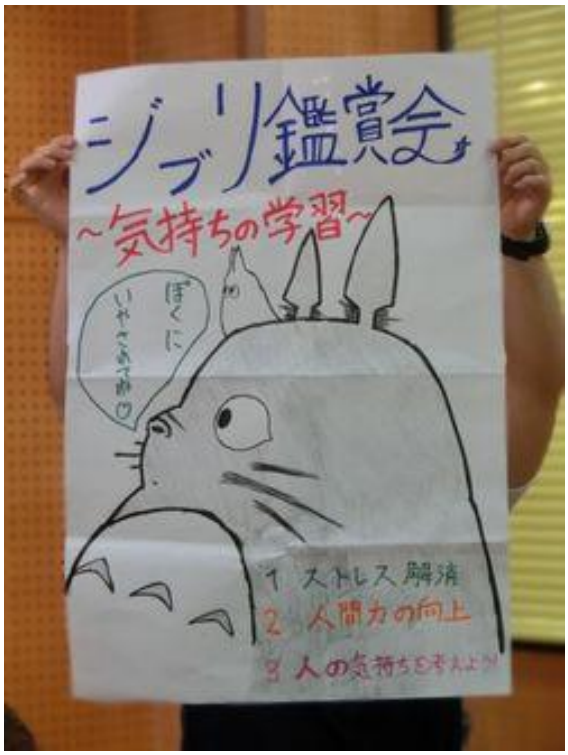
最終発表での前進はポイントアップにつながる。期待したい。レポートも中味が濃く、かつ多彩なものが沢山でてくるようになった。他のレポートへのコメントも登場してきて面白い。また、自分自身の体験が踏まえられて、これまた面白い。レポート提出機会は、残り２回だ。



沢山紹介したいが、スペースもあって、１～２に絞るしかない。

・　この講義で私が感じたアイデア・ワザの一つは、「単純なことをゲーム化する」ということです。これは先生が普段からやっていることで、グループを分ける時もただ分けるのではなく、ジャンケン列車や誕生日の順番を利用してゲーム化させているところでした。そうすることで、グループに分かれるという作業の間に他人とコミュニケーションがとれ、スムーズにグループ学習にはいっていけると感じました。

・　一回目の授業ではいったい何が始まるのかわからない私たちをそのテンポのよさからどんどん浅野先生のペースに持っていき受講者全員を取り込んでいきました。今までの経験から参加型のワークショップでは数人は協力的でなかったりシャイであまりワークに参加しない人がいました。一回目のワークショップが終わってなぜみんなあんなに楽しそうに参加していたのか疑問に思いました。そして、授業のフィードバックを書いているうちになんとなくわかった気がしました。おそらく浅野先生のジョークを交えながらも受講者一人一人に気を配っている姿勢がある程度の緊張感と参加意識を私たちに与え能動的に参加するようになって言ったのだと思います。「マイク」を使ったり、少人数にわけそれぞれの発言の機会を増やしたり。そしてもうひとつ大事だと思ったことは。授業の振り返りレポートを毎回書くことだと思いました。講義中は目的がわからないままとりあえずさまざまなワークに取り組み。その意味、目的を振り返りの際に確認する。その繰り返しで、次に新しいワークをするときは自分たちで「なぜこのワークをするのか？目的はなんなのか？」を考えるようになりました。そしてまた振り返りの際に教科書を読みその意味を把握する。この習慣の中に予習と復習が含まれている気がします。まずこの２つの「ワザ」は今後教育者を目指すにあたってぜひ身につけたいものです。



次にこの「特別活動に関する研究」で得た特活の「イメージ」は、ほとんどがワークショップですすめられたので、参加者全員をワークに従事させ主体的に参加者全体でそのワークを「完成させる」ことが大事だと思いました。今までのワークショップのイメージはインストラクターがほとんどプログラムを作っていて参加者はそれをこなしていくことでひとつのワークショップが完了する。言い換えれば最初から完成が決まっているというものでした。なので、浅野先生のスタイルのほうがより参加者全体に責任があると思います。

・　「知」の創造（想像）というファクターを浅野流授業展開によって、叩き込まれた。ミュージカルや企画グループにしても、普段は考えないようなものを提案し、それを実行するという摩詞不思議な体験をしていると感じている。つまり、私たち生徒間の相互関係が多様な発見創造を生み出している。

後半戦は前半戦で培ったものを総動員しなければならないと考える。それは中間発表の準備から始まり、中間発表のポスター発表、そして実演…。生徒間の関わり合いやみんなの前で発表すること、そして「知」の創造（想像）を表現するという前半戦のまとめというべき後半戦と感じる。クラスには色々な性格の子がいる、つまり千差万別である。共体験をする際に溶け込めない子が実際問題いる。この授業を通して、感じたことは一人ひとりの性格というものはなかなか変えがたいが、気持ちは変えられるということだ。性格を配慮しつつ、気持ちを尊重していくことを大切にして、後半戦に臨もうと思う。

６．教師としての眼と行動へ　指導の発見と創造　2015 年 11 月 15 日

授業のなかで、レポートのなかで、生徒学生ではなくて教師としてどうしたらいいか、ということに関心が向けられるようになってきたようだ。次回の発表が楽しみだ。

ポイントゲット機会も限られてきた。各自が希望するレベルに到達するように、ぬかりなくやってほしい。ちょっと『のんき』すぎじゃないかなと思う人もいるし、「みんなで〇〇をとれば、こわくない」式の人もいるようだ。かなり心配だが、心配しても始まらないかな。

※写真は、缶けり大会の様子

いくつかのレポートを紹介しよう。

・　この講義を受けるようになってから、他の教職に授業や、バイト（家庭教師や塾関係）で、「生徒の状況」と「目標」を強く意識するようになりました。同時に、「成長させるために手立て」も同時に考えるようになりました。この「生徒の現状」を掴むために、特別活動を利用できると感じました。

前回の授業で他のグループの設定や目的を聞いて、何を成長させたいのかわからないなと思う発表があったので、次回どのように改善されているのか楽しみです。また、「目的」と「成長するための手立て」を、しっかりと考えてあったグループに関しては、生徒（生徒の立場で考えている自分）に対して、どのように好奇心を煽ってくれるのか楽しみです。次回の授業で、最終発表なので「生徒の状況」と「目標」と「成長させるための手立て」を関連させ、自分自身が成長できるように活動したいと思います。

・　指導案を真剣に考えていくうちに､私はこの特別活動の授業は､生徒の創造性・自主性を育てるための授業だけではなく、私達自身の創造性・自主性も育てられていくのではないかと思いました。授業の最初は、今までの大学の授業とかなり違いがありついていけないこともありましたが、先生が何でこんなことを言ったのか、何でこんなことをしたのかを考えていくと授業の目的に気づき成長していけたと思います。

また、ブログに紹介されていた他の人の感想を読んで、共感したのが、浅野先生のワークショップは、参加者全体に責任があるということでした。完成像が決まっていなく、皆で作っていくということこそが､本当の全員参加型のワークショップであると感じました。一人一人に責任がある分全員と繋がっており、この繋がりが皆を成長させるものだと思います。

・　この特別活動に関する研究の前半は講義生全員を巻き込んだワークショップであった。一回の講義で３つから４つのワークに取り組んできたが、今思えば一日で行うワークはそれぞれつながっていたと思う。単純にいくつものワークをやるのではなく、まず初めにアイスブレイクのような簡単なワークを行い次に少人数に分かれ集中したワークを行う。その後また全員でひとつのワークを行う。その一連の流れが結果として自然に受講生全員が参加できるようになっていたと思う。そして講義全体の流れにおいても同じようなことがいえる。1 回目や 2 回目の講義では先生がより多くの指示を出していたと思う。また絵を描いたり、カードを使ったりなど、人見知りな人でも参加しやすいようなワークが多くみんなあまり戸惑うことなく参加できていたと思う。そこから回数を増すごとに、学生たちの主体性に重点をおきより高度なワークに発展していったのがわかる。ミュージカルの例が一番わかりやすいと思う。あれを一回目で行っていたらきっとうまくいかなかったと思うし、もしかしたら最初で挫折を感じた受講生をそのあとの講義に引き込むことが困難となっていたかもしれない。そのかわりに初めの段階では「お絵かきリレー」でしっかり全員を参加させたことがその後の講義をスムーズに展開させたことにつながっていたと思う。このことより、今回この講義を受講して、全体としてよく構成されていることがわかったし、それが非常に重要であることがわかった。どんなに効果的な教授法やおもしろいワークを用意していても、参加者自身が準備できていなかったら十分にその効果を引き出すことができないし、逆に一つ一つのワークが大きなものでなくても全体としてうまくつながっていたらより良い体験を参加者たちに提供できることがわかった。

・　私は本授業で得たイメージが主に二つある。それは本授業に限らず、人生の土台となる「自分おこし」ということと「知」の創造（想像）という二つである。まずは前者について私の考えるところを記したいと思う。

本授業はワークショップの形態で進められている。様々な内容を中学･高校の学級と見立てて、模擬的実践として展開される、体験的に特別活動というものを学んでいる。このように書くとみんなが率先してというイメージが先行しがちだが、実際は消極的な人も多くいることに気付く。授業に遅れてくる人もいる。しかし、それに対して先生は叱ったり、冷たくあしらったりということはない。生徒が自主的に行動できるように何気ない会話を通して、促しているように思う。無理にさせないことで、各々自分で行動するようになり、「自分お

こし」を始めようとするのだなと感じた。私は部活やバイトで良く言えば面倒見がよく、悪く言えばおせっかいであり、自分にとってはやりやすいが相手の成長には阻害因子としての自分がいる。教育者は未来を担うものを育てていく者なので、児童・生徒に「自分おこし」をさせなければいけないと思った。そのためには発言しやすい環境づくりや生徒教師間の信頼関係の構築が必要だと思う。

次に後者の「知」の創造（想像）についてだが、これは前者の基盤が強固であればあるほど、より高度なものとなると考える。つまり、「自分おこし」をしているとおのずと自ら情報を発信したり、何かを表現したりする。それを何人かで行うと既存のものに捉われない新たな「知」を想像することが出来る。本授業で言うとミュージカルの「床」だったり、喧嘩の仲裁にはいる「神父」（自分か演じた）が挙げられる。独創的なアイデアがでると、他のグループはどういうことをするのか、他のグループよりも何か面白そうなことをしてみようと考えるようになると感じた。　したがって、「知」の創造（想像）には独創的な頭の使い方をすることと他者とのコミュニケーションの向上ということが相乗的に達成することが出来ると思った。

次の二つはミニメモでの記述だ。

・　今回の４グループの発表を見て一番衝撃的だったのがクラゲグループだ。前回の発表ではイマイチ何がしたいのかが分からなかったが、一週間で他グループのコメントから課題を見つけ実行したのがすごく伝わってきた発表だった。クラス全員を巻き込んだクイズは進行、構成ともに素晴らしいものだったと思う。

次回は自分のグループが発表するが、今回の他グループの発表を見てまだまだ考えなければならない点が多いと思う、（中略）「いかにクラス全員を巻き込んでいくかを明確にし、それにむけた授業構成を細かいところまで決めていきたい。また他グループとの差別化、自分のグループの独自性を強調していけるような企画をつくるという点に重点を置いていきたい。

・　自分のグループを含めて教師が生徒にどのように学ばせるかの具体性がないと思った。特別支援学校以外は先生が企画を想起し、あとは放任主義といった感じで、生徒に任せっきりという印象だった。教師として何を指導するかがポイントであり、もっと具体的に考えないと、実践的ではないと感じた。（後略）

７．急成長　大詰めへ　2015 年 11 月 24 日

２０日授業は、残り四つのグループ企画のプレゼンだった。そして次回の最終ポスター発表で授業は終わる。今回の記事は、私は忙しかったこともあるが、提出されたレポートなどが多かったこともあって、掲載に少々時間がかかってしまった。

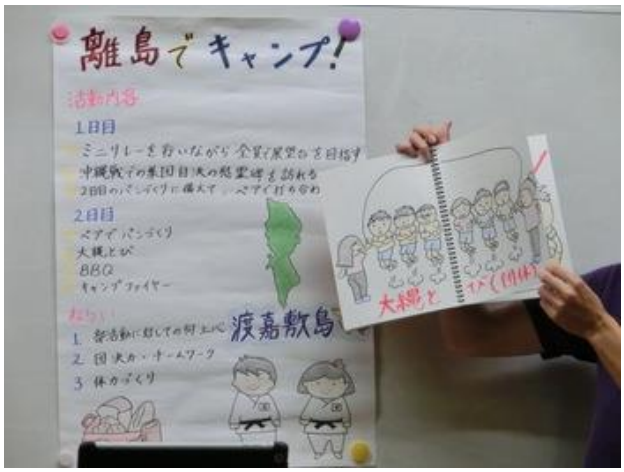
レポートなどを読んでいると、受講生の発見創造が多く、成長の足跡が顕著に見られる。

受講生の多くが、自習時間とか他授業時間への振り替え、生徒任せのレクといった類の、貧弱な特別活動しか中高校時代に経験していない。そのため、特別活動は授業外の余計なものだというイメージさえ持っているものが結構多い。

対照的にそれらの活動を通して、人間関係を豊かに成長させるというイメージは弱い。そんなこともあってか、集団活動経験が希薄で、受講生が口癖のようにいう「人見知り」が構造的に作り出されているのかもしれない。

ここ１０年、こうしたことが著しくなった。１０年以上前は、ある程度の特別活動経験があることを前提に、学級経営を軸に、企画創造活動を展開してきた。テキストも学級経営を軸にした「学校を変える　学級を変える」（青木書店１９９７年）を使用してきた。

この前提が崩れてきているので、今では、授業前半は多様なワークショップを行う中で、特別活動のイメージチェンジをはかる諸活動を展開してきた。その体験をもとに、後半は企画プラン作成と実施に移るわけだ。



そして、その中で、教師の視点をもって、生徒を成長させる活動の展開を実践的に追求する。

その意味では、今ようやく本格的追求のスタートラインに着いたという訳だ。

ところで、成績評価基準として、現場教師水準をあげているが、残念なことに現場での特別活動の「衰退」の中で、現場教師水準が下がってきている現状がある。ということで、受講生作成企画の評価も、すでに現場教師水準を越えているものが結構ある。私が期待するのは、その倍の水準にまで至ることだ。

という視点で見ていくと、レポートのなかで、私の授業構成の特質や、人を動かすワザなどを発見し、深めて考察するものがいくつも登場してきている。

といっても、授業での「体験」そのものにビビったままの状態で受身的姿勢から抜け切れず、自らが企画する立場に立ち切れない人もいる。

私のおすすめは、私の授業をリピートすることだ。かつて、成績優秀にもかかわらず、わざと「不可にしてください」といって、３回受講した学生がいた。そんな学生は激減したが、いまでも２回受講する学生はいる。

幸いなことに、どうやら次年度も担当できそうな気配なので、二度三度の受講をお勧めする。そうすると、教師の眼で、そして人を動かし成長させるとはどういうことかを、一回目よりもはるかに高度に実感できるだろう。

今、各グループは、最終発表に向けて、水準を高めるためにいろいろな工夫を積み重ねていることだと思う。楽しみにしたい。

写真は、２０日の企画プレゼン風景

８．次の飛躍へ　2015 年 12 月 01 日

２７日で、今期の授業が終わった。毎回２コマ分で８回やるという変則的な集中講義ということになっている。

最終ポスター発表。各グループとも一段と素晴らしい企画に仕上がっている。これを見たら、ほとんどの現場教師もタジタジ気分になるだろう。緻密な子ども分析に基づいて、創造的な企画を、実施を可能にする緻密な具体性にあふれる指導プランばかりだ。

ということで、とびきりのものが仕上がり、いずれのグループも高いポイントを獲得した。逆にレポート提出は、今回もっとも少なかったが、それを企画作成が補う形になった。

中高時代、特別活動について印象に残る体験が大変少ないなかで、特別活動のイメージはとても貧弱だった受講生がほとんどだ。対照的に教師の説明を記憶することを中心にした受身的な学習がとても上手い受講生たちが多い。こんな受講生たちは、能動的かつ創造的に、さらに多くの受講生たちと協同して取り組むという、逆のありように大変戸惑っていた開始当初だった。

その姿勢を転換させ、初対面がほとんどの対人受講生間の人間関係を創りつつ、能動的かつ創造的に取り組む活動に乗ってくるようになったのは、半ば近くなってからだろうか。加えて、生徒たちを成長させる具体的な指導という課題に取り組み始めるのは後半だった。

そして、講義を終了した時点で、次のような提案が続出した。

授業最後に、終了を飾るにふさわしい企画をしてはどうか。

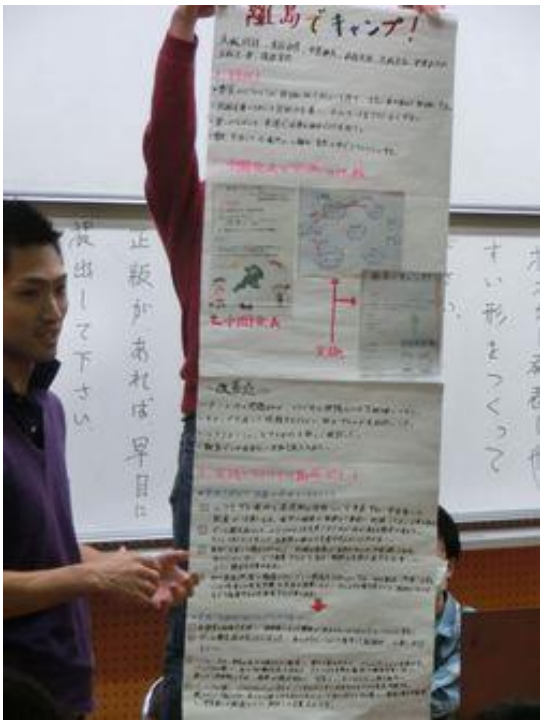
次期の講義にも参加して、さらに深めたい。単位取得の有無は別にして。

浅野宅へみんなで遊びに行きたい。・・・・

こうした提案を私は待っていた。そしてそれを、私が企画するのではなく、受講生たちが自ら企画し実施することを期待したい。

振り返ってみれば、受講経験者が、二度三度と受講して、この授業を盛り上げるというのは、私の授業では、長年の慣行になってきたが、近年、受講生の繁忙のためか、人間関係の希薄さのためか、減少している。４月からの再参加を期待したい。それ以前に何か、企画が自主的にでてくると、なお嬉しい。

いつものことではあるが、今回の授業も、過程のなかで、たくさんのドラマが誕生してきた。ドラマ性溢れるといったらいいだろうか。個人の成長、企画の成長、人間関係の成長・・・。最後に行った、６０名の出席者の誰にあたるかわからない他者コメント欄で、ほとんどの人が、コメント相手を具体的にイメージして書いているのが、それを物語っている。



では、「担当教師浅野へのコメント」を一つだけ紹介しよう。

正直、前半は変な先生と思っていました。ごめんなさい。しかし、ブログ、テキストでの先生のコメント、授業でのコメントを聞いたり、活動をしたりしていくうちに、私たち学生が成長できる何かを持っている方だなと思いました。

授業で出される課題で毎回、考えさせ、他の意見も聴いて何度も考えさせられていき、自分のなかでも成長をすごく感じました。

考えることの大切さ、他者に意見を伝えることの難しさ、他者の意見の新鮮さ、感じることは多く、得られたものも多かったと思います。

特別活動は軽いものではなく、生徒が活動を通して成長できるものでなければならない。このことを意識できた授業でした。

現場に立ったときに、この授業で得たものを

活かしていきたいです。

写真は、最終ポスター発表光景

２０１６年前期

初回　　2016 年 04 月 16 日

　１５日午後。久しぶりの琉球大学授業。今年も前期後期１コマ。体力気力に限りがあるため、今年限りになるか、なお続くか微妙なところだ。

　今回は、導入的位置だ。本番は、６～７月に集中講義方式でする。

　私の感じた今回の受講生の特徴

１）穏やか　最初だし、風変わりな私の授業だから緊張はあるが、すぐに打ち解けてくる。

２）やさしさ　お互いへの配慮が豊かだ。「人見知り」だという受講生もいたが、すぐに吹っ飛んで、仲よく活動に興ずる。

３）真面目　真面目すぎると、私の冗談が通じないが、通じているようだから、心配はない。

　今回は、法文学部・理学部が少なくて、教育学部生が多い。看護の学生がいるのは久しぶり。女性学生が多数を占めるのは、ここ５年間近くの担当のなかでなかったことだ。

　流れは、あいさつ作り→お話作り→変わり自己紹介→人生の価値→リレーお絵描き　　だが、中間にいろいろな活動を挟み込む。こんななかから、受講生がイメージと技とを体感しながら盗み取ることを期待する。

　最後に提出したミニメモからいくつか紹介しよう。

・じゃんけん列車が楽しかったです。チーム分けが上手だなと思いました。様々な方法でグループを素早く作っていて、こんな分け方もあるのかと感心しました。

・今までに会ったことはあるけれど、あまり話をしたことない人とかがいたけど、今日の授業を通して、その人の世さを見つけることができた。

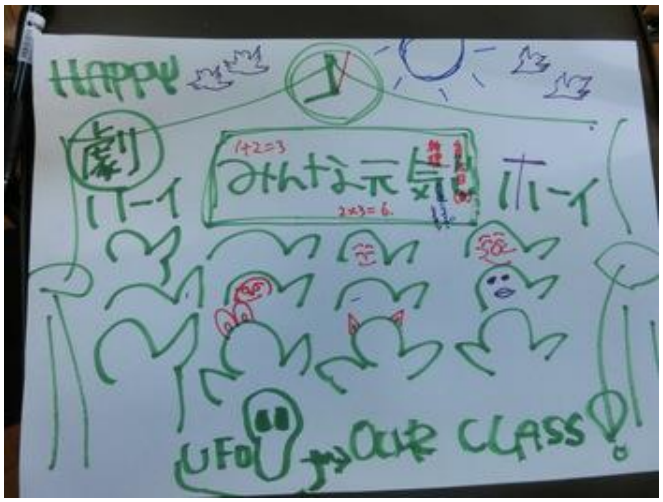
・久々に学活の時間を過ごした感じがしました。とても楽しく、こういう楽しい時間を共有することができると、自然にみな笑顔で仲よくなれるのだと実感することができました。

・話を創造したり、将来のクラスの絵をイメージして友達と回しながら作っていくのはとても楽しかった。人と勝負するのだけが大事ではなく、もっといろんなことを創造していくことが大切なのかなと感じた。

・最初はみんな人見知りと言っていたけど、自分の意見を述べていくうちに、どんどん打ち溶けていって、自分も影響されて話すことができたので、よかったです。

・ダイアモンド形に大切なもの必要ないものを並べた時に、他の人の並べ方と自分の並べ方の違いを見て、価値観の多様性に気づいた。

写真は、「人生で大切なもの」ランキングの例と、リレーお絵かき「こんなクラスにしたい」例



2016 年 06 月 06 日

琉球大学「特別活動の研究」授業２回目　「無我夢中」の境地か

３日の授業は、４月の第一回目から少し間をあけての授業だったが、受講生は結構ノッて、楽しいものになった。２コマ連続の４時間近くの活動だ。

おこなった活動は、「将来設計　尋ね人」→「１０年後はどうなる？　日本・沖縄」→「進路物語を創ろう」→「なりきろう」→「沖縄の教育は、先進国？　途上国？　沖縄独自？」の五つである。

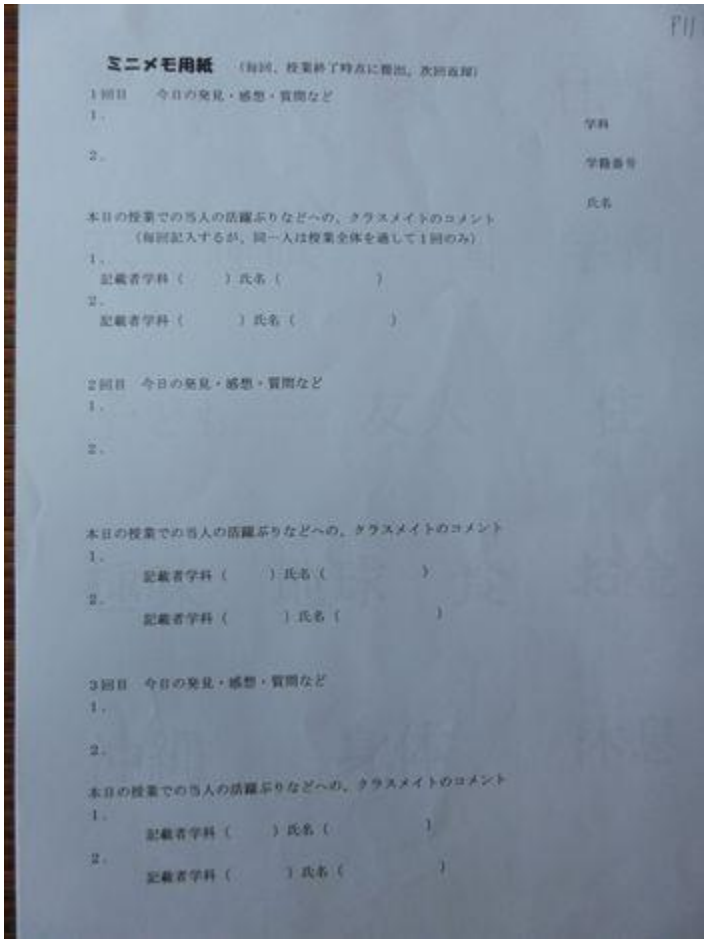
２回目くらいまでは、これらの活動の狙いである多様なものの発見・創造と並行して、受講生相互の関係つくりが重要な狙いとなる。

ほぼ全学部から集まるので、ほとんどが初対面だ。今後の展開は、初対面同士で新しくつくったグループで企画を作り実施していくので、関係つくり、関係の深まりは必須条件だ。

２回目ともなると、私の授業への驚き反応は通り越え、緊張気分も、「無我夢中」の境地になっていくようだ。

こんななかで、特別活動と授業というもののイメージを、まずは体感していく。次回の３回目ともなれば、自分たちで企画するとしたらどうするか、という方向へと考えが進むだろう。

そういう見方ができるようになると、この授業で私が提供している活動のイメージや雰囲気だけでなく、考え方や、多様に提供する技にも関心が向いていくだろう。


ミニメモ用紙　（毎回、授業終了時点に提出。次回返却）

1回目　今日の発見・感想・質問など
1.
2.

学科
学籍番号
氏名

本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント
（毎回記入するが、同一人は授業全体を通して1回のみ）
1.
記載者学科（　　）氏名（　　）
2.
記載者学科（　　）氏名（　　）

2回目　今日の発見・感想・質問など
1.
2.

本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント
1.
記載者学科（　　）氏名（　　）
2.
記載者学科（　　）氏名（　　）

3回目　今日の発見・感想・質問など
1.
2.

本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント
1.
記載者学科（　　）氏名（　　）
2.
記載者学科（　　）氏名（　　）

写真は、毎回の授業の最後に記入するミニメモの用紙だが、ここにも、私の長年の蓄積が反映している。例をあげよう。

１）毎回各メモの前半は当人が書き、後半はクラスメイトが書く。後半の記入者は、毎回変わる。それは、初対面の人同士の関係づくりを広げていく意味がある。授業全体では、十数名の人に書いてもらう。この欄は、当人の授業内での活躍ぶりを知っている人しか書けないので、時間を追うごとに探すのに工夫しなくてはならない。

２）後半の欄を書くことで、教育活動には不可欠になる他者評価を文章で書く練習の意味がある。点数による評価に慣れ過ぎている受講生たちに、あえて文章評価の練習をしてもらっているのだ。

３）後半を当人が読んで、前半の自己評価と突き合わせながら、自分の活動を振り返り、次に生かしていく。

余談１）　記入欄は狭い。これは長年の私の経験で、用紙が大きすぎると、かえって記入量が減り、少ないと感じるほどだと、中味を盛り込もうとする心理が働くのか、かなりの量を書く受講生が増えるということがあるからだ。もし記入欄が少なすぎる時は、「裏アリ」と書いて、裏面に書くように指示している。

こんなことで、ミニメモ欄の記入も２回目ともなると、なかなかのものが登場してくる。そのごく一部を紹介しよう。

・（３番目の「進路物語を創ろう」について）　イメージ、人から出る雰囲気や他人が感じるものは、実際の

私と全然違うのでびっくりしました。ということは、私は他人にこのように全然違う印象を与えてしまっているんだと感じました。とても参考になりました。活動としてはとても面白かったので、学級が始まったばっかの頃とか良いなと思いました。

・（２番目の「１０年後」の活動）　自分の知識のなさを思い知った。それぞれの意見を批判することなく、でも納得いくまで交換したり、わかりにくい割合をクラスの子どもの人数にたとえてくれる人がいたり、考え方・見方の幅が広がった・

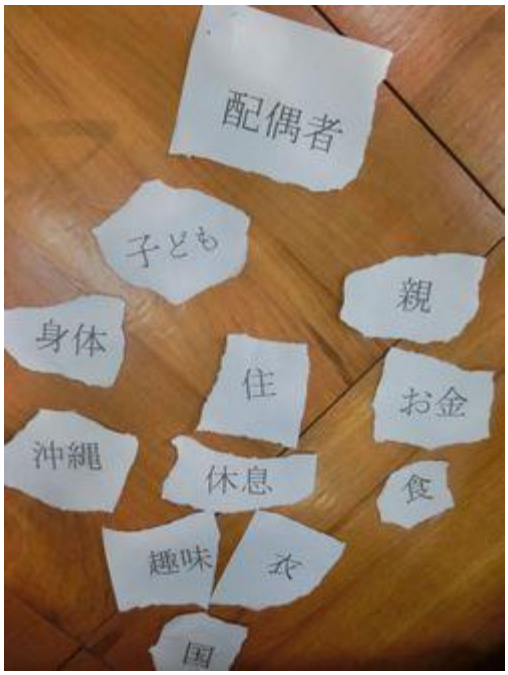
・（４番目の「なりきろう」の活動）　普段見過ごしている身近なものになりきり、気持ちまで考えたことがありませんでした。しかし、意外とストーリーは創れるもので、皆さんのストーリーを聴いていると、面白いと思った。ゴミとかは捨てようなどの気持ちも改めて考えることができました。

レポート提出は任意だが、２回目授業提出の「テキストを通覧して、この授業でやってみたい・使ってみたいアイデア５ケ条」は、７割近くの提出があり、受講生の意気ごみが感じられた。

このブログの授業関連記事に関わって書くことも、レポートの一つだが、毎年、それほど多くないし、授業後半に出てくることが普通だが、今回は、最初から何本もあったのには驚かされた。加えて、中味が面白い。私の授業が受講生の目にどんな風に映っているかを知る点で、私にとっても大変有益だ。

その一点の一部を紹介しよう。

初め、「じゃんけん列車はじめ」と言われた際には少し戸惑ったが、同じ学科の友人同士で固まって座っていたので、このじゃんけん列車をすることにより、楽しみながらスムーズに席を移動することができ、少しは他の学科の方と交流することもできた。その後の、隣の人に全員違う挨拶を回していくものや、ボディランゲージの挨拶を回していくものをやり、とっさに言われるとなかなか思いつかない難しさがあったが、思っていた以上にバリエーション豊富な挨拶があることを発見できた。この場で、私の中では、挨拶をした人より、パスを使った人のほうが印象に残っている。ブログにもあったように真面目なメンバーで､みんな頑張って挨拶を考えて回さないといけない雰囲気があった中、パスという選択肢を判断力や雰囲気を変える勇気ある行動で、大げさかもしれないが、すごいと感じた。



グループに分かれた後の自己紹介では、いつものように、名前と学部、出身地を言うだけでなく、「自分を体の部位に例えると」という項目が増えたことで、よりその人がどんな人なのか知ることができ、より覚えやすくなる方法を学ぶことができた。

お話しづくりでは､それぞれの発想力が重要で､結局はよく分からない方向に話が展開していったが､話が進むにつれグループ内で笑

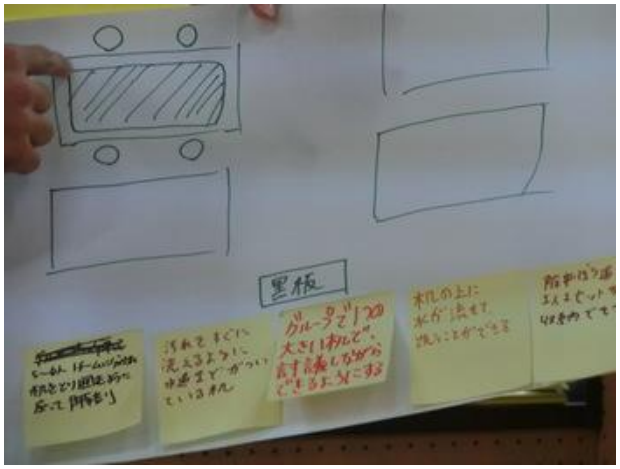
いが起き、知らない人ばかりのグループではあったが、いつもより早く打ち解けることができた。

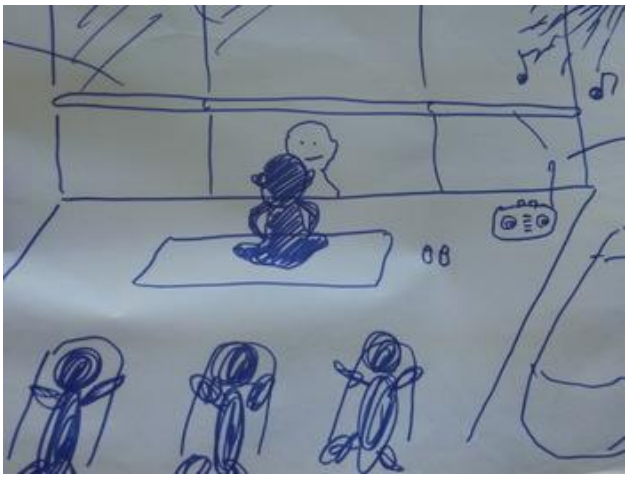
人生で大切にする価値を順に並べるワークショップでは、様々な価値観を持った人と交流することができ、自分の価値観と正反対であっても理由を聞くとすごく納得し、新しい考え方を学ぶことができた。

リレーお絵かきでは、予想していなかった絵が回ってきたりしたので、想像していた絵とは多少違いは出たが、それぞれの個性が出る絵が混ざったことで、面白い絵を完成させることができた。また、このワークショップでは、伝える難しさや、感じ取る難しさも学んだ。

受講生自身が創る方向へと進み始める　　2016 年 06 月 14 日

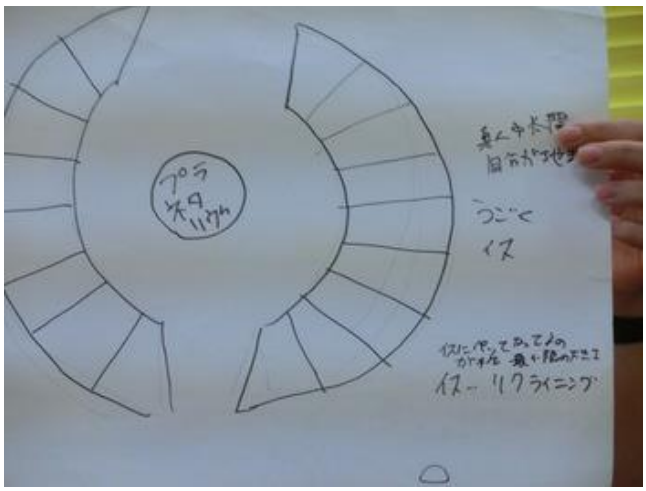
１０日授業。「どんな教室・椅子・机がいいか。配置をどうするか」→「問題打開策を即興劇・ロールプレイで考える」→「サークル・部活・会・NPO などの組織を新たに創る」→「共同文化表現を創る」の流れで進行。

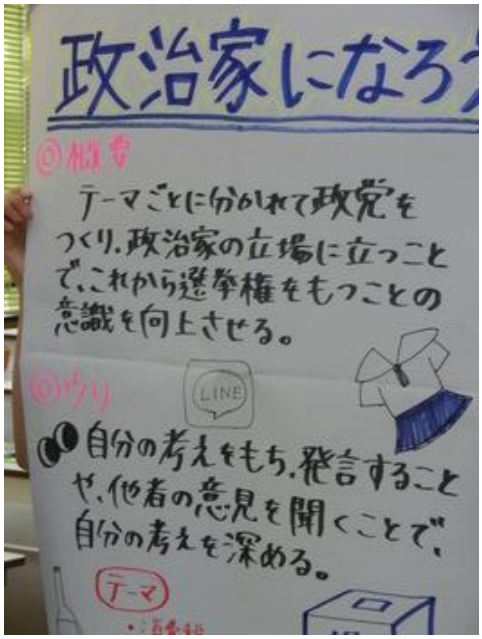


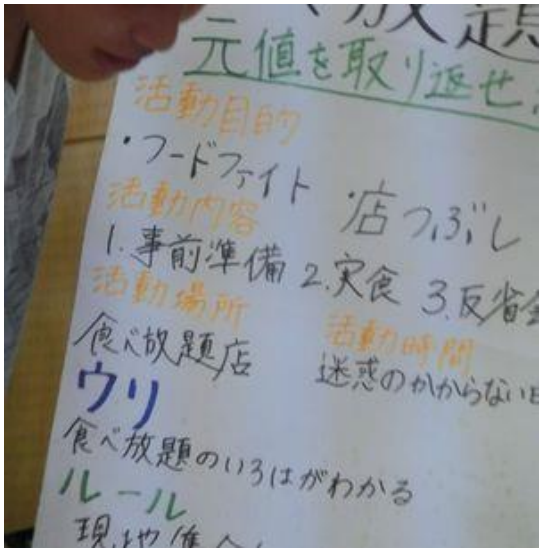


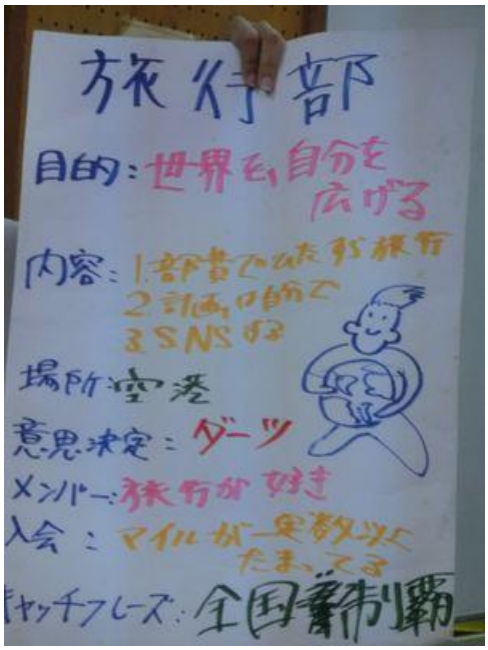
たくさんのドラマが生まれる。「スター」が何人も誕生。最後の文化表現は、わずか２７分で素晴らしいミュージカル「春」が誕生。受講生の集中度・凝縮度が信じられないレベルになっている。

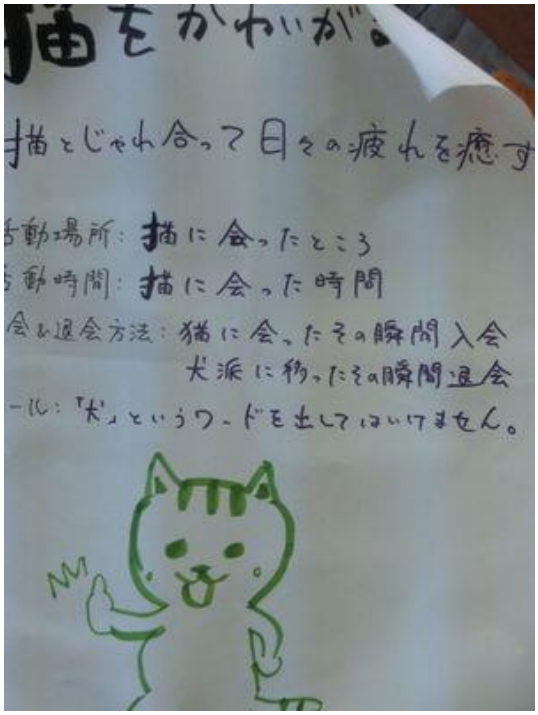
写真は、一番目の活動と三番目の活動のものだ。











レポートには、「先生は、どのようにして数種類の活動を組み合わせているのか。時間配分？教室の使い方？順番や種類の決め方などはどのように決定しているか。自分たちで特別活動を企画する際に参考にしたいのでぜひ伝授してほしい」という授業展開についての質問が登場。

嬉しい質問だ。授業の目的、受講生の人間関係のでき方・深まり方、雰囲気（ノリ）をつくること・・・などと書きだせばキリがない。

そうしたことをまとめたものとして、参考書のなかの「ワークショップ・ガイド」があるので、是非参照してほしい。

他に、テキスト第６章を読んでのレポートが沢山出されたが、その一つの一部を紹介しよう。

「p１１０の「受動から能動へ」に書かれていた、ワークショップでは生徒相互、参加者相互の多方向が中心をなし、そのために参加者・生徒が会場・教室で、従来の一斉前向きの講義講演形式を変えて、どのような位置にいるかに多くの注意を払うということに、なるほどと、と思った。だから初回の授業で教室の机をすべて寄せ円形になり輪になったのかと納得させられた。

第６章を読んで、この授業にはいろんな意図・目的がひそかに盛り込まれていることに気づいた。これから、このワークにはどんな目的があるのか、どのような意味が込められているか意識しながら取り組んでいこうと感じた。」

受講生による企画作成スタート　2016 年 06 月 20 日

１７日授業は授業全体の中間点で、受講生たちが考えた企画アイデアをもとに８つのグループを次のようなテーマで作った。

もちつき大会	生徒が給食メニューをつくる
田舎に泊まろう	星空観察会
政治家になろう	子ども食堂・無料塾
無人島生活	教師と生徒が入れ替わる

人気があって、毎年のように登場するものと、今年初めての新鮮なものとが入り混じる。いずれも、これまでにない独創的な企画作成への取り組みを始めた。

次週の中間発表が楽しみだ。課外で相談しなければならないので大変だが、期待がもてそうだ。

授業最後のミニメモを、何人かのものを合成して紹介しよう。

４回目　今日の発見・感想・質問など　　海空　輝

１．名前覚え大会で普通に名前を聞くだけだったら、全然覚えられないけれど、いままで少しづつ関わってきた人たちと話して、ウリをきくことで、とても覚えやすくなった。

２．グループで意見を出しあうときに発言しない人がいることが多いが、この授業はみんなが発言していて自分も含めみんな成長したと感じた。

本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント

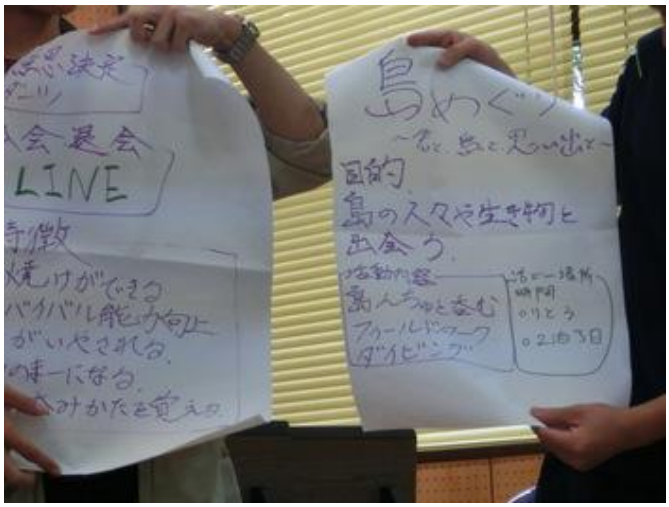
１．実際に子ども食堂に行ったときの話をしてくれて、興味がわきました。　記入者　熱帯　果樹

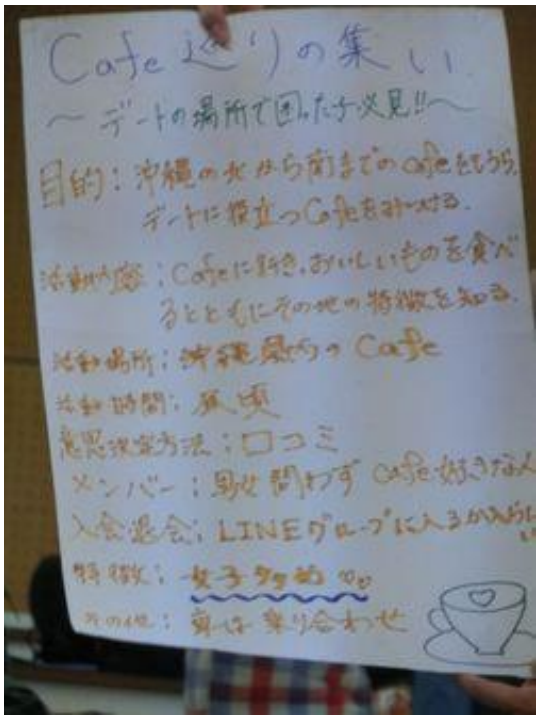
２．意見が行き詰った時に、発言してくれて助かった　　記入者　気持　良人

４回目　今日の発見・感想・質問など　　希望　高美

１．将来、教師として働くとき、生徒の顔と名前をすべて一致させたいから、今から練習していこうと思う。名前を音だけで聞かず、漢字まで一緒に聞くとより覚えやすい。

２．名前覚え大会で、２２名は正直自信がなかったけど、直接聴いてＯＫということで、リラックスして参加できた。ここが先生の授業のいいところだなぁー、と感じました。実際、２２名に名前を聞くと、もう４回目の授業なので、





覚えている人もいるし、みんな話しかけやすく、初めのころとまた違った感覚で話しかけることができた。

３．グループでの企画相談では、７名も集まれば、知恵の宝庫。いろんなアイデアが出てよかった。やはり少しの条件でもみんなが集まると「文殊の知恵」だなと実感しました。

本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント

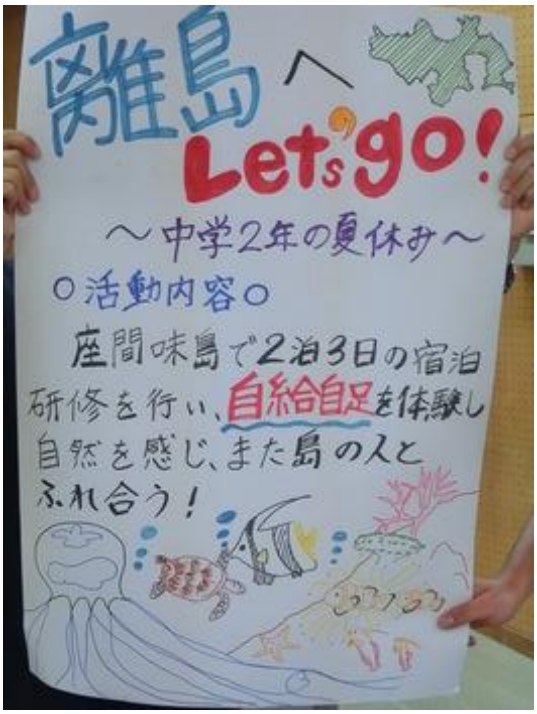
１．学外での活動に積極的に参加していて、意欲的ですごい！　　金城　銀代

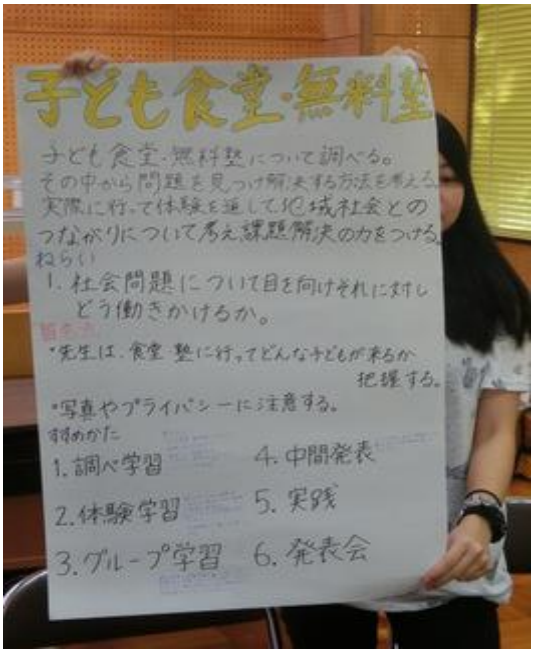
２．いっぱいアイデア考えてくれて、話し合いにいっぱい参加してくれてすごいです。アイデアウーマンです。　　期待　胸膨夫

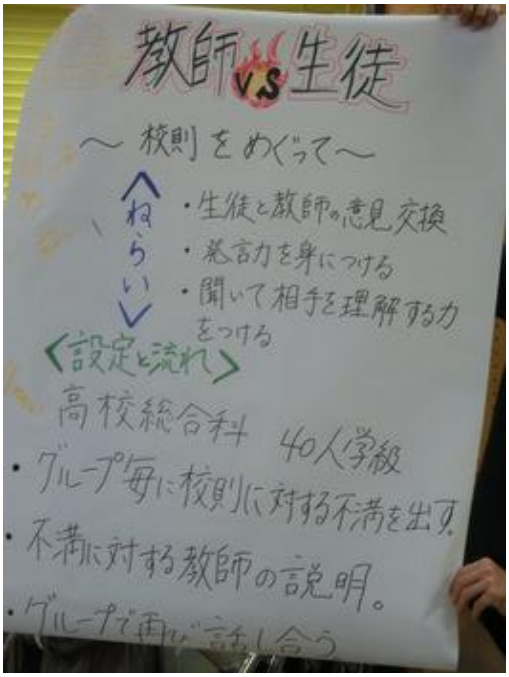
写真は、前回授業の風景

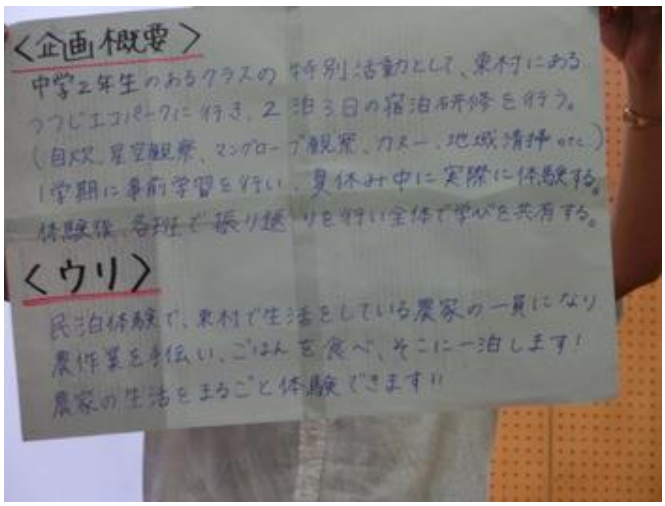
中間発表からプレゼンへ

2016年06月26日

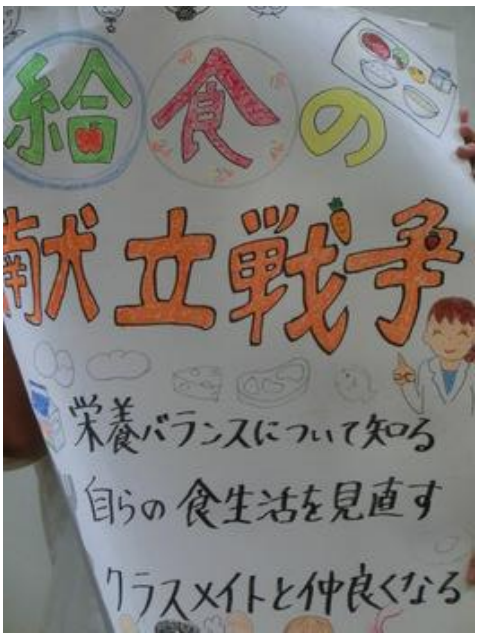


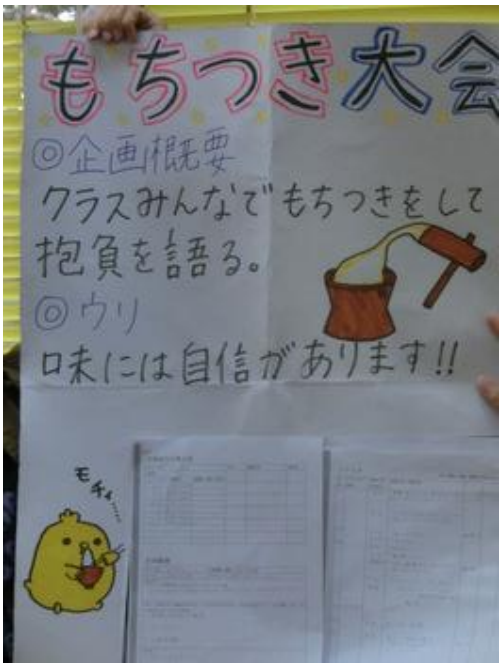

子ども食堂・無料塾
子ども食堂・無料塾について調べる。
その中から問題を見つけ解決する方法を考える
実際に行って体験を通して地域社会とのつながりについて考え課題解決の力をつける。
ねらい
1. 社会問題について目を向けそれに対しどう働きかけるか。
*先生は、食堂・塾に行ってどんな子どもが来るか把握する。
*写真やプライバシーに注意する。
すすめかた
1. 調べ学習
2. 体験学習
3. グループ学習
4. 中間発表
5. 実践
6. 発表会


教師VS生徒
～校則をめぐって～
ねらい
・生徒と教師の意見交換
・発言力を身につける
・聞いて相手を理解する力をつける
〈設定と流れ〉
高校総合科　40人学級
・グループ毎に校則に対する不満を出す
・不満に対する教師の説明。
・グループで再び話し合う


〈企画概要〉
中学2年生のあるクラスの特別活動として、東村にあるつつじエコパークに行き、2泊3日の宿泊研修を行う。
(自然、星空観察、マングローブ観察、カヌー、地域清掃 etc.)
1学期に事前学習を行い、夏休み中に実際に体験する。
体験後、各班で振り返りを行い全体で学びを共有する。
〈ウリ〉
民泊体験で、東村で生活をしている農家の一員になり農作業を手伝い、ごはんを食べ、そこに一泊します！
農家の生活をまるごと体験できます!!

STARTUP
〈企画概要〉
・学級全体の仲を深める
・普段あまり交流することのない人とも交流を深める
・相手の意見を認めつつ、自分の意見も主張できるような力を身につける
〈ウリ〉
輪になって話し合いをできるようにする
・四季ごとの代表的な星座づくり
グループでつくる


給食の献立戦争
栄養バランスについて知る
自らの食生活を見直す
クラスメイトと仲良くなる


もちつき大会
◎企画概要
クラスみんなでもちつきをして抱負を語る。
◎ウリ
味には自信があります!!

２４日の授業では、８つの企画の中間発表があった（写真は、発表ポスター）。それに対する受講生のコメントがすごかった。グループ内だけだと、うまくできていると思っていたのに、第三者の目でみると、多様な見方や提案・アイデアがでてくることに驚くミニメモが沢山登場した。

企画文書のコピーが私にも届けられた。まさに中間であり、これから深化進化していくことが期待されるものだ。「伸びしろ」豊かなものだ。（中間発表段階で、平均１９ポイント。最終では４０～８０になるような奮闘が期待される）

深化進化のためのポイントをいくつか書いておこう。

「生徒の現実と課題への対応」

１）多くのグループが、大変具体的に描かれている。どちらかというと、現実を中心に書いてあるので、「課題」をより鮮明にしていくこと。

２）課題を実現していくためには、どんな風に成長することが求められるのか、その成長のためには、どんな取り組みに出会わせ、どういう役割が果たせるようにしていくのか。そうしたことが、「指導構想」以下の文書に明瞭にされることが期待される。

「企画の創造性」

１）「創造性」溢れる企画が多い。取り組み全体にとどまらず、企画のなかの個々の局面での創造性まで具体化されると、なお素晴らしい。

２）企画立案、企画準備、企画実施、企画発展など具体的過程での創造性発揮を期待したい。

「実行可能にする具体性」

１）未体験なのだから、この面では「伸びしろ巨大」だ。

２）とくに、事前の準備過程。教師間での準備・「根回し」。関係機関・組織・地域の関係つくり。予算計画・・・

３）「段取り」を現実的に実施可能レベルまでに具体化すること。

４）生徒の取り組み組織の具体化。とくに「生徒の現実と課題」に対応して。

全体を通して。

「教師は出来るだけ口を出さないで、生徒に任せる」という言葉がとても多い。では、教師は何もしないのだろうか。教師不要なのだろうか。生徒が自主的に動くようになるために、教師は何をするのか、が不鮮明なのが多い。

「指導構想」の緻密な具体化が必要

これら全体を具体化すると、提出されたものの数倍の枚数字数が必要となろう。そこで、「プログラム」や「シナリオ」などは、特定場面に焦点化して書くことが必要だろう。

来週からの実施が楽しみだ。

個人のポイントゲット数には、4 個～２０個以上と幅が広い。ぬかりなく、希望評価に達してほしい。単位習得に心配がある７以下の人は少ないが、特段の奮闘が必要だろう。レポート締め切りは７回目授業。

もちつき大賑わい　プレゼン・スタート　2016 年 07 月 02 日

１日授業は、４企画のプレゼン。中間発表より、ググッと深化進化。大ウケだったもちつきだけでなく、他の３グループも工夫に工夫を重ねて、創造的かつ、より具体的な展開に、受講生みんなが巻き込まれていく。

提出されたレポートを見ても､深化進化が反映している。

次回は４グループのプレゼン。さらなる深化進化が期待される。そして次々回は最終発表だ。

私の心配事。このままでは、グループポイントをあわせても､単位取得ラインに達することが困難な受講生が数名。グループポイントで「神業」のように一挙に単位取得ラインに達する確信がもてない人は、来週のレポート提出をよろしく。次回がレポート提出最終回。

もう一つ。もちはおいしかったのだが、経費はどうしたのだろうか。多分個人負担しているのではないか、と心配している。私個人は、来週、このグループメンバーに本か写真入れかなどを贈呈して、御礼に代えたいと考えている

が、みなさんはどうするだろうか。

では、いくつかのレポートの一部を紹介しよう。

１）この授業で得た特活のイメージ・アイデア・ワザ

「最初に持っていた「楽しくみんなと関わる」という特活のイメージから「様々な活動を通して、自主性・民主制を楽しみながら身に付け、自分の将来を創造していく」というイメージに変わっていた。特に最後に行った指導構想づくりをすることで、ただ楽しいだけでなく課題・成長・教師の働きかけなど様々な事柄を考えて行っていかなければならないとても難しい授業に感じた。他の教科のように目標があらかじめ決まっておらず、教師自身が考えていくからだろうと感じた。そんな中授業の中で様々なアイデアを得る事が出来た。（中略）
受講者からのアイデアで制服のデザインを考えようというのもいいなと思った。高校などで行われる生徒総会において生徒たちは自分たちの要望を言っていくが要望だけでまとまった案を作るということはあまりない。そこでこの活動を通すことで、生徒たちに企画して思考して案を提出するという社会に出たときに必要になる力を育てる事が出来ると思ったからである。」

「１つ目は、一人ずつ順番に動作や自己紹介をするときに他の人と同じことをしてはいけないというワークショップの時に、パスをありにして、さらに、全体で初めてパスをした子をほめてあげていたことです。このワザは、生徒に無理をさせて特活が嫌いにならないようにし、何もできず、沈黙の時間が続き悪い空気になってしまうのを防げて、パスをした子に対して周りの子がズルだと思わないようにする素晴らしいワザ(配慮)だと思いました。

２つ目は、ペンを落として倒れたほうにいる生徒に発表させるというワザです。これをすることで、なかなか発表者が出ない嫌な空気になることを防いでいました。さらに、そのペンをマイクに見立てることで、当たった人が発表しやすくなるようなワザもありました。

３つ目は、自己紹介の時にただ名前を紹介させるのではなく、自分のウリや自分を体の一部に例えると何かなどそれぞれの個性が出る印象に残ることを紹介させるワザです。これをすることで、ただ名前を聞いただけではなかなか覚えられない子でも、意外なウリや体の一部での独特な答えなどにより、より強い印象を与えることができるし、その自己紹介だけでも多少の個性がわかるという一石二鳥なワザでした。

そして最後は、決して怒らないということです。自分が覚えている限りでは先生はこの授業中１回も怒っていませんでした。これは、特活は楽しく主体的にやるもので、強制されてやるものではない、いやな空気は作らないという信念の表れだったのではないかと思いました。

このように、この授業を通して、いろいろなワザを得ることができました。特活は、強制されるものではなく、生徒が主体的に自分たちで作っていき、楽しく行うものなのだというイメージも持つこともできました。そして、特活は嫌な雰囲気を作らないことや説明や話のし過ぎで、空気を壊さないようにすることも大事だとわかりました。」

２）前回のブログ記事を読んで。

「ブログを読む中でキーワードと思った言葉は「創造性」と「現実的」です。今回の授業は企画自体が創造性あふれるものが多いと先生はブログの中で書かれていました。自分自身、今回の企画のような授業を見たことがないので創造的だとは思いました。（中略）

創造的であることと現実的であることの両立はとても難しいことではないかなと今回の授業作りで実感しました。現実的にしようと思えば思うほど、時間の制限や予算のことなど様々な困難が立ちはだかると思います。自由な発想で思うままにやっていてはその困難を乗り越えることが出来ないと思いました。先生がいうように創造的かつ現実的な授業作りをすることがいかに難しいことか､それを自分は作ることができるのか不安に思います｡しかし先生はブログの中でヒントをくれました。それは現実から出る課題を明確にすることです。私たちグループの課題は「選挙権と被選挙権を同じ生徒が同時にもつことによって､実際に１８歳になって与えられる選挙権の実感が得にくくなる｣ということでした。その課題を取り組むにあたり、それぞれのアイデアを出し合い、「最後の選挙は実際にある政党の公約を用いてやる」という課題を解決するアイデアを出すことができました。現実から課題を見つけ出すことで、創造しながらも現実に戻ってくることができるという、現実と創造の両立ができることに気づきました。」

盛り上がったプレゼン終了　多種多様な物語が生まれる　2016 年 07 月 11 日

８日の授業はプレゼンの後半。いろんなスタイルのものが登場したが、あっと言わせたのは、サトウキビを工夫して絞り、量をはかる取り組み。写真のように、実に沢山のやり方が登場。特別活動の多様さをみんなが実感する。

実際に教師になった時に、どんな実践が飛び出してくるか、今から楽しみだ。

これらの取り組みの中で、受講生全体のなかで、グループのなかで、受講生一人一人のなかで、多種多様な物語が生まれてきている。最終締め切りだったレポートなどに、それが表れている。いくつか紹介しよう。

次回は、いよいよ最後だ、グループ取り組みの最終仕上げのポスター発表。

いままで特別活動に参加する側としてしか､特別活動には関わったことがなかった。しかし、この講義のなかで今度は特別活動を企画する側として、関わっている。企画する側の立場にたってみて、特別活動に対するイメージが１８０度変わった。最初は、楽しそう。めんどくさそう。外に出て活動はいやだな。この授業に２時間も使って意味はあるのだろうか。など、さんざんなものだった。しかし、この特別活動にはきちんとしたねらいがあり、行う時期や時間、用いる器具などなど時間をかけて計画されたものである。（中略）この活動に生徒が自然と自主的、積極的に関われるように見えない配慮がなされているのだということに気づいた｡いつのまにか､特別活動に対するイメージが受容的なものから主体的なものへと移り変わっている。

私は、教師になるからには、人前でうまく話せるようにならなくてはいけない、模擬授業をしっかりこなせなくてはならないなどと思ってしまうことが多いです。また、人に自分の欠点や改善点を指摘されるのもあまり好きではなく、指摘されないためにも完璧にこなそうという思いが強くなってしまいます。知人にも、「そこまで完璧にやる必要ないよ」や「～すべき、～しなければならないとか思わなくていい」などと言われたことがあります。（中略）ダメな自分が嫌でうまくいかない度にその日の自分を責めてしまったりしました。そう思っていることが自分自身を苦しめていることに気づかず、体に異変が起きて初めて、自分はこんなにもストレスを感じていたのかと思い知らされた時もありました。（中略）

読んだ『学校を変える　学級を変える』には、本には、『「あいまいさ」を許容し、温めることができずに、「ガンバリ」「熱心さ」が不足しているというとらえ方ばかりする人は、それらが不足している自分は人格的に教師失格なのだ、自分は「不マジメ」な人間なのだ、といって、「マジメ」に教師をやめてしまうことになりがち』と書いていました。このことも、私に当てはまりそうです。（中略）けれど、今はそんなことを考えずに、約１か月後にある実習では、あいまいさ（失敗や経験など）から徐々に新たなものを発見・創造し、自己を成長させていくことが大切なのかなと考えました。

私は中学、高校を通して特別活動に対して楽しいイメージを持っていましたし、この講義の前半に行った活動に対しても同じことを感じています。　しかし、実際に特別活動を作る側に立ったときに、座学で行う授業よりも綿密な

準備が必要で、難しいものだということに気づきました。座学では生徒たちに学ばせたいこと、生徒たちに達成させたい目標をひたすら教師が説明、確認を繰り返す方法が一般的です。

しかし、特別活動は生徒たちが自力で目標まで到達できるということが重要だと思います。（中略）私がいままで特別活動に楽しく取り組めたのは、教師側の相当な努力のおかげなんだと感じました。また、この講義を通して、グループワーク等はグループの人数も重要な要素であると感じました。クラスの雰囲気によっては(もちろん活動内容にもよりますが)少人数、大人数と都合のいいグループの形は違います。生徒による手立ては当日の教師からの声掛けだけでなく、グループの構成や発表の形式などの工夫も含まれるのだと感じました。話し合い等の生徒同士が関わりあう機会の多い特別活動は、生徒同士の繋がりを強める効果もありますが、その活動を作る側の教師も構想を練るために生徒をよく観察します。（以下略）

特別活動に関する研究を通して，今まで漠然と「いつもの違う活動」とだけ認識していた特別活動が，「普段の授業では得られない体験や考えを学ぶ活動」であることを感じた．生徒側として受けていたときは，レクリエーションという印象が強かったが，教師側として企画してみると遊びのような中にしっかりと学習目標が定められており，学びの場であることがわかった．遊びの中で学ぶという一種の理想形を実現出来る場であるが，当然普段の授業づくりよりも大きな労力が必要であることを身をもって感じた．例えば学外で少し何かするだけでも,移動の方法やスケジュール,統率の工夫に予算面での兼ね合いなど様々な課題が存在する．ある程度は妥協する部分が必要であるが，それは「生徒全員を参加させる」という点を実現するためだと感じた．参加とは，単にその場に居るということではなく，その活動を通して得られる学びを体感出来ているかということだ．体の弱い生徒には身体を酷使する活動は難しいだろうし，逆に活発な生徒は動きの無い活動だと退屈してしまうかもしれない.生徒一人一人に個性があることを前提に，その一見無秩序な集団を同じ方向を向かせるということの難しさと，それを上回る新たに得られる学びの大きさが特別活動を考える上でのある種楽しさのように感じた，

特別活動には「集団」を相手に活動する場合の技術，ノウハウがある．最も常套な手段としては，グループを作らせることだ．つまりは，集団を小さくすることで全体を見ることを比較的容易する．また，小規模集団内での活動を通して仲間意識や他者理解を促進させる効果も期待できる．特別活動ならではと感じたのはその場をコーディネートするというものだ．活動を行う場，というのは集団に大きな影響を与える．その中で目的にあった影響を与える場を作ろうという発想は，普段授業などを考えるときに考えない部分であり新鮮だった．単に部屋の形，という点でも丸と四角で与える印象がかわる．ただ，なかなか部屋の形を変えるのは難しい．そこで，椅子や机の配置で擬似的に部屋を作るというワザをこの講義の最初に見せてもらった．これらのことは教職以外でも有用なノウハウとして一生使っていけるものだと実感した。

盛り上がって終了　2016 年 07 月 19 日

１５日授業で終了した。各グループ企画の最終発表は、とても充実したもので、そのポスターはすべて私がいただいて、後期授業の参考にすることにした。写真参照。

今回の授業も、ドラマに満ちていた。個人のレベルで、グループのレベルで、いろんな物語が、私の耳にも届いてきた。１５日終了後も、別れが惜しくて、記念撮影やユンタクがはずむグループが多かった。

受講生の未来に祝杯だ。またいつかどこかで会いたいものだ。もっとも、夏休みに田舎の我が家を訪問するということもありうるが。

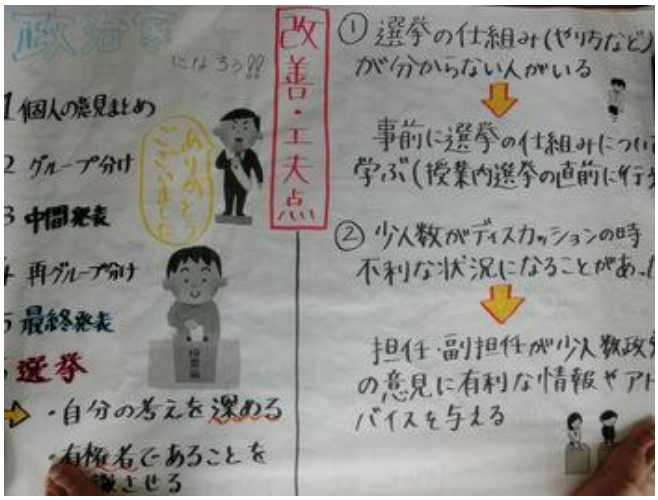
そんなことが反映したのか、最後の「レポート　担当教師浅野誠へのコメント」は充実したものの目白押しだ。膨大な量を書く受講生もいた。これは、ポイント・ゲットの対象外だったが、思わず加点してしまったものが続出してしまった。

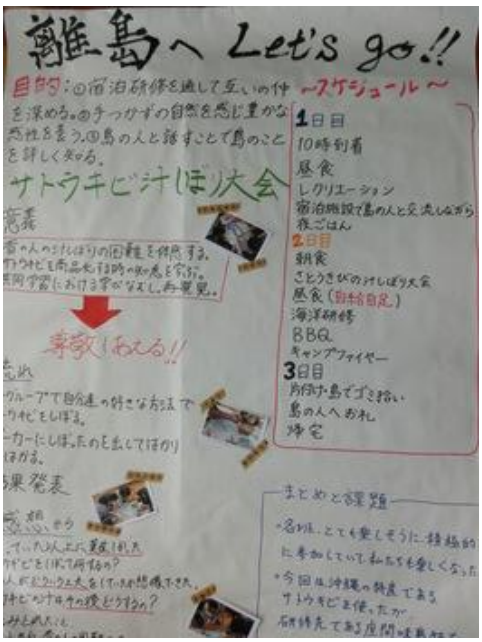
いくつか紹介しよう。実際のレポートの１０分の１くらいしか紹介できないのが残念だ。

・基本的に先生が型にとらわれず自由なので、学生の自由な発想をこわさず常に新しい発見があって発展し続けていく授業のもとになっていると思う。

・大学でこんな楽しい授業を受けれると思いませんでした。自分は教育学部では友達が少ない方で、人みしりだったんですけど、この授業でたくさん友達をつくって、人前で発表することも克服することができてよかったです。

・授業で発表する際に、発表する人を決めなければいけないが、なかなか発表者がでないが、ペンをマイクに見立てて、





発表者を決めるアイデアがとても良いと思いました。その際に、「このマイクをもつと発表したくなる」というふうに言ってくれたことで、発表しやすい雰囲気を作ってくれた。
・初めて自分たちで仲間と話し合って指導案を作り上げるという体験をした。とても難しかったけど、教育について考え直す機会となった。グループ発表の時、周りのグループの内容を見比べると、いくら自分たちのグループで試行錯誤し、納得した内容であっても、他のグループの新たな観点から作成したポスターだったり、発表を見ると、まだまだなと実感させられたし、勉強になった。

・他者から評価するというシステムが、素敵だなと思いました。実際に他者評価のコメントをもらうと、嬉しくて、自己肯定感が高まり、他者を認めるとともに、認めてくれた人に対してこれからも仲良くしたいなという気持ちが生まれました。
・今でこそこのようなワークショップの授業が注目されているけど、先生はこの授業をずっと昔からやっているというのは本当にすごいです。

・生徒自身が主体的につくっていく授業だったので、初めはおそるおそる話しかけていた。しかし、他者と何かを一緒に作りだしたり、意見を交換していくうちに、何かを作り出すことは、難しくも楽しいということを実感した。悩んだり壁にぶつかった時に、いつも支えてくれるのが周りの存在であるということをこの授業を通して学ぶことができた。
・活動の中に考えることがちゃんと組み込まれていて、とても楽しく授業を受けることができました。

・今流行の「アクティブ・ラーニング」、いろいろな本が出ているけど、先生の授業を受ければ、「これぞ、アクティブ・ラーニング」の本質が分かりました。とーってもおもしろかったです。
・即興劇などをやることで、瞬時にグループのメンバーと協力する、アドリブなど先生になるうえで必要なスキルも身に着いたと思います。

・毎週のウェブサイトのレポートや世話役などポイントをなかなかとれない人のための救済措置もしっかりと設けられていて、伸び伸びと授業に参加していくことができたので良かった。
・「離島へ行こう」チームだったが、先日の土日に金武のキャンプ場で実際にキャンプとＢＢＱと釣りと花火をしてきた。最高の仲間と最高の体験ができた。

・もう若くないのにパワフルな講義が印象的でした。こんな年寄りになるのも良いなと本気で思いました。講義内容も、普通の講義ではないような刺激的で凄くやりがいがあった。来年以降もやってほしいという要望はきっと少なく

ないとおもうのですが、ここまでお疲れさまでした。

・特活のイメージが大きく変化した。「ワークショップ・ガイド」の本を読んで、授業内のワークショップでは先生はこんなところに気をつけていたのか、とかワークショップの楽しさはこんなところにあるのかと気づきました。

・特活では、児童にこんな風に考えさせたいというモチベーションではなく、自由に考え意見を交換し、さらに自分の考えを深めていくようにしていく必要があるとわかりました。教師主体ではなく、生徒が何を必要としたいのかを考えて展開を考えていきたいと思った。

・初回は先生が皆を動かしていたのが、最後は受講生が主体的に活動していた。先生も皆の前や中心に立つことはあまりなく受講生に混じっていたことで、皆の力でこの授業をつくっているという感覚になった。「教師が生徒に教える」ではなく「生徒と共に学ぶ」という姿勢の大切さや楽しさを実感できた。

・先生は良い意味で“変わっている”先生だと感じた。生徒の意見を決して否定せず、良い点を評価し、課題点はヒントを与えながら特活の意義や特質を学ばせてくれるところが印象的でした。

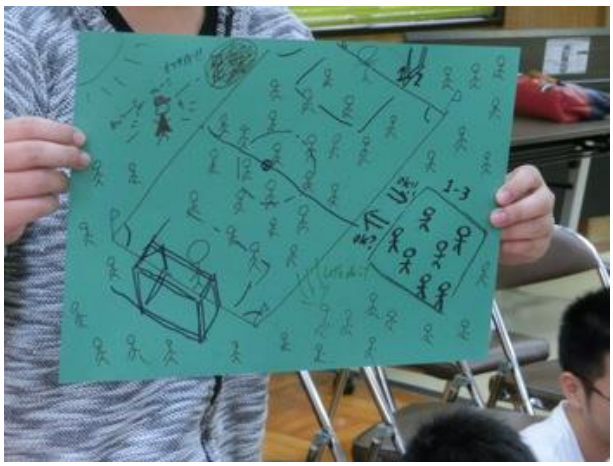
•最初は何が起こるか分からないドキドキ感で不安でしたが､回を追うごとにどんな目的で行うのかがわかってきて、だんだん授業が楽しみになってきました。すると、先生の授業のワザが見えてきて、その効果も気がつけるようなりました。

・最初はふざけている先生だとおもっていたけど、ちゃんと生徒のことを考えている良い先生でした。

２０１６年後期

楽しくスタート

2016 年 10 月 08 日



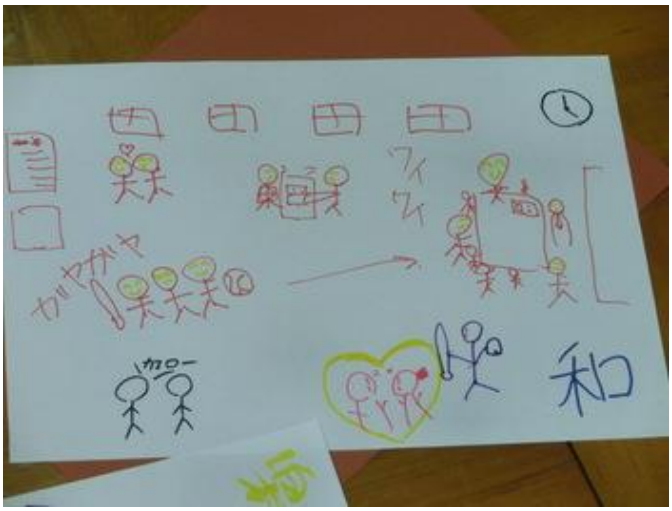
7 日、

第一回目授業。緊張は最初の３０分ぐらいか。ノッテきて、笑いと楽しさ、時には激しい？議論も。そして、なごやかにつながり合う雰囲気もでてきた。

受講生は、数理学科所属男子学生が圧倒的に多いが、他の５つの学科生も、女子学生も含めて、大ノリだ。数理科同士も、互いに知らない世界を知り合って驚いている。

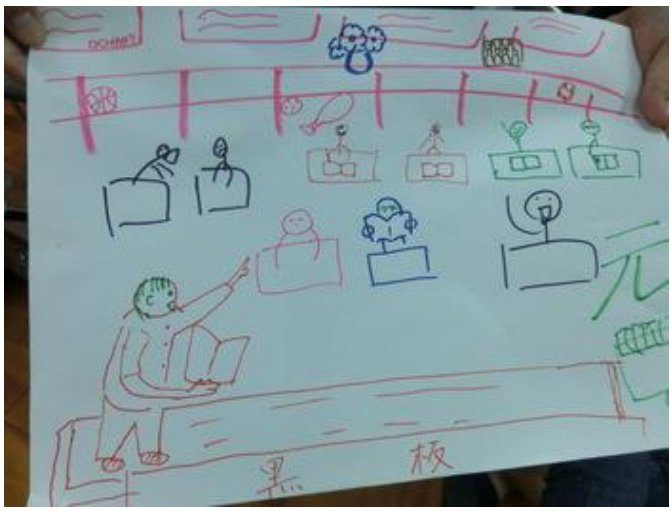
「人生の価値のランキング」は、毎回、新しいパターンが沢山登場する。同じ世代なのに、これほど変化するとは信じられないほどだ。そして、いつも以上に多様なものが登場する。グループで一つのまとめるのは、至難の技だ。実はそのことが議論を生み､相互の考えを深める。それがこの活動のねらいなのだ。

「リレーお絵かき」は、男性比率が高いことを反映しているようだ。できた絵に漢字一文字のタイトルをつけるのだが、これまた、前代未聞のタイトルが登場。常・米（べい）・元・怠。無論、定番の笑・楽・学・輪・和などもあるが。



写真は、リレーお絵かき「こんなクラスにしたい」の作品

授業最後に受講生から提出されたミニメモを読むと、最初から、諸活動から学び、「盗もうとする」気合が入っている。期待がもてる展開になりそうだ。いくつかを紹介しよう。



・今までにない講義でとてもおもしろかった。このような講義なら、初対面同士でもすぐに仲良くなれるなと思いました。

・座学の教職関係の講義と比べると、他の人のアイデ

アを聞けるので、私自身の考えを発展させるチャンスをつかめそう。

・人と人との関わりを強くするゲームが一杯あったので、どんどん盗んでいきたいと思いました。

・皆で意見を交換したり、一つの物を仕上げたりすることは楽しかった。それぞれの個性も見えて良かった。

・「これはつい思ったことを口に出しちゃうマイク」といって、ペンを回してただ何かを話してもらうだけでも十分レクとして楽しめるのが、意外で面白い。

・様々なワークショップをしたが、それぞれのワークショップの特徴の違いを発見することができた。

・大切な順序が親とかよりも金っていう人が意外と多くて、人それぞれ違う意見があるので、納得することもあった。

・リレーお絵かきで、他の人の理想を読み取って描き足していったり、自分の理想を描き足したりすることで、話すことはないけど、意見交換をしているようで楽しかった。

受講生全員が、中味のある発言・活躍　2016 年 10 月 17 日

２回目というのに、「なりきろう」「沖縄の教育は？」では、全員が発表発言。「将来設計尋ね人」「１０年後はどうなる？」「進路物語を創ろう」でも、オリジナルな物語・発言が続出。

これまで、この授業は６０名余りでしていたが、今回は、その半数だから、一人一人の出番が増えるし、お互いの関わり合いの濃密度が増すのは当然だろう。２倍以上の濃密度かもしれない。

私も授業前・休憩時間の受講生とのユンタクで、いろいろと発見。毎回、父母や小中高校の担任が、私の授業をとったという受講生が現れるが、それは授業の終盤だ。しかし、今回はもう登場した。まもなく祖父母が受講生だったということがでてきそうな気配だ。

それほど濃密だけに、ゆったりと落ち着いた発言が出てくる。緊張も早めに解け、すぐに本題に入って、オリジナルな発言が続出する。「沖縄の教育は？」では、先進国と沖縄独自双方を兼ね備えているという立場が一番多いという、これまでにない分布で、発言も、これまでに聞いたことのない意見が続出。今回の受講生の特質なのか、時代変化なのか。自分なりに考えて、オリジナルなものを出すのが、普通になってきたのか。これまでの詰め込み型受身型学習ではもうだめだという考えが広がっているように見られた。

今回もミニメモとテキストを通覧してのレポートを紹介しよう。レポート提出は任意なのだが、なぜか、９０％近くが提出している。しかも、テキストのなかから選ぶにとどまらず、自分なりに活動を創造したものを書く学生が何人もいた。じっくり考えて書いたものが多く、例年になく、２ポイント以上ゲットというものが現れた。

ミニメモ

「（途中でしたゲームの）列くぐりは、案外難しくて、考えて動く人や勢いで動く人など、少しわかると、みんなで

ワイワイできて楽しめると思いました。グループの進路物語では周りからの印象を知ることができました。その人について考えるので、仲を深めるいいきっかけに作りに使えると思いました。「なりきろう」では、はじめは無茶苦茶に感じましたが、普段見過ごしているものについて考えるのは、感受性を高めることや、表現力や思いやりを見つけることにつながるかもしれないなと思いました。」

「進路物語で、自分が予想していたのと全然違うことを書かれていたりして、とても意外で他の人が自分のことをどのように考えているのかがわかって面白かった」

「沖縄の教育討論の良い点は、“立って行う”というところだと思った。他人の考えを認め自分の考えが変わった時に自由に移動、また、坐った討論だと、発表しない人もいると思うが、今回皆が発表して、色々な意見が聞けたので楽しかった。」

「みんなそれぞれの意見があって、一人も同じテーマで同じことを言わなかったのですごかった。自分と全く異なる意見があっても全部を聞くと、なるほどと思うところもあって自分のためになった。」

「（クラスメイトへのコメント）　自分のペースで発言しながら、その場の流れを読み取って、話し合いを上手に進めていたのに感動しました！」

レポート

・目隠し案内

２人ペア（３人も可）、１人は目隠しをし、もう１人が先生の指示に従って教室内を歩き回る

（目隠しする人はペアの腕や洋服などを持つようにする）

他のペアとぶつかってしまうとその場でジャンケン、負けたペアは場外へ

（他のペアをよく観察する（後に自分のペア以外の人の良かった点を褒める時間があるため）

最後まで残ったペアの数組から、パートナーの良かった点を発表する

狙いは、相手の褒めるところを探すこと（見ため以外を褒めるので目隠し）と、目隠しの不安をパートナーに全て託すことでお互いに信頼感を生むため

・「私の一週間」（テキストｐ５のアイスブレーキングと関連）（オリジナル）

二人のペアを作る。例えば「先週の金曜日から今週の金曜日までにあった出来事について３分ほどペアの人と意見交換してください。」といったテーマを出して意見交換する。これはかなり大雑把な例。次のように条件を付けてもいいだろう。

・先週の金曜日から今週の金曜日までにあったうれしかったこと

・先週の金曜日から今週の金曜日までにあった悲しかったこと

などといったような感じ。時間が来たらペアを変える。ペアの人の一週間の情報が色々と聞けるので、色んな発見がありそう。

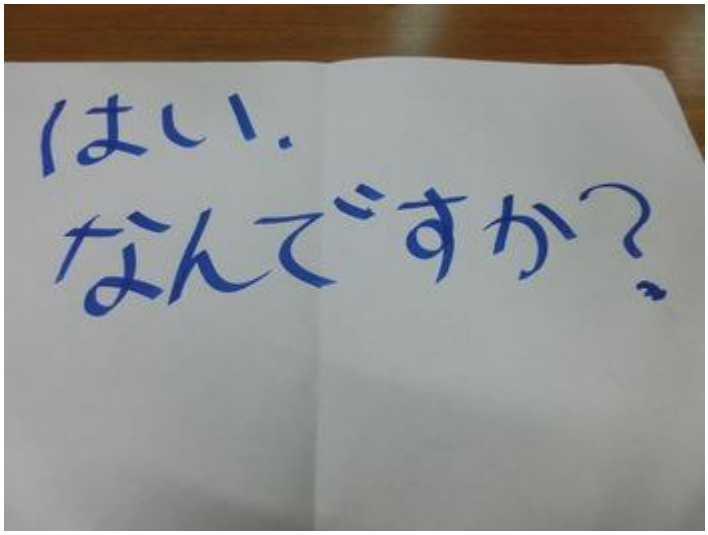
知性だけでなく、感性・身体性も、相互にからみあわせて　2016 年 10 月 24 日

２１日の授業も多彩な展開だった。受講生の反応も、最初の驚きの雰囲気から徐々に自然体で楽しむ方向へと進んでいる。そして、受講生自らが企画し運営する方向へと確実に進んでいる。

教職も含めた人間関係をベースにした仕事は、リクツや知識を中心にした知性だけでなく、相手や周りから発信するものを受け取り、自らも創造発信していくために、豊かな感性身体性を築くことが求められる。

ところで、いつもの授業では受講生の三分の二ほどが、「私は人見知り」と表明するものがいるが、今回は、その言葉を耳にしない。不思議なことだ。

今回の授業は、いつも同様、３０分のミュージカルつくりが圧巻だった。しかも、トーンがまったくこれまでと異なる。コミカルというか、ノリというか、勢いというか、なんだろうか。そのあたりは、受講生の書いたミニメモを見てもらおう。



タイトルは、「はい、なんですか？」（写真参照）

なんとも不思議なものだ。ある受講生が、とっさに提案したものだ。

では、ミニメモを紹介しよう。

「自動車と運転手」

・車になった時の眼をつぶる恐怖からか、ペアへの信頼感が生まれた。あまり関わったことのない人同士など、ペアの作り方を工夫すると、意味ある体験にできて使えるかとも思った。

「教室設計」

・私たちのグループは全員がそれぞれのイメージを書いて、その後にそれを無理やりつなげるという作業をしたので、予想してなかったストーリーができて面白かったです。（写真参照　　受講生歌を作曲する授業）

「けんか対処」

・ミーティングを重ねていくうちに、“どんなことが起こりそうか”“どういう風に解決したらよいか？”というのを、堅苦しい話し合いではなく、楽しみながらできるというのが良かったと思います。

「部・サークルつくり」
・本当に部活をつくるようなことができました。教員になった時に、部活を作りたいといった生徒がいたらルールを決めることなど重要なことを知ることができました。

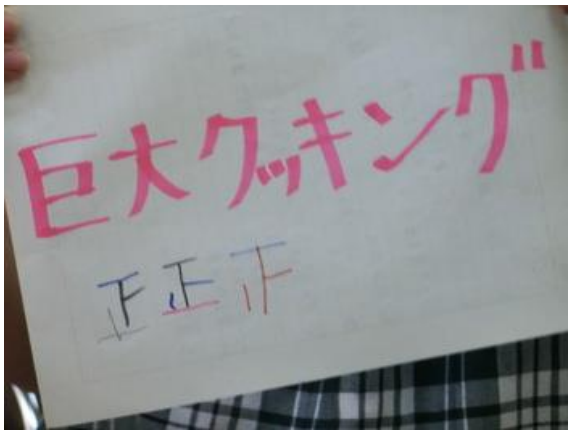
「ミュージカル」
・最初はグチャグチャでしたが、だんだんと形のあるものになってきて、最終では落ちもできた、うわすごい、チームワークができてると思いました。
・グループそれぞれの物語があって面白かった。考える時間が全然なくて、即興だからこそアドリブ感があって良かった。
・全く何をやっているか自分たちのグループのことでもよくわからなかったけど、皆でとりあえず通してみると、クラス全体で謎の一体感がうまれたのが不思議で面白かったです。

他に、レポートのなかからいくつか紹介しよう。
「先生の授業は、一見、発言しやすいような雰囲気を作るためにゆるくやっているように見えて、とても深い授業であると分かりました。それこそ受ける生徒によっては人生のプランを変えるような深い授業です。」

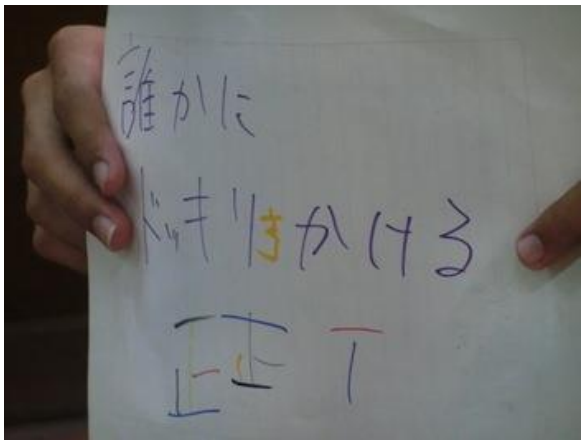
「沖縄の教育は絶対に途上国だと思っていた私の意見も討論が終わる頃には、絶対に、と言い切れるだろうかと疑問が生まれはじめていた。討論とは自分とは異なる意見を持つ者が居るから成り立つことであり、各々が発言しなければならない。今回のスタイルはまさにそれが実現されたような討論だと感じた。沖縄の教育についてこんなにも多くの意見を聞くことが出来て良かった。およそ 20 年間同じ沖縄で同じような教育を受けているはずだが、その教育の捉え方は様々で、これまでの教育を踏まえたうえでのこれからの沖縄の教育についての考えを聞くことができ、とても刺激的であった。」

「親や先生方が引いてきたレールに乗っていると、勿論それは一世代前の物です。社会は勿論動いていて、先生の使う「激動」という言葉にもびくっとしました。自分の人生は自分で創造しなければいけないとも思いました。まさか教職の授業で「本当に自分は先生になっていいのか？」と考えさせられるとは思ってもいませんでした（笑）。」

受講生の企画立案段階へ　水準の高いグループ討論　2016 年 10 月 31 日

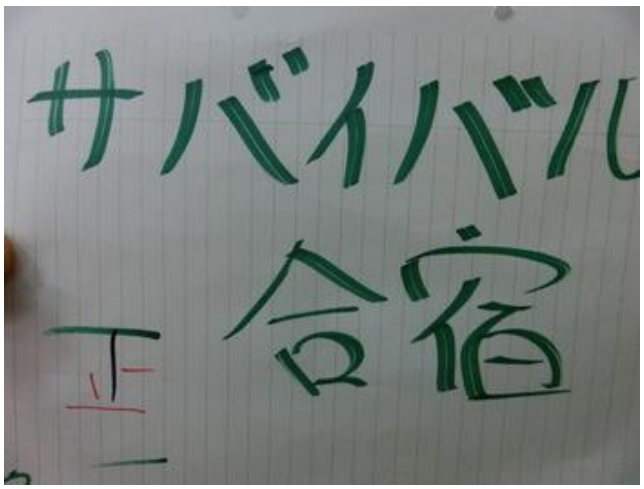


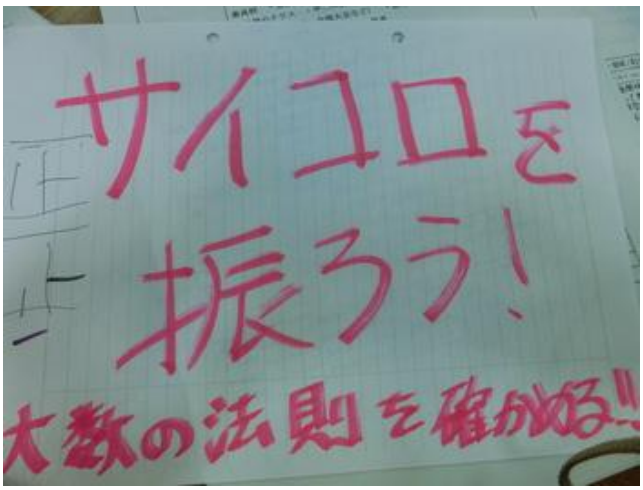
２８日は、いよいよ授業の大きな峠。学生自身が特別活動企画を創りだす段階へと進む。



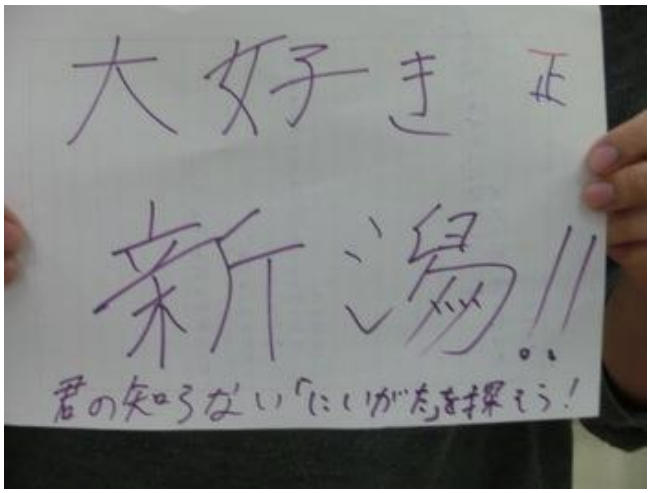
最初に、チームを作ることに向けて、受講生全員が相互に名前とウリを覚える大会。前期までは６０人余りの受講生だったので不可能だったが、今回は３０名余りなので、ほぼ全員が可能になる。　そして、企画アイデア大会。いままで見たことがない企画が続出。多様な角度からのアイデアだ。

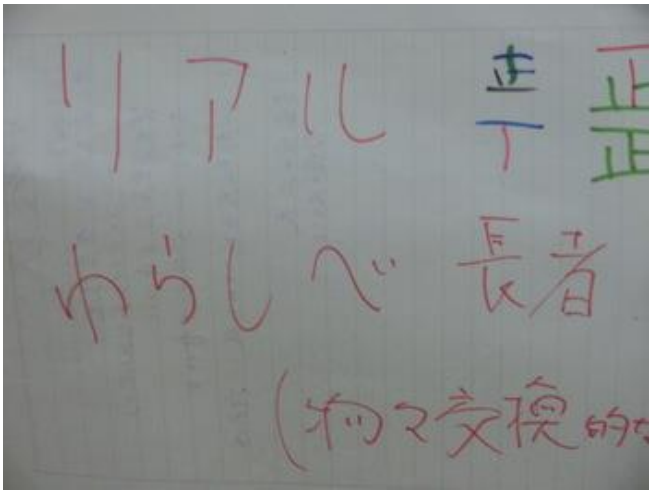
そのアイデアをもとに、チーム結成。写真のように、６つのグループができる。





チームで、課外時間も含めて企画案を作成に入る。まず対象生徒の設定とそれに絡み合う企画作成。私が、その点を最初から強調したものだから、教育活動としてもかなり本格的な企画創造へと突入。ミニメモにもそれが反映して





いる。今回のミニメモは、レベルが高いのが多い。私をうならせるものも登場。

紹介しよう。

・授業を生徒の何かしらの成長のために作ることがとても難しいと感じた。様々な意見が出たが、ねらいに沿って生徒の成長があるかどうかをグループメンバーと真剣に話す良い機会であった。いろいろな方法と工夫で生徒の成長がうかがえると感じた。

・グループ内での共同作業で、巨大クッキングと特別活動をつなげるのが難しくて、話し合いの終盤で根本的に対象を変えてみると、意外に結び付けることができた、

・特別活動の企画は、予算や現実性、意義を考えるのが難しかった。話し合いをどうスムーズに進めるかや、意見の出し方など、この活動は内容自体よりも他の部分で得るものがありそうだなと思いました。

・話し合いの大変さを深くふか――く感じた、意見のくいちがいをどう克服するか。皆と自分との問題解決の段階の違いに動揺した。話し合いが進まない。

・企画するところから想像を働かせ、グループで話し合いをして、色々な意見がでた。自由に発言する人や、プレゼンを想定していた人など、様々な観点から発表があり、一つの小さなクラスのようで、この人達と上手く足並みをそろえているのが先生なのかもしれない。
・一番は誰にどのようなねらいをもって授業を作るか。その方法である授業内容から先に決めさせて、その後、授業のねらいと対象を決めさせた先生の意図がつかめません！　どういった考えをおもちで？？

最後のものに、私は、次のようにコメントした。
―――なるほど。このやり方もありですね。ちょっと難しくアプローチしにくいと感じる受講生がいるかもしれませんが、一考の余地ありですね。感性身体性から始めて、知性とからめるのが、今の流れですが。

少し付け加えよう。
生徒の課題分析と活動内容設定のどちらを先行させるかという問題だ。実際の教育現場では、両者がからみあっている。生徒にさせたい活動、慣行になっている活動を、生徒の課題にからみあわせるのだが、状況によって、どちらに重点をかけるかが異なってくる。では、今回はどうだろうか、という問題だ。
だが、その前に、大きな問題がある。受講生に即していうと、こうなる。
受験校から来た学生が多いのだが、受験校の多くは、特別活動が貧弱で、「自習」やスポーツの時間というイメージさえもつ受講生が、かなり多いということを、過去の受講生が出したレポートが示している。もう一つは、これまた過去の受講生が示しているが、受験中心の中高生活を送ってきた学生が多く、自分の事例をもとに、企画を考えがちであるということである。

この二つは、生徒把握、特別活動の両者のイメージ把握を狭いものにしがちだ。その点で、1～3 回目に受講生を驚かせるような活動を体験してもらっている。また、テキストの 6 章を読んで、「生き方」のイメージの転換を期待している。今回もレポートのなかで、ストレーター人生について見直すことをめぐってのレポートが多いことがそれを物語っている。

さて、これから、どんな企画が作成提出されるか、期待をもって見つめていきたい。

5 回目の授業　　2016 年 11 月 07 日

４日の授業は、グループ活動と、企画の中間プレゼンテイション。

６企画のいずれも順調な進行とみえる。だが、自分たちの受けた特別活動を越える構想をどのように提起するか、生徒の成長をいかにはかるか、という点で「のびしろ」が沢山あるものだ。レク・スポーツといったレベルよりはいいが、その企画で、生徒が、情熱を持って取り組み、新たな世界を発見創造していけるようなものにするには、どうしたらいいか。

中間発表に対する、グループ外からのコメントには、鋭い提案が含まれている。それらを受けて、次週・次々週には、現段階を倍する水準にまで引き上げられるかどうか。大いに期待している。

授業終了後に、ジャグリング・サークルで活躍している受講生の一人が実演をしてくれた（写真）。

では、例によって、ミニメモ・レポートをいくつか紹介しよう。

•生徒やクラス間に何らかの成長を与えるという､特別活動の意義と巨大クッキングを絡み合わせるのは難しかった。グループでも良いアイディアが浮かばず､思うように話が進まなかった｡また巨大クッキングをどのように実演するか､何を作るのか、そもそも作ることは可能なのか、予算の問題など完全に行き詰ってしまった。授業も終盤になってきたときに、対象を定時制高校としてみてはどうだろうかという意見が挙がった。その一声で私たちはこれまでの視点を変えてみた｡すると意外にも特別活動と巨大クッキングを絡み合わせることが出来たのだ。私たちはまだまだ考えなければならないことがたくさんあり、課外時間も必要となってくると思う。

・根底にあるのは、これまで特別活動としてなにか“おもしろい”と思える活動をした経験が少ないからではないかと思う。

実際高校のときに、１年のクリスマス会では、お菓子をもちよって、みんなで景品を準備してビンゴをして、とい

う会になったのだが､その後英語の授業中にくじ引きで渡す相手を決めてクラス全体でプレゼント交換をするというイベントを先生が行ってくれた。そのイベントはとても好評で、授業中にやったために「学校でこんなことやってもいいのか」という不安も無くなったこともあり、２年、３年になるとルールを自分たちで変えながら加えながら、プレゼント交換がクリスマス会に新たに加えられた企画となった｡このように何か経験してみないことには､それを模倣してみることも、新しく何かを考えてみることも難しい。今授業で実際に企画をしてみて感じることは、生徒のためにどういう目的をもって企画すべきか、どうしたらおもしろい企画になるのかというのを考えるのは大変なこともあるが､何よりもおもしろいと思える｡そういう企画の経験も子どもたちにしてもらいたいと思うし､そのためにも様々な特別活動に子どもたちが触れられるようしていかなければならないと思う。

・このままでは、家庭科とかわらないという事に気付かされた。特別活動として行うからには、生徒が主体的に動くようにするための工夫をしなくてはいけないと思った。

前進への熱いドラマが広がる　2016 年 11 月 14 日

先週の中間発表を経て、今週と来週はプレゼン。

見たことがないものが続々登場。中間発表後のグループ活動の大化けドラマが表面化。

音楽を聴いて、英語の歌詞の聴き取り大会と思えば、それは準備体操で、最後はどんでん返しのびっくりハッピーバイスデイ。仕掛けているメンバーがターゲットとは！　みんながびっくり。

サバイバル・キャンプ　無人島で食べ物探しの結果は、蛙。蛙を食べる初体験。椅子取りゲームの見たこともない新バージョン・・・・

X アドベンチャーという名前のペアに与えられた職業にかかわる必需品集めの交換大会。見たことがないゲーム。それを通して中学生にキャリアについて考えさせる。凝りに凝ったゲーム

これらのプレゼンに至るまでに、熱いドラマがグループ内で生まれているようだ。

来週のプレゼンも期待できそう。それに、最終日の余白時間の特別企画に１０人近くが立候補。

まさにドラマチックな最終盤だ。

いつものように、ミニメモ・レポート紹介だ。

・前回のブログ記事では、皆が楽しめる活動を考えるのが難しいのは、実際にそのような経験をしていないということが根底にあると書かれてあり、深くその考えに納得しました。そして、何か経験してみないことには、それを模倣してみることも、新しく何かを考えてみりことも難しくなるという意見にすごく納得しました。

・「どっきり」という内容は簡単にみえて、とても難しいもので、話し合いがなかなか進まなかった。特に自分が考

えている「特別活動の研究」の授業のテーマである「主体性」をどう取り入れるかが難しい。生徒役が勝手に進めていくことは簡単だし、やりやすいのだが、これでは、ねらいで生徒の成長させたい所も何も変化がないので、話し合いの結果、なんとか生徒が行動できる状況をつくるアシストを先生がするということでまとまった。他にも一人でも不快にさせてはいけないし､できればハッピーになる内容のどっきりを考えないといけないので､何回も書き直した。

・教師は“授業の目的”がはっきりしていないと自分が何をしていいのかわからないように感じた。ただゲームをするだけでは遊んでいるのと同じような気がした。中途半端では、思い出にもならない。遊ぶなら思い出になるくらい遊ぶ、授業なら目的をしっかり最初に伝えてそれに沿って進めていきたい。

・「この授業で得た特活のワザ」レポート　　私がこれまでにこの授業で得たワザは、テーマなどを具体的にせず生徒の想像力や発想力を使うということだ。例えば、ミュージカルのときのテーマ設定である。生徒にテーマを出させて生徒で決めて、そのテーマをもとにグループで言葉を考えていった。テーマが「はい、何ですか？」だったこともあるが、具体的でないので自分の感性や直感を信じてやるしかなかった。また、お絵かきリレーでは回ってきた絵を見て、その人がどんなことを思い描いているのか想像しながら絵をつけたしていった。

これらのことは、普段の学校生活では身につかず､特別活動ならではのことだと感じた。初めはとても戸惑ったが、この授業では何でもアリになるので思い切って行動することができた。ふわふわしたイメージで、それをどうするのか生徒たちに考えさせることで面白い意見や新しい考えが出てくる。また、他の人とコミュニケーションをとることが身につくだけでなく、知らない人でも「この人面白い人だな」と思い、すぐに仲良くなれる。さらに、知っている人でも意外な一面を発見することができる。つまり、生徒は楽しめてプラスになることがあるということだ。

また、授業の内容は今までにやったことのないことや想像もしなかったことの方が得るものはあると考える。生徒は今までに経験のないこととなると、自分で想像して考えて行動するようになると思う。こういうことの積み重ねが人間性を豊かにし、もし何か問題が起こってもてもすぐに対応する力がつくと考える。

あと一つ私が得たワザは、一人ひとりに質問をしていくようなことをすることだ。名前とウリを覚えていくゲームがその一つだ。普通、知らない人には話しかけにくいと感じる人が多いと思うが、話しかけていくことを取り入れたゲームなら話しかけやすくなる。そして、こういうゲームで自分から話しかけていくことに慣れていければ、ゲームでなくても知らない人に声をかけることに抵抗がなくなる。学生のうちに人見知りが治せれば、社会人になったときに困らなくていいと思うので、生徒のためにもこのワザは教員になったときにやっていきたいと考えている。

充実のプレゼン　2016 年 11 月 20 日

１８日は、前回に続いて、３グループのプレゼン。各グループとも、企画構想に二転三転の大きなドラマを経ただけに、楽しめると同時に、考え抜かれたものだ。

デザイン性豊かなホットケーキを作る

沖縄クイズ作成大会

パスタを組み立ててタワーを作る

いずれも、前例がないアイデアに溢れており、皆が楽しんだ。加えて、その取り組みを通して、生徒が成長する工夫が込められている。それは、次回の最終ポスター発表で公開されるだろう。

前期までと比べて受講生定数が小さくなったので、各グループのプレゼンは４５分とゆとりをもって展開できることが、とてもいい。

次回は、最終日。もしかすると、私の琉球大学の最終講義になるかもしれない。ならないかもしれないが。

いつものように、ミニメモとレポートをいくつか紹介しよう。

・「みんなで一つのものをつくろう」というテーマの企画では、最初は大人数でトランプをつくろうというもので、ただ作るだけでなく、ピカソ賞やスピード賞が用意されていて、みんなで力を合わせて作ろうという雰囲気になった。また、ホットケーキつくりでは、デザートを作るということで、皆のテンションが上がって、中々良いものを作れて、全体の一体感が強まったと思う。マシュマロチャレンジでは、パスタでタワーを作って、頂点にマシュマロを指して、高さを測るというものだったけど、各チームに配る材料の数が違って、そこがポイントで、他のチームと交渉してほしい材料を手にしなければならなくて、目標に向けて進めるなかで、うまくいかないという逆境をチームで乗り越えることに、楽しさを感じた。

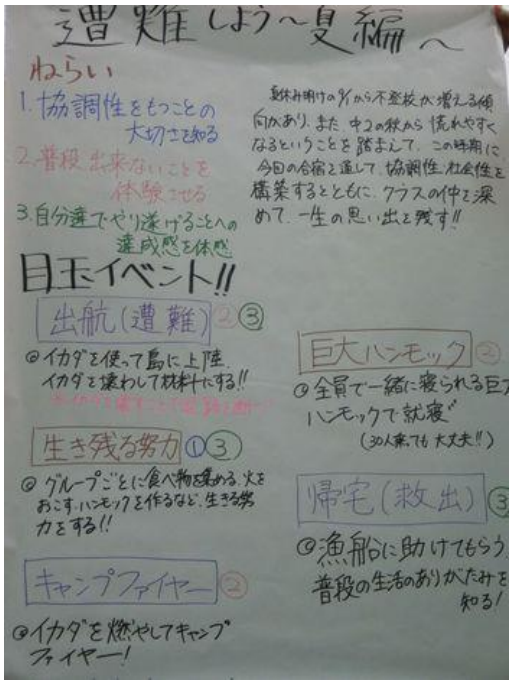
・私がこれまでの授業で得たワザは、生徒の授業に対するコミ

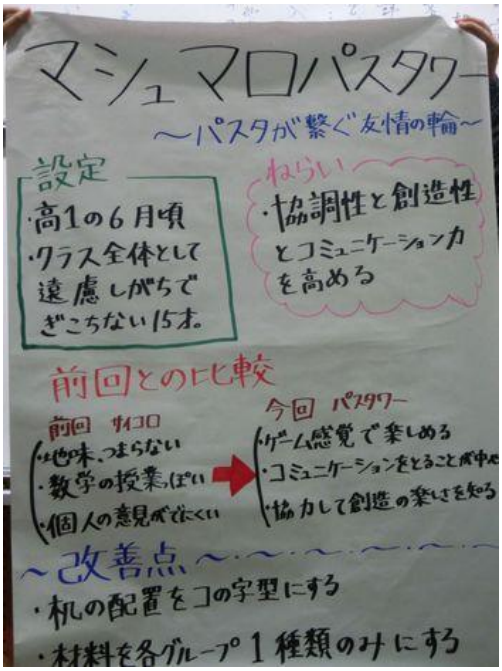
ュニケーションを上げさせ、より自分で考えさせるということだ。この授業は、初回や第２回の授業では、ジャンケン列車などをして、この授業に対する興味やモチベーションを引き出して、段々と考えさせるような事をしていく授業なのかなと感じた。たとえばミュージカルのときのテーマの［はい、何ですか？］の意味が全くわからなくて、ミュージカルを作るのが本当に難しかったし、必死に色々なことを考えた。そして最後の授業の企画についても、最初に何かを決めて中間発表をしても、他のグループと比べて明らかに生徒の興味を引けなさそうな気がしたり、創造性に欠けていたりして、そこからどうすればいいかを考えるのが大変たった。それと、他のグループに対するアドバイスをするのも同じように難しかった。このようにして、この授業では他の授業に比べて、「自分で考える」ということがとても多かった。

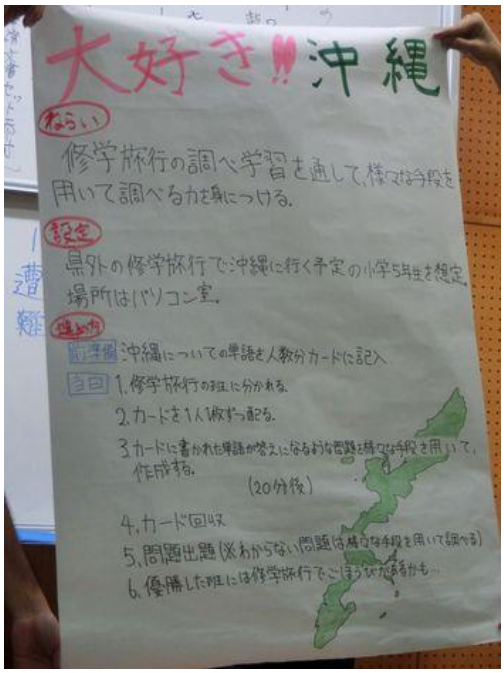
・特別活動に対する研究の講義の中で、活動を終えた後に生徒の感想を発表させるという点が非常に効果的だと感じた。大学になって、講義後フィードバックを発表するという機会が増えた。私の経験談になるが、小・中・高の教育の中で、生徒から感想を発表するという機会はほぼなかったように記憶している。大抵感想などは、紙などに記入しそのまま終わり。教師が面白いものだけ発表するということもあるが、基本的に生徒から感想を得る機会はなかった。そのため、個人的な観点になるが、目新しさを感じた。発表させて良いことは何かという点を考察すると、その人の意見や考え方をクラスに共有できることが大きい。クラスの全員が発表するという機会がない時は、特に発表しなかった人に焦点を当てて、活動についてどう思ったかを発表させることで、その人はどう感じたのかを知ることができる。また、その人自身にとっても、自分の考え方をうまく伝える表現力を試す機会になる。発表者が次の発表者を指名するという方式も、動的な選択方法で生徒の自主性を育むことができる。（中略）今回の特別活動を通して、生徒から感想やフィードバックを得る方法について考えさえられた。講義では、口頭の発表と感想の提出といういわばハイブリッド方式を採用しているので、理想的な方法であると思う。それぞれのメリットやデメリットを考えて最適と思える方法を選択したい。

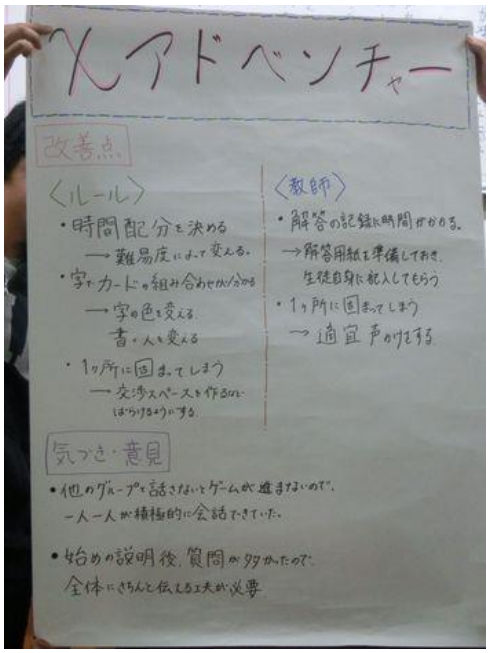
・特別活動の授業を受けて、私が個人的に気づき感じたことから関連づけて書かせて頂きたいと思う。それは「考え方」である。この授業を通して、ものの考え方についてこれまでと大きく変わったと感じる。多くの立場や視点から物事を見ることが出来れば、想像力が増し、創造力も向上するという事である。これまでの私は何について考える時、知らないうちに自分の中である概念を作りだしそれにそった意見を絞り出すという作業しかしていなかった。でもそれでは、出てくるアイデアはワンパターンで限られてくる。浅野先生の授業の活動は、生徒主体であり、テーマを確実にしないため、「ゼロからに近い発想」を自然と要求されることが多い。ゼロから想像するという事は、その人の価値観や性格、発想の癖などが表れやすいと私は感じた。例えば、「自分があるものに成りきって、短編ストーリーを作る」活動では、似たようなテーマでも発表者によって、悲しい物語になったり、かわいらしいものになったり、笑えるものになったり、小汚い話であったりと、多くの発想が見られた。また彼らの発想の仕方は他の活動においても、それぞれ似たような感覚で意見として聞くことが多かった気がする。みんなそれぞれ、何かを考える時、ベースとなる考え方を知らずに作っているのだと感じ取った。多くの活動で人と話すと、似たような考えを持っている生徒

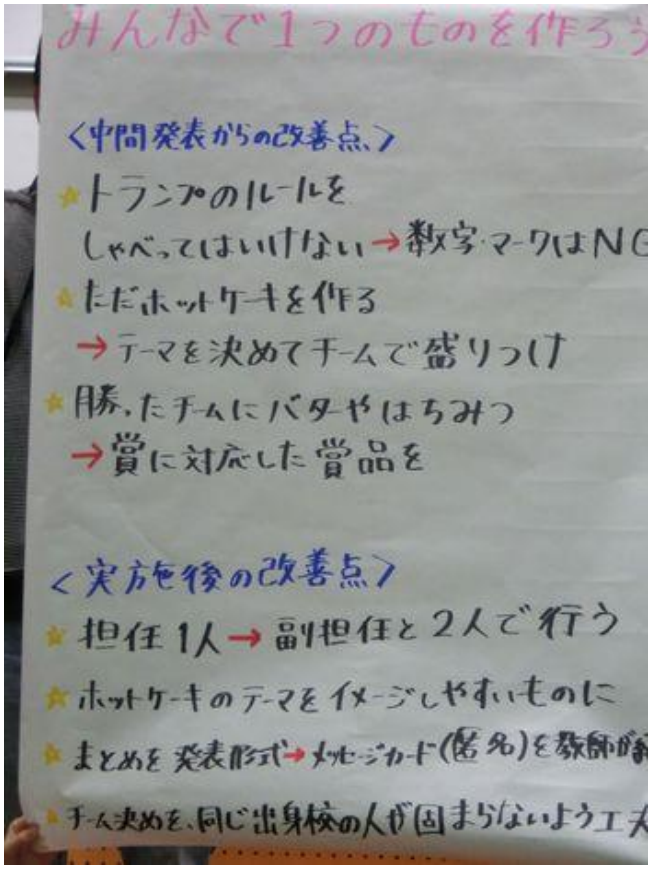
や、「なるほど！そんな考えは予想外！」というような全く頭になかった考えに出会う事も多かった。自分の固定概念を他の視点から見る事、そもそも自分の考えが、自分だけが持った固定概念、価値観にとらわれていないかを疑う事でさまざま「考え方」が出来るのだと思う。自分の世界にすぐ入ってしまっては、自分かこれまで得た浅い経験の中でしか考えることが出来ない。「他の価値観」を貰う（私の感覚では、貰うという言葉で感じた）ことで考え豊かな人間になれるような気がした。あらゆる価値観を自分の財産として知ることで、あらゆることを柔軟な視点で見ることが出来るはずである。他者の意見に耳を傾けるだけでなく、その意見が、その人のどんな価値観からくるものなのかまで感じ、様々な価値観を肯定的に見る事が出来る人間になっていきたい。

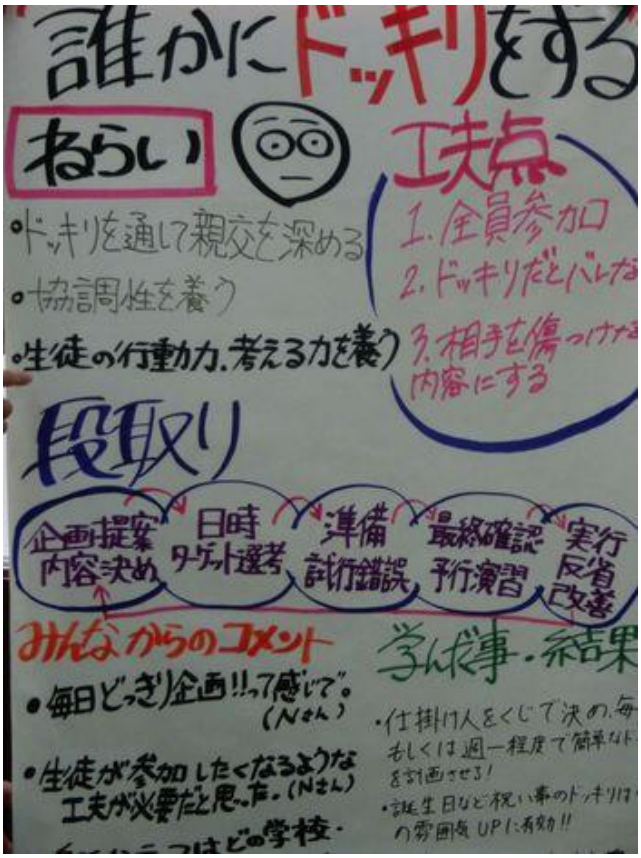












大成功で感動的に終了　2016 年 11 月 30 日

２５日、第八回目の最後の授業。各グループが作った企画の最終プレゼン（写真参照）。いずれも立派にまとめられている。学校現場の水準をはるかにこえるものの連続で、高いポイントをゲット。ということで、「不可ゼロ」という、この授業始まって以来の「偉業」を達成。

１時間できた「ゆとりの時間」も、自主的に出てきた企画を、皆で楽しむ。

最後は、後半に飛び出してきたスターの音頭で、一本締めにて終了。皆の明るい顔が印象的だった。

では、授業最後に書いてもらった『担当教師浅野誠へのコメント』からいくつかを紹介しよう。

・少し極端なアイディアでも提案してみることは修正などを経てこの案が良い方向に進むかもしれないので、自分の胸の内に終わらせないことが大事だと感じました。やらなければ何もわからない、だからやってみよう。この授業を通してそう思うようになりました。

・最初は、ほとんど遊ぶだけの授業のように思えたが、終わってみて考えると、本当に考えることが多くて、考える力が少し身に付きました。それも、他の教職科目とは違って、「生徒のモチベーションをどう上げさせるか」や「生徒にどのように考えさせるか」という、少し勉強とは離れた内容だったので、とても良い経験になりました。そして、この授業では、他者とコミュニケーションを取ることが多いし、人前で発表することも

多かったので、少しは人前で発表したり、人と打ち解ける力が身に付いたと思います。

・授業の多様さにも非常に驚かされましたが、取り組みの一つひとつに目的がしっかりとあって、それを生徒に自覚できるようにしていたことも私にとって大きな刺激となりました、ただ楽しいだけではなく、活動を通して生徒が何かに気付いたり、あるいは自分を成長させることに大きく貢献できることが特活の素晴らしさだと思いました。
・プレゼンというものをやったのが人生初だった。大学に入って友達がそういうのを経験したという話を何度も聴いていて、自分でもやりたかった。やってみると、難しかったがいい経験になった。前から、生徒が受け身になる授業は楽しくないとおもっていたが、ここまで生徒主体の授業には驚かされた。

・最初は「こんな静かなクラスでこの授業方法、大丈夫かな？!」と思ったけど、最後は皆友達！　いいたいことがいえて、“誰でも発言できるクラス” になったと思います。最初からずっとこの方法を続けていたってことは万能の方法なのかな？！ 自分が先生になった時に活かしたいと思います。
・先生の工夫を盗む！　先生の“生徒を否定しない”ことや、生徒が活動している間にあちこちを歩き回って生徒に話しかけるところなどが、他の授業にない、生徒自身がのびのび成長できる環境を作っているのだと感じた。いただきます。

・突拍子もないことも言うが、学生を自ら行動させる発言であり楽しい授業であった。
・生徒に楽しんでもらうアイデアをもとに、特別活動を考えているのか、その逆で、特別活動の内容を先に考えて、面白いアイデアを考えているのか、先生の思考回路が気になった。
・生徒主体ということを上手く実現していると感じる授業だった。進行も学生に任せるところが意外で、予想外の事態になったらどうするのか、という疑問が浮かんだが、それこそが成長の種だと捉えているように感じた。

・休憩時間の浅野先生とのおしゃべりが楽しかったです！　大学では先生と学生との距離が遠い中、浅野先生は違いました。
・授業は先生も楽しんでいるように思えた。先生が楽しそうにしているし、みんなに話しかけていたので、親しみがあるように感じた。
・初めから出来る出来ないを考えるのではなくて、今回の企画のように。やることを決めてから、その後に部分的に可能不可能を考えることが面白くエキサイティングな授業にするうえでポイントになってくるのかなとおもいました。

・浅野先生の経験や人間性、感覚など今までに見たことがないような先生で、とても魅力的だと感じました。

企画を考えるグループ学習の際に、自分らにはでないような案がポンポンでていたので、このあたりと、みんながひかれるような人間性がどこかつながっていると思いました。

・８回の授業では少ないかなと感じました。もっと回数ふやしても良いかなと感じました。

追記

　１９７２～１９９０年、２００３年、２０１３～２０１６年と２０余年にわたって担当してきた琉球大学の授業を、２０１６年に終了した。そこは、私の「授業修練場」「授業創造場」であった。最初のころは、恥ずかし過ぎて書きたくないほど下手な授業であった。旧来の講義式授業は、最初の半年間だけで、それ以降は、いまでいうならワークショップ型授業の模索だった。その試行錯誤のなかで、なんとか自分なりの授業を作り上げてきた。そんな授業体験をもとに、大学授業改革を全国に発信していった基盤になったのが、琉球大学での授業であった。

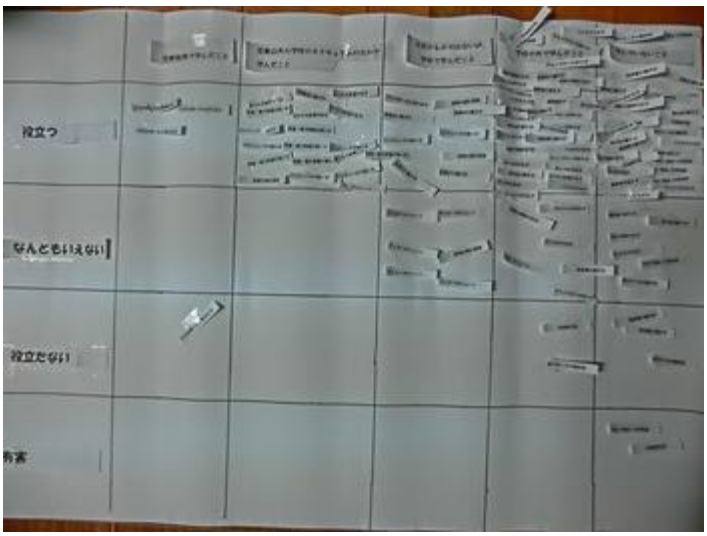
沖縄県立看護大学「教育学」

２０１５年

クラスメイト・自分自身・多様な学校の発見　2015 年 04 月 08 日

７日、看護大学「教育学」第一回目の授業。２年生２０数名が受講。（現職看護大学の先生も参加）
新テキスト「楽しいワークショップ」を使っての進行。

今回は、教育の前提に人間関係があり、多様な人同士が、同じ場に集まって、相互に発見し合うことが中心課題の一つ。
まず、
№３　リレー式に物語をつくる
№４　やる気を出させる言葉がけ大会
をする。
最初は緊張溢れる。とてもまじめで穏やかな受講生たち。緊張しながらも、自分なりに工夫して表現していく。
後半は、まず変わり自己紹介。自分のアイデンティティ・「身体の部分にたとえると何」・自分のウリを書いてから発表。
身体をたとえるはいつやっても楽しい。出てきたものを並べてみよう。
足２　口３　親指　髪２　爪２　骨　胃６　まつげ　ふくらはぎ　膵臓　左手　指・指先　耳３　目　腎臓
なぜか胃が多いのが、今年の特徴。興味深い説明を並べよう。



知らぬ間に伸びている爪のように、私も知らぬ間に成長している
自由に自在に伸びる髪
なんでも受け入れ、なんでも消化する胃

次に、№２６　学校で学んだこと。学ばなかったこと、をする。教育・学校について考えるきっかけとして、カードを自分なりに配置して、討論。（写真参照）

「サンシンのひき方」を学校で習った人、習わなかった人。地域差時代差があらわれる。

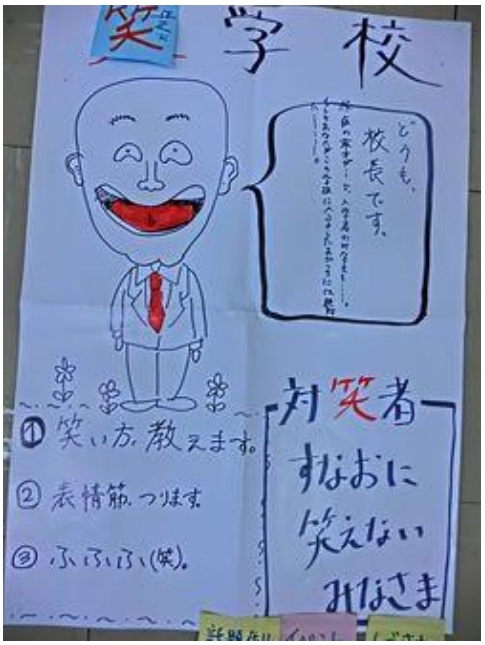
「就職先の選び方」　学校による違いが大きい。

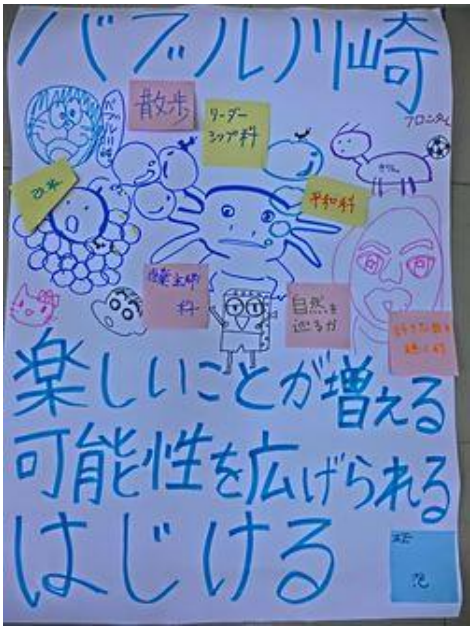
　これらの討論を通して、自分が通った学校のイメージしかなかったのが、学校による差異が大きいことを発見。

　楽しい第一回目の授業だった。２回目以降が楽しみだ。

「こんな学校を」ポスター作成　　2015 年 04 月 15 日

１４日は２回目の授業。





　最初に、自己発見・他者発見ビンゴゲーム。１年間ともに学んできたから、顔と名前は一致するが、発見の連続。好きなものが同じだったり、お互いのクセやチャーミングポイントを発見し合ったりした。なんと、全マスを埋めきった人が２名もあらわれた。

　次に、「こんな科目をなくして、こんな科目とつくりたい」を出しあい討論。

　それを踏まえて、「こんな学校を」をする。

　まず、各自が、漢字一文字で書きだす。その中で、関心が高かったものを人気投票し、選ばれた７つから希望チームを作る。注目を

集めたのは、「泡」。泡のように、ふわっとした雰囲気の学校というイメージのようだ。

各チームで、その特徴などを３つ決め、その学校のイメージをリレーお絵描きでポスターに書く。

出来上がったものをもとにプレゼンとポスター討論。大変盛り上がる。

説明抜きで、全グループの写真を掲載しよう。

約３０名の受講生一人ひとりが個性を出しノリはじめた。まじめに着実に、そして創造的だ。この後、どんな展開になっていくだろうか。

教室設計　誘う　保健室ロールプレイ　2015 年 04 月 23 日

今回はまず、「どんな教室・椅子・机がいいか。配置はどうするか」を、グループ単位に考えて絵にする活動。

「疲労を取るストレッチ体操の授業」（右下写真）

「豚の心臓の授業」（左下写真）

「受講生相互の顔

をデッサンする授業」

　このように多彩な授業にふさわしいものを考える。これらを通して、授業・学校・教えることなどを考え、発見する。

　次に、教育活動の基礎にある「誘う――断る・受ける」をペアになってやってみる。
「船酔い恐怖のひどい人に離島でのボランティア活動への参加を誘う」
「腰痛でいくつもの治療を試みたが、うまくいかず１０年余り悩んでいるひとに、ある治療を勧める」
などを素材に進める。熱心な「誘い」に乗る人が続出。

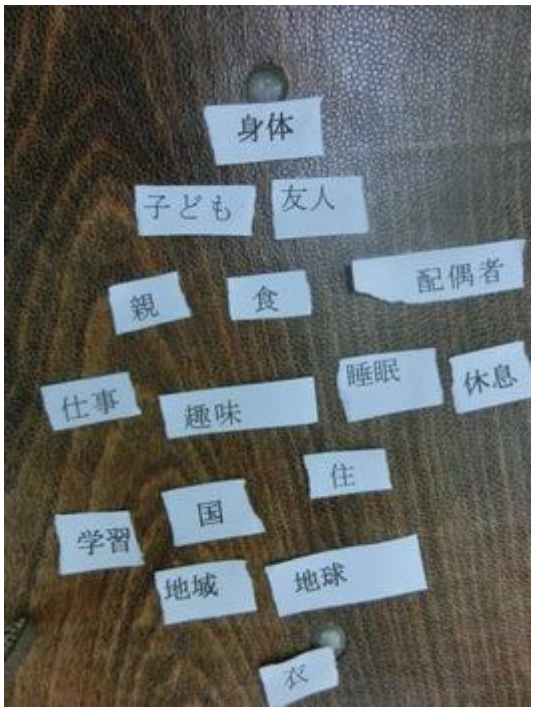
　最後は、保健室で生徒たちが作るドラマに養護教諭がどんな対応をするか、即興劇で展開。５つのグループが作りだす多様なドラマに、物語はどんどん発展していく。

　今回の授業で発見したことの箇条書きレポートのいくつかを紹介しよう。

・養護教諭の子どもへの対応は、怒るのではなく、さとすような感じなんだと気づいた。
・１０年腰が痛いひとに治療をすすめるのはとても難しかったけど、自分の体験をもとに説得すると、相手も納得してくれたので、自分の体験もいれながら話すのが良いと思った。
・“教室”ときいたら机といす、黒板が当たり前だが、目的別に工夫すると本当はもっと良い教育ができるのではないか、と思った。
・ただ優しいと思っていたけど、養護教諭は優しいだけじゃなくて、周囲の人々を受け入れるような姿勢をもっているんだなと気づかされました。

人生創造　2015 年 04 月 29 日

　２８日は、第四回目授業。毎回２コマずつやっているので、もう半分を終了した。みんなノッてきている。マジックマイクロホンを使って発言討論をすすめているが、今回は、床に１２本ぐらいおいて、発言したい人が一本ずつ取り、順に発言していくやり方で進めた。３つの活動の後の振り返り討論で、おそらく全員が発言しただろう。



この学年は、粒よりで、だれかに任せきりにしないで、一人一人が自分を発揮している。人前で緊張するといっている受講生も、結構自分を出している。

今回は、人生創造がテーマ。一番目の活動は、人生で大切にする価値をランキングする。

まず個人が並べた後、写真例のようにグループでまとめる。無論、まとめられないのが多く、そこででてきた意見の違いが討論の焦点になる。

写真は、あるグループの例。

トップに、身体を置くのが多いのが、今回の特徴。さすが看護大学という感じだ。他には、子ども・友人・親・配偶者という人間関係を選ぶのが多いのが、近年の特徴。他には仕事・趣味を置いた受講生もいた。

下方には、国・地域・地球を置くのが多いのは、最近の傾向。地球を上の方にもってくる受講生もいる。

意見が実に多様であることを発見したこと自体が、印象的だったようだ。

次に、進路選択の際に重視することをめぐっての肩たたき討論。

「夢」が多くて、「生活」「能力」「社会予測」が、次ぐ。「親・教師の忠告」「自然」はいない。

これまたけっこう鋭い発言が途切れることなく続く。これらの要素に分けられるものではなく、すべての要素を噛み合わせるのだ、というのが討論の結論のようだ。それにしても、一人一人がしっかりした考えを持っているのも、看護大学の特徴だろう。この年齢では、まだはっきりしていないものが多いのが普通なのだが。

最後に「進路物語をつくる」　毎回、盛り上がる。

振り返ってのコメントをいくつか紹介しよう。

・人について勝手にイメージしてることがたくさんある。

・夢がない人もいると聞いて、私は夢がありすぎて困るくらいなので、幸せだと思った。

・進路物語では、自分が周りからどのように見えているか知ることができてよかったです。

・私の人生で大切にする価値が、グループの人たちと全く異なったので、人生には人とのつながりが大切だということを発見した

・進路物語をつくるのでは、あの人は、こうっぽいなとか、あれしてどうとか、その人について考えてみるのが楽しかった。

・同じ年代、同じ学校でも、人生において価値あるものとしていることがかなり違った。

・進路選択の時、「人の役に立ちたい」とか考えて県看に来たという人が多くて、みんな自分をしっかり持ってるんだなと思った。

受講生によるワークショップ三つ　看護大学授業　2015 年 05 月 14 日

１２日の授業では、受講生の３グループが、テキスト「楽しいワークショップ」のなかの次の３つのプログラムをもとにして、ワークショップを行った。

１．「将来設計尋ね人」

２．「○年後の年収は？」

３．「女の仕事・男の仕事といえるか」

各グループとも、かなり準備して、適切な情報提供をしながら、組み立ての仕方もとても工夫されていて、受講生たちは大いに発見をして楽しんでいた。

最後に私がコーデネイトした、４．「なりきろう」をした。

受講生コメントをいくつか紹介しよう。

１．について

自分では考えていなくても、周りから「こういう将来設計してそう」と言われると、向いているのかなと思って考えるきっかけになった。

相手の将来の夢を聴いて、その人に対する見方が少し変わった。

将来の想像をすることって楽しいし、向上しようと意欲がわいて原動力になるのでいいなと思った。

同じ看護師を目指している人でも、将来設計が違っていたり、給料の使い方もしっかりと計画していて、自分も将来のことをもっと考えようと思いました。

２．について

大学生になるまで３０００万円かかるって聞いて、自分の親はどうやって自分を育ててきたのか考えさせられた。

年収の内容をどのようにしたらみんなが発言し参加できるか、最後のまとめの時にどんなお金の知識を伝えたら皆のためになるか、下準備が大変だった。

年収の話をしている時に、将来設計で答えたことを思い出したら、お金を求めるか家庭を求めるかによって、女性のやりたいことは狭められている現実があるように感じた。

３．について

男と女がどちらが適性かというこれまでの経験で決めつけることもあったけど、どちらにもいいところがあって適性があるんだということに気づいた。

ジェンダーのワークショップでは、自分の身の周りの人を考えていたけど、女性がなるとより雰囲気が柔らかくなるなど、いい考えだなと思った。

朝食作りが人によって男が適しているとか、女が適しているとかバラバラで、その人が育った環境が伝わってきて個人的に楽しかった。

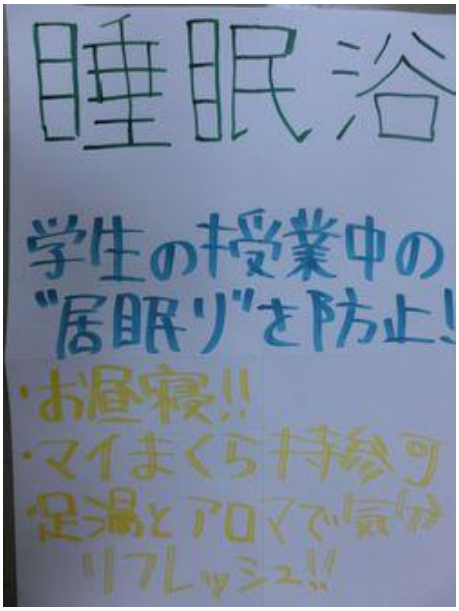
４．について

今まで気にかけたことのなかったモノのことを考えるいいきっかけになった

なりきると、視点が変わるので、他の意図の話を聞いていて面白かった。

ものになりきることは、無限の考えや空想ができて、おもしろいことを発見した。

自然のものあるいは人工のものになりきるのは難しいけど、面白い発見ができた。

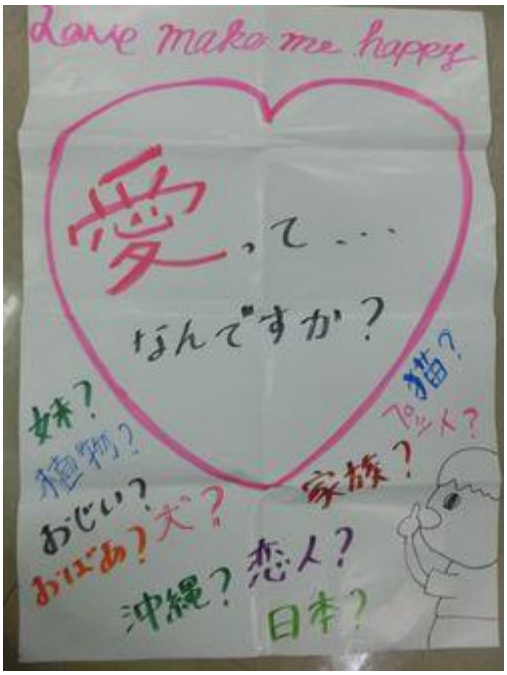


健康マップ　健康キャンペーン　難題に取り組む　人生創造

2015 年 05 月 21 日

今回は、まず健康マップつくりをした後、関心のあるテーマで集まったグループごとに、健康キャンペーン企画を作成した。写真でみるように、今回はとてもユニークで楽しい企画ばかりで、興味津々だ。

その後、世界各地の難題に取り組む企画をチームごとに作成した。今回の作業に加えて課外でのグループ作業を踏まえて、次回にプレゼンと討論をする。



今回提出された「人生創造」にかかわるレポートには、これまでの授業を踏まえた深い内容のものが多いので、いくつか紹介しよう。

①私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと

・自分の意見を積極的に周りに伝えようという姿勢が、あまりなかったこと。この授業で考えを共有することで新たな発見や学びができ、なによりも楽しいと感じることができた。大勢の前で発表をするのは緊張するし、頭も使う。しかし、たくさん考えたことで、自分がたくさんのことを発見できていることが新鮮な学びだった。

・私は、他の人よりも家族や親戚とか地域に強いつながりを求めているのかなと感じた。人生で大切にする価値を順に並べるワークショップで地域が上にきていたが、周りはあまり関心がないという風だったので、不思議だった。生まれてから、ずっとこの地域に住んでいるし、この地域が好きだし、雰囲気も好きだし、ずっと住みたいと思っているから、地元愛が強いかなと初めて思った。

・様々な意見発表がなされる授業のなかで、自分では失敗したと思っていても、周りの人はよくできていると評価している場合があるということを知った。

・授業でも交友関係でも、今までは場の空気や流れを読んで行動することが大事と考え、周りの様子に合わせていた。しかし、一人一人が行動をおこすことで場の空気や雰囲気をつくりだすのではないかと考えるようになった。

②私のこれからの人生で追求したいこと

・からだを動かして学びに行くこと　　理由は、坐って教科書を前にして学ぶのも重要なことではあるが、自分が学んでいる分野とは違う分野のことを、ワークショップみたいにからだを動かして物事を学ぶことは、とても楽しい、とこの授業で感じたからである。そのためには、色々なワークショップや講座に積極的に参加するのがよいと感じた。

・他人任せではなく、どのようにしたら楽しくなるか、有意義なものになるかなどを考えながら、自分たちで充実した集団や社会をつくっていきたいということ。

・将来について詳しく考える事　　授業で、将来設計や将来の年収を予想してみたりすることをやった。私は、将来は「とりあえず県外に就職しよう」ぐらいにしか考えていなかったので、これらの授業をやったときは困ってしまった。特に将来設計の質問はすぐに答えをだせるものではなかったので、周りの友人に質問してすぐさま答えがかえってきたので驚いた。

③他の人にかかわる際に、その人の人生のために大切にしたいこと

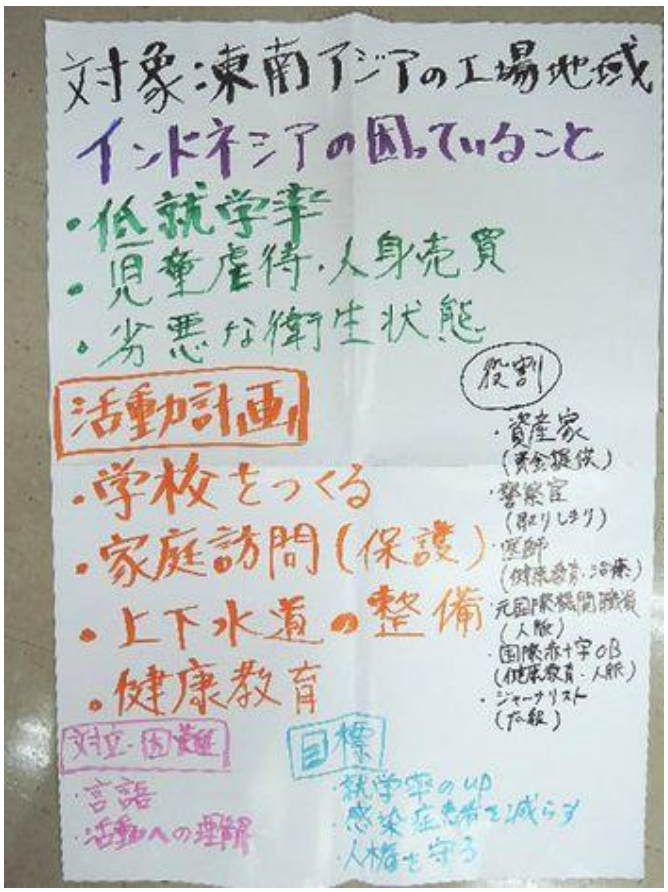
・自分の考えとは違っていても、相手の考えを受け入れること。自分ではこれが当たり前と思っていても、今まで生きてきた人生も違うから考え方も感じ方も違っている。それを再確認でき、決して否定したりしてはいけないと思った。

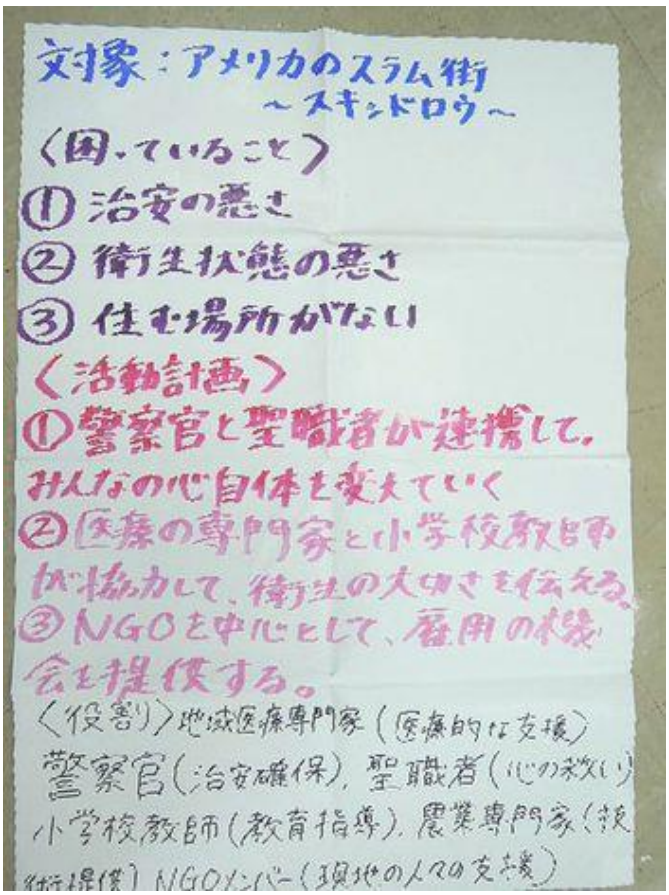
・その人の良いところ・素晴らしいところを見つけたら、直接伝えて、自信をもってもらうこと。授業で良いところを発表したり、授業の最後に友達からの評価を記入してもらうものでは、人から良く評価してもらうことは自信がつくし、嬉しかったから。

・想像を広げていくこと　　現実に起っていること、存在するものだけでなく、自分が理想とすることやこんなのがあったらいいなということなどを想像することが大切で、楽しいことを発見した。想像するということは、相手が今何を考えているのか、どんな思いでいるのかを考えることにもなると思うので、その働きは看護師として対象者と向き合う際にも生かせるのではないか。

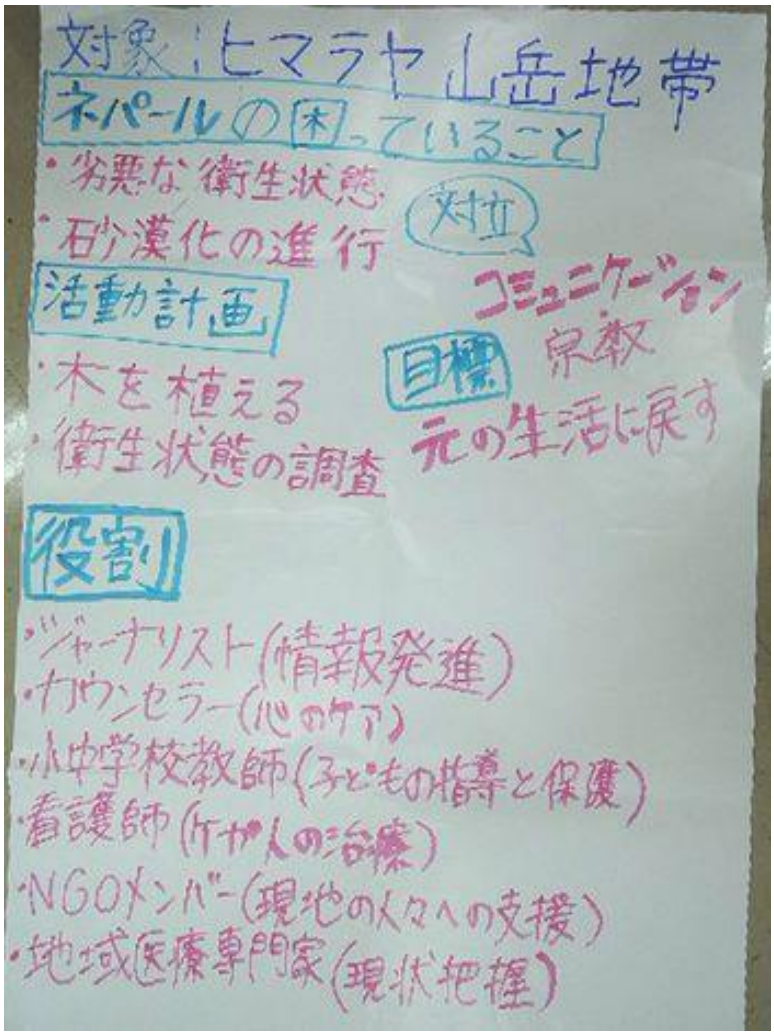
世界の難題に取り組む国際会議　　ミュージカル「帰り道」　2015 年 05 月 27 日

今回は、先週から作業を開始した「世界の難題に取り組む国際会議」の、各グループのプレゼンから始まる。





写真のように、よく練られた取り組みプランが提示された。



ほとんど知らない地域について、インターネットや諸資料を調べ、その地域が抱える難題に、看護師・教師・ジャーナリストなど、多様な職種の立場から協同で取り組む計画が出された。終了後の受講生のコメントを見ると、初めて知ることの連続だったようだ。

ちなみに、受講生のスマホをとおしての情報収集が大活用された。学校・授業によっては、スマホ使用禁止となっているが、私の授業では大活躍だ。人によっては、タブレットが大活躍。インターネットをこうした形で活用することはおおいに奨励したいものだ。

プレゼンの後で、ポスター討論。いろいろな質問に汗だくで答えている。

最後の討論では、看護で学んでいることを世界とつなげて生かしたいとい感想が続出した。

後半は、受講生が即興で作るミュージカル。集団文化表現だ。みんなが出したタイトルの中で、「帰り道」が大人気。ランドセル・道草などメルヘンチックな創造的な表現が、多様なパフォーマンスを伴って綴られる。

見事な表現だった。

次回がいよいよ最終回授業となる。

受講生の大成長を感じながら授業終了　2015 年 06 月 03 日

２日は、最後の授業だった。毎回２コマ連続でしているので、早めに終わる。

今回は、１コマだけで、自己評価他者評価とちょっとした懇談で終わった。この自己評価他者評価は、実に深く印象的なことが目白押しだった。いくつか紹介しよう。

自分の考えを引き出し、なおかつそれを表に出すのは難しい。でも一歩踏み出して、チャレンジしてみると、意外と楽しかったり新しい自分を発見できたりする。

自分自身のことだけではなく、相手のこと、身の回りのこと、世界のこと、将来のことなど、様々な視点で物事を考えることができて、視野が広がった。

先生から教わるだけの授業ではなく、自分たちで創造していく授業だったので、たくさん考えることができた授業だった。

最初はとても変な先生だと思っていました。「ペンを取って発言してください」と言って、誰も出てこなかった時、怒るのではないか？と思ってたけど、じっと待っていて、勇気を出して発表した後も、授業終わった後に「今日の発表よかったよ」とほめてくれて、私のことをちゃんと見てくれているんだと、嬉しくなって、何事ももっと頑張ろうと思えるように成長できました。

今までは、ある程度多くの人の前で自分の意見を言ったり、何かを発表したるするのはすごく苦手で、できるだけ避けてきたけど、この授業ではどんどん自分から話したりしないといけなくて、最初はしょうがなくって感じとか、皆の流れにのらないといけない雰囲気で、とかだったけど、途中からは自分から話したり、意見をいうことにあまり抵抗がなくなりました。これは、まだ教育学のときだけだけど、他の授業やこれから先、自分の意見を積極的に言えるようにしたい、しようと思います。そして、自分の意見を言うこと、伝えることは大切だと思いました。もちろん、他の人の意見を聞くことも大切だし、この２つで、もっと良い意見、考えができあがったりして、すごく良いものが創造されて、これは自分の意見を言わないで、ただ人の意見をぼっと聞いているだけでは、とうていできないことだと思います。自分がどんなことを考えているのか相手に伝え、それを一緒に協力して新しいのをつくる、っていうのはすごく良いことだと感じました。

作りたい学校などいつもは考えない考えられない話題でも、色んな可能性・創造をみんなで共有・表現し、健康というテーマにおいても、いつも堅苦しい健康を考えているが、人間が思う健康活動とはどういうことなのかどういう要求があるのか認識することができました。

私は今まで受身で授業を受けてきて、一つの正解を持つ答を記憶するという学び方をしてきたが、これから大切なのは答えを覚えることではなく、創り出していくことだと気づけた。そのために私はもっと発言できるようにならないといけないと思った。

この授業では自分の将来について考えさせられることも沢山あって、みんな同じ学科の人だし、似たような将来設計なんだろうと思っていたら、予想外の意見が出たりして面白かった。また、そんなみんなの意見を聞いて自分もこうしたいなと思うことがあって、触発されることが沢山あった。

私は教育学の授業を最初は、受けるつもりはありませんでした。同じ授業を二時限の 180 分もやって、おもしろくなかったら嫌だったからです。ですが、友達に最初の授業だけでも受けてみようと誘われて受けてみることにしました。先生の最初の印象は、生徒によく話しかける先生だなと思いました。選択科目の授業で、休み時間に生徒に話しかける先生は初めてでした。でも、話かけてもらったおかげで、授業に少し興味がわきました。そして、教育学というから、教育についての難しい話を始めるのかと思っていたら、机を端に寄せて椅子で円を作って授業を始めたのには驚きました。こんな授業は今までにやったことなかったからです。

どんな授業を始めるのかと思っていたら、先生のお題からリレー方式に物語を作っていったり、隣の人を褒め合ったりとこれが教育と何の関係があるんだという授業だったので、予想していた授業と全然違いました。一番最初の授業が終わった後は、すごく疲れました。私は、人前で発表することに苦手意識があり、何か良いこと言わないと考えて、自分なりに良いと思った答えが出てから発表するようにしていたのですが、考える暇がないくらいのスピードで自分の意見を言わなければならなかったので、頭をフル回転させたのですごい疲労感がありました。しかし、疲れましたが授業はすごく新鮮で楽しかったですし達成感がありました。教育学の授業を最後まで受けようという気持ちになりました。そして、いろんなワークショップをやりましたが、印象に残っているのは即興劇とミュージカルを創るワークショップです。

どちらもやったことないですし、設定だけで後は自分たちにお任せだったので、どうなるのかなと楽しみでもあり、実際にやった時は凄く緊張しました。でも、即興でやった割には形になっていて、やっていく内に完成度が上がっていくのが楽しかったです。4、5 名集まればいろんなアイディアがでてきて、それぞれのグループで設定は同じなのに違った内容になっているのが面白いと思いました。そして、教育学を受けてよかったことが、大勢の前で自分の意見を言う勇気が身についた事とこれまでちゃんと話したことがなかった人の色んな一面が見ることができて、印象だけで他人を判断してはいけない事、コミュニケーションで相手のことを良く知ることができれば、自分とは違う視点の考えを学べて、新たな発見がいっぱいある事が分かりました。教育学の授業を受けてよかったなと思いました。

以上が、受講生の自己評価などでてきたものの一部です。

ところで、今回の授業では、看護大学のお一人の先生が、毎回参加していただきました。また、途中で一回、特別支援学校の先生が参加なさいました。お二人とも、受講生に混じって、ワークショップに熱心に参加していただきました。嬉しいことです。

私の授業では、現役の小中高大などの先生方の「もぐり参加」がよくあります。多様な方々が参加されれば、それだけで一層充実したものなりますので、大歓迎しています。ご希望の方は、お声をかけてください。

浅野担当の看護大学授業「教育学」についての学生評価　2015 年 10 月 29 日

沖縄県立看護大学から、浅野担当の前期授業『教育学』についての学生による授業評価が届いた。

５段階で全受講生（記入者３０名）が記入したものだ。５段階は、１－全くそう思わない、２－そう思わない、３－どちらともいえない、４－そう思う、５－強くそう思う、というものだ。それらの平均値が記されている。

点数順に並べてみよう。

５．０

教員の休講は少なかった。

この授業に遅刻したことがない

計画された授業が予定通りに行われた

教員の熱意が感じられた

丁寧で、わかりやすい授業であった

私たちの理解度に配慮した授業の進め方であった

私語に対して適切に対応してくれた

教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった

教員の話す速度は明瞭で、聞き取りやすかった

教科書・配布資料の使い方は効果的であった

この授業は全体としてよくまとまっていた

ポイントをおさえてくれた

授業に活気があって単調ではなかった

自分自身と他の学生との共通点・相違点がわかった

この科目を受講して満足であった

この分野の見方、考え方を学ぶことができた

この科目を受講して今後の勉強に役立つと思う

この科目を受講して、触発されることが多かった

この科目を他の学生にも薦めたい

４．９

授業時間や場所の変更など学生への連絡が適切であった

質問に明快な回答を与えてくれた

学習の目標をはっきり示してくれた

板書は適切で効果的であった

視聴覚教材の使い方は効果的であった

課題（宿題・レポートなど）の量は適当であった

授業内容の量は適切であった

授業内容のレベルは適切であった

この科目の受講後、この科目に対する興味は増加した

教室の広さは講義に適当であった。

４．８

この授業によく出席した。

４．６

授業中、私語をかわしたこともなく、授業態度はよかった。

４．３

この科目はもともと興味のあった科目である。

３．８

この科目の勉強はやさしかった

３．７

教員に求められたこと以外に自分で積極的に調べた。

教員に積極的に質問をした

３．６

この科目で良い成績をとるのは容易だ

３．２

この科目の予習・復習をした

３．１

この科目の勉強のために図書館をよく利用した。

２０１６年

初回　　多様な受講生が醸し出す楽しく穏やか雰囲気　2016 年 04 月 13 日

　１２日、５カ月ぶりの授業。とても楽しかった。

授業の流れは、こんな風だ。

授業の概要説明

　リレー物語つくり

　あいさつ尽くし

　つないだ手で信号を回していく

　ほめ言葉尽くし

　変わり自己紹介

　学校で学んだ事学ばなかった事、一覧表つくり　討論

このように、教育や看護のベースにある対人関係つくりを中心に展開した。

受講生から受けた私の印象

・一人一人が、自分を出して表現する

・雰囲気を作り、雰囲気を楽しむことがうまい

・まっすぐ考える雰囲気

・優しく穏やかな雰囲気

・楽しいことが好き

　変わり自己紹介では、自分を人体の部位にたとえると何、自分の秘密をばらす、自分のウリ、の三つをしたが、大受けの連続。人体の部位で自己紹介する活動は、これまで１００回ぐらいしただろうか。でも、新しい部位が登場する。足の爪　左手　膝（自分の意見がよく曲がるから？！）・・・

　秘密をばらす話は、ホクロが続出。バイトでの失敗など、ウソのような面白い話がいっぱい。その人の性格を知るうえで、大好評だったし、受講生相互の壁をなくすうえで、有意義だったようだ。ともかく笑いの連続だった。

では、授業末レポートからいくつかを紹介しよう

・自己紹介の時に、自分と同じこと考えている人がいてうれしかった。

・学校の特徴について新しいことが分かった。

・人それぞれ意見が異なっていて、さらに視点が違っていたので面白かった。

・学校で習ってないことの方が、一生使えるものが多い

・ほめられたり、あいさつされるのは、気持ちいいもので、空気が自然と和むと思った。

・手をつないでの伝達ゲームで、ちゃんと伝えたつもりなのに、全く違うものになってびっくりした。

・教育や学びや人のつながりについて考えると話が尽きない、

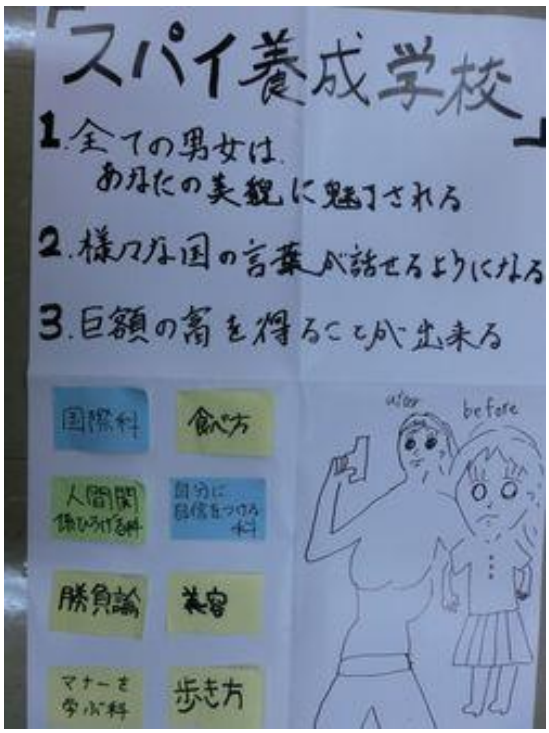
・皆の意外な面や自信のあることを知れた

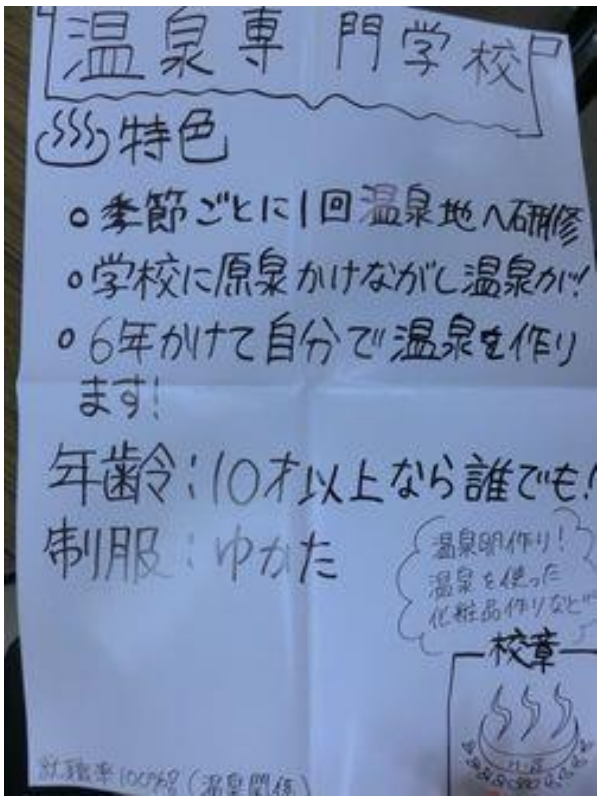
・意見を言い合うのが自信につながると感じた。

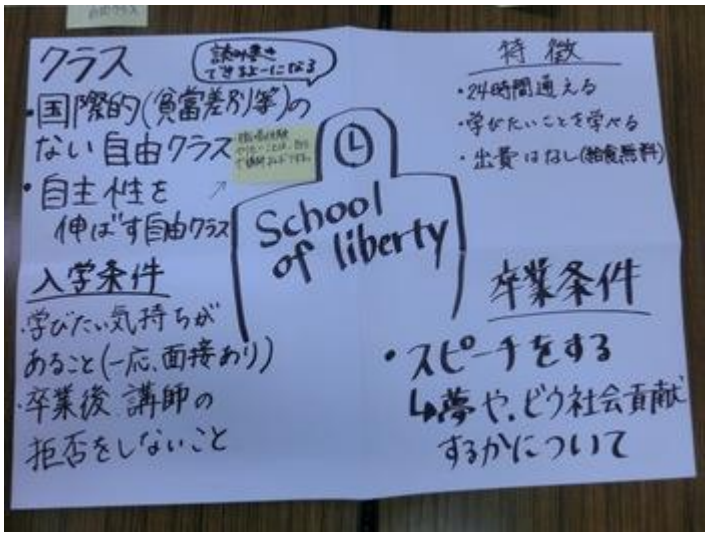
2016 年 04 月 21 日

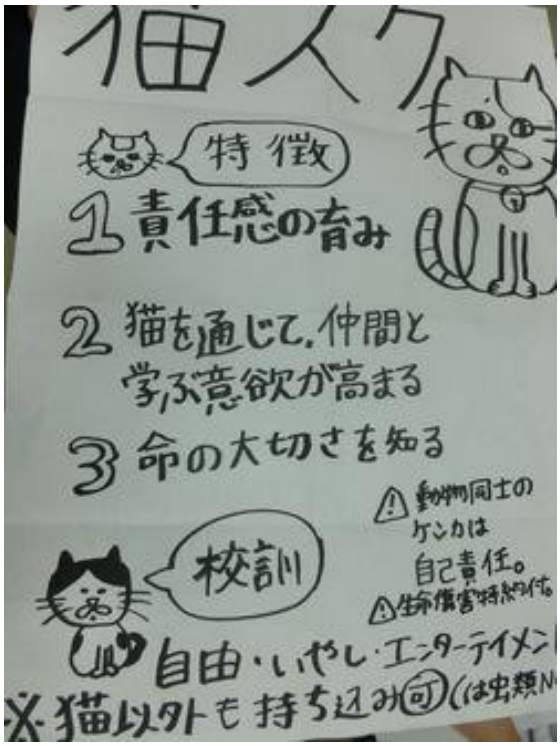
「学校をつくる」

今回は、自己紹介・他者発見ビンゴゲーム　→　こんな科目をつくろう　→　自動車と運転手　→　どんな学校をつくる　→　学校アイデア　→　グループで学校つくりプラン（中間発表･最終発表）という流れだ。

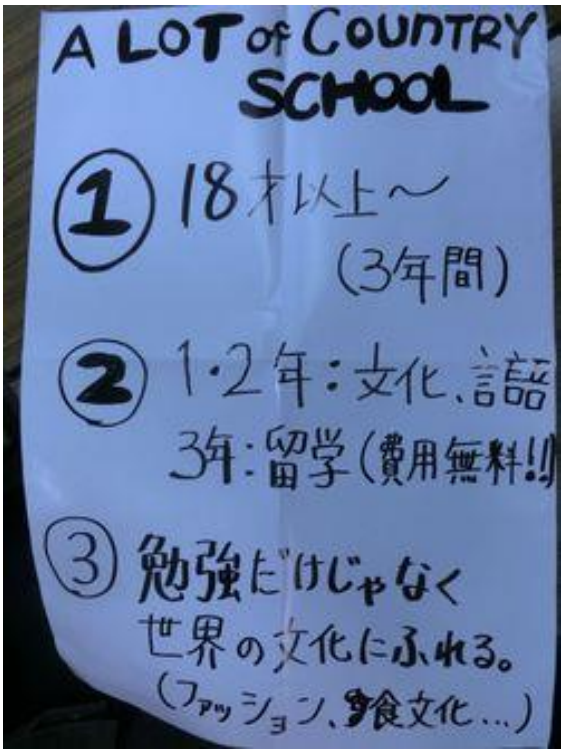








写真のように、６つの個性的な学校プランが誕生した。



スパイ養成学校

温泉専門学校

サバイバル・アカデミー

A Lot of Country School

猫スクール

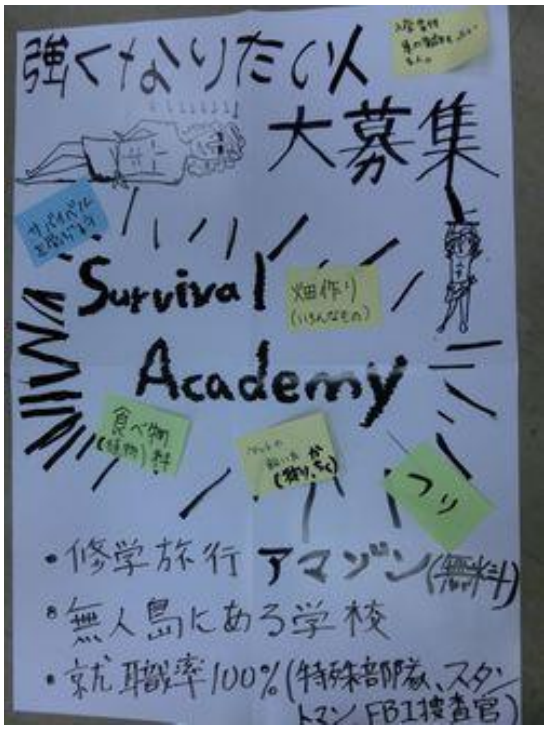
School of Liberty

興味深いものばかりだ。なかなか凝っている。難問は、お金をどうするかだろう。お金があれば作ってみたい学校だ。

今回も提出されたメモをいくつか紹介しよう。

・皆の意見が自分にはない考えでいいと思った。

・自動車ゲームでは、眼が見えない人が、何を頼りにどれくらい頼りにしているのかわかった。



・自分たちで考える学校は絶対面白い。

・触れると安心感が出ることに気づいた

・「年代音楽」で歴史や文化、思想について面白い視点からとらえていて新発見でした

・サバイバルの学校は、最近の地震のような災害のとき役立ちそう

・妄想が意外と話を広げるきっかけになると思った。

・自分との共通点や異なった点がわかるだけで話題が増える

・話しかけるのが怖かった人とも話せて、意外とフレンドリーだった。

科目・授業テーマにあわせた教室つくり　説得するロールプレイ　保健室でのドラマ

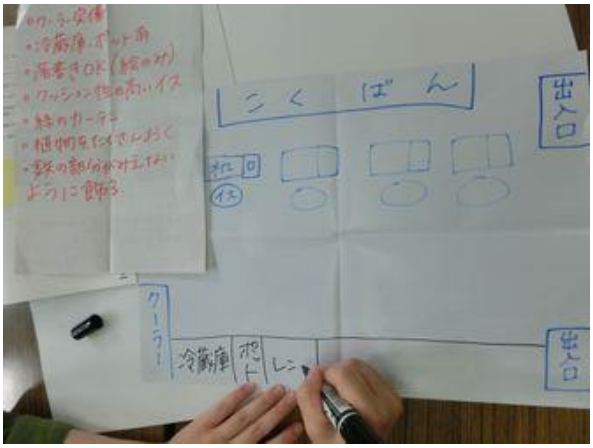
2016 年 04 月 28 日

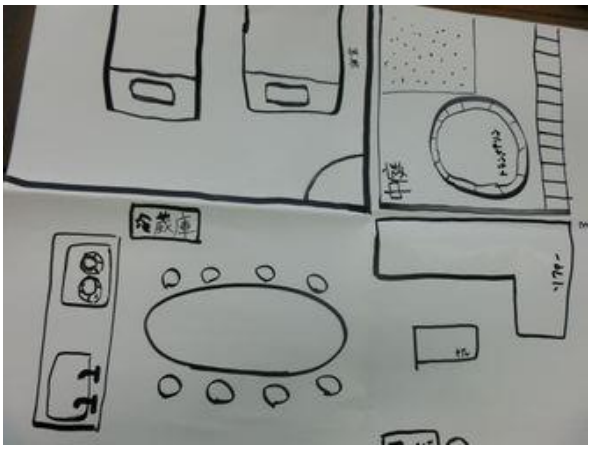
２６日は３回目の授業。慣れてきたためか、受講生はますます盛り上がる。

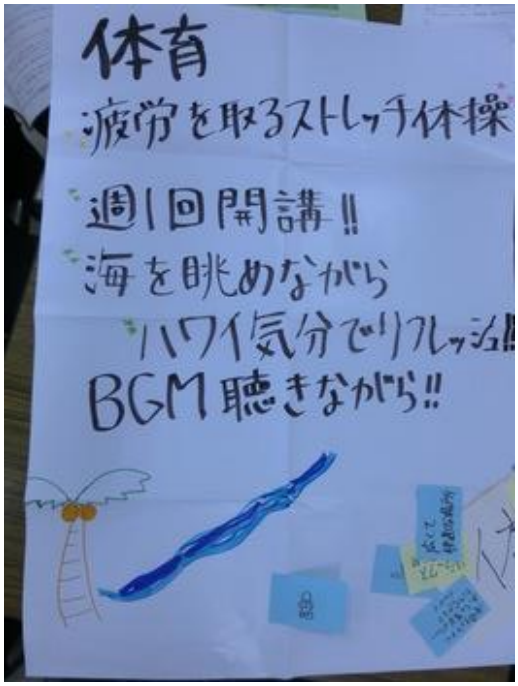
今回は、写真のように、科目・授業テーマに合わせた教室作りを、グループごとに考えて、ポスター発表する。

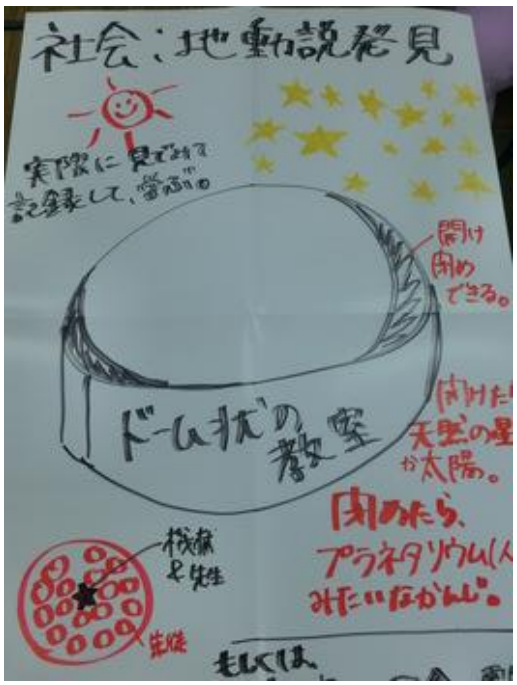
次に、患者を説得するロールプレイ。薬を飲まない患者、リハビリを渋る患者・・・　全員が、いくつかのケースのうちのどれかに挑戦。そのなかからベストに選ばれたものを見ながら、「良いところ探し」をして、説得について考える。

最後は、保健室によくあるドラマを、グループごとに即興劇で展開。養護教諭の対応について考える。









毎回、時間切れになるほど、盛り上がる。

今回も、いくつかの受講生メモを紹介しよう。

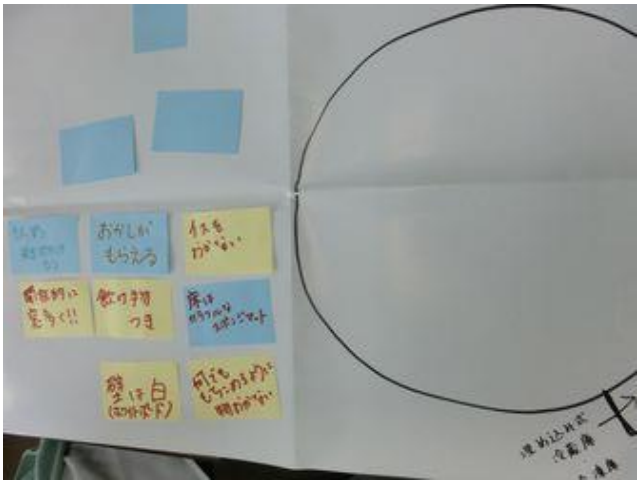
・保健室の先生って、大変なんだなってわかった。

・ポスターを作った時、こんな授業がどうして本当に実現できないのかなと思った。

・いろいろな患者さんがいるから、人によって対応の仕方が違うことが印象的でした。

・浅野先生は、良いところを見つける達人だと思った。

・保健室の場面では、いろいろな場面とそれに対応する保健の先生がいて大変そうだった。



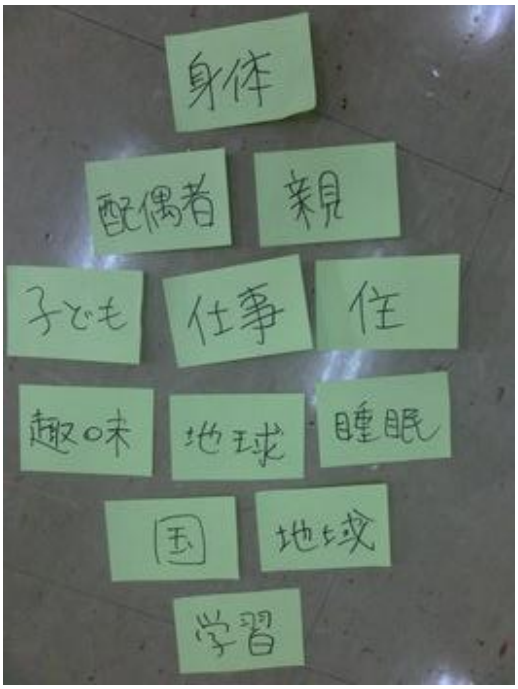
・〇〇さんは普段はおとなしいけど、たくさん意見を言っていた。

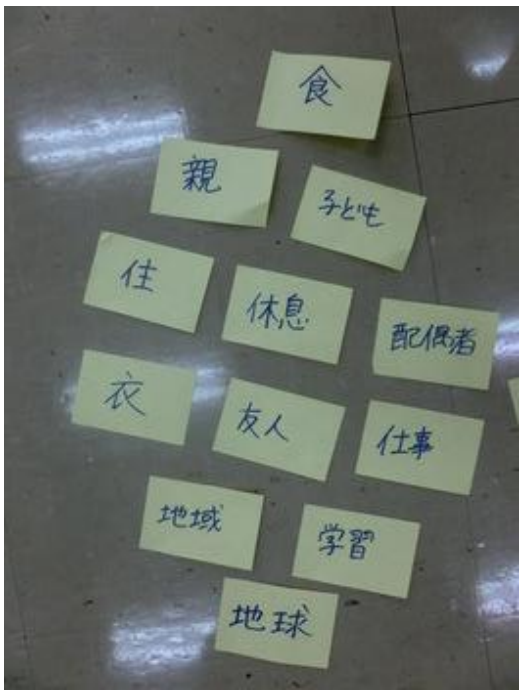
・授業内容に合わせた教室を考えるだけでその授業が楽しそうに感じた。

・悪口を言っている子の視線をそらす〇〇さんのやり方は思いつかなかった。

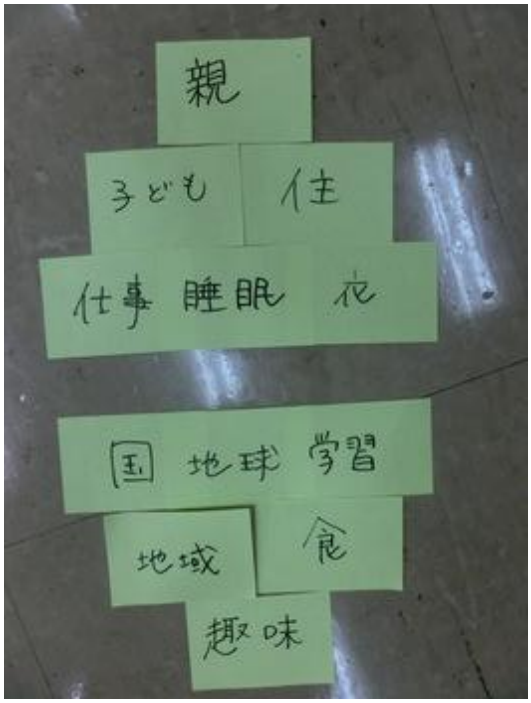
・人によってカウンセリングの仕方が違っていて、その人のいいところがでてた。

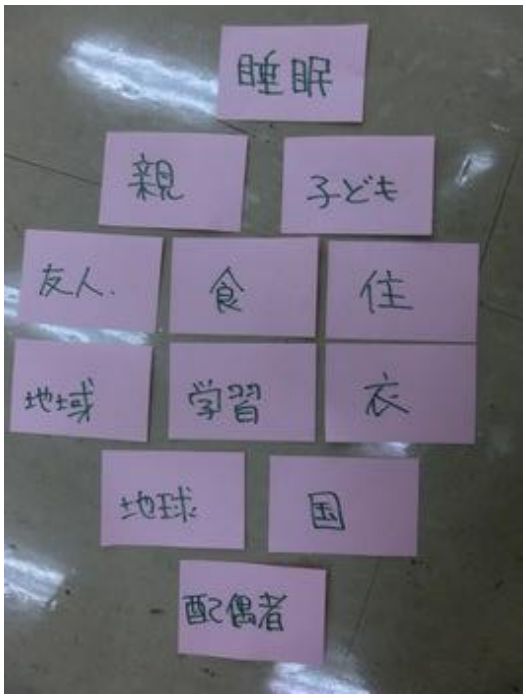
・こういう授業から、患者のストレングスを見つけ活かすことにつなげられると思った。



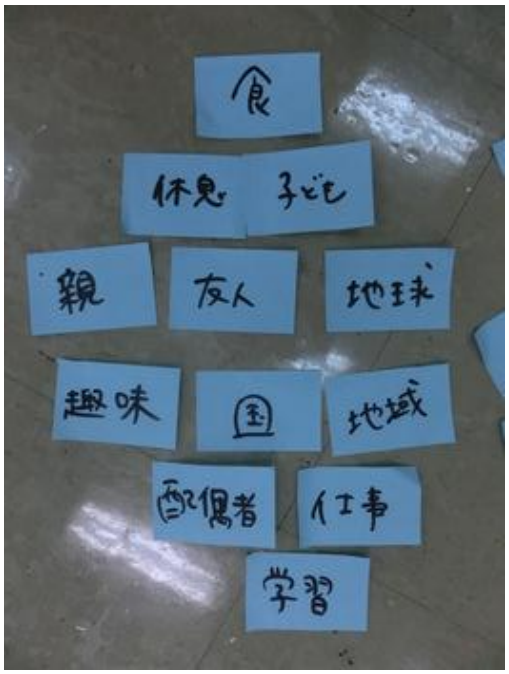


人生創造・進路創造　　2016 年 05 月 12 日

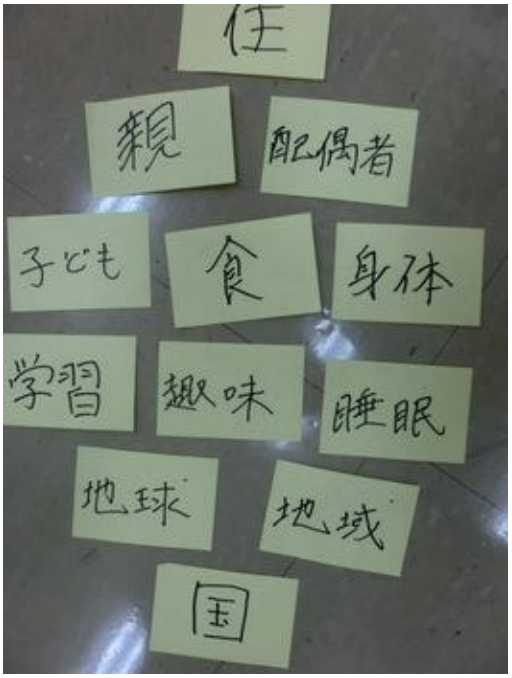




今回は、人生創造・進路創造にかかわる活動を三つ行った。受講生たちは、自分なりの考えをしっかり持っている。しかも、多様だ。それらを交し合うなかで、発見しあい、考えを広め深めていくことになる。



いずれの活動も、ここ約１０年間の私の授業の定番になっているが、時代・学校による違い、受講生による違いが目立つ。大勢に従っていればよい、ということから卒業して、自分なりのものを形作りつつあることを示しているようだ。



まず、大切なものを上から下へと並べる「人生で何を大切にするか」（写真参照）では、近年の傾向として、親・子ども・配偶者・友人を大切にするものが多

いが、今回はそうでもない。食・睡眠・身体などを上位にもってくる学生がいるのは、看護専攻らしいのだろうか。住をトップにするものもいる。衣はほとんど登場しない。地域・地球・国・趣味というものには、「大切にしない」下側に登場するものが多い。

これをもとにした討論が面白い。

・これからの人生なのだから、年長の親より付き合いが長くなる子どもの方が大切だろう。
・地域は、今はほとんど関係ない暮らしをしているが、子育てなどでいずれ重要になるだろう。

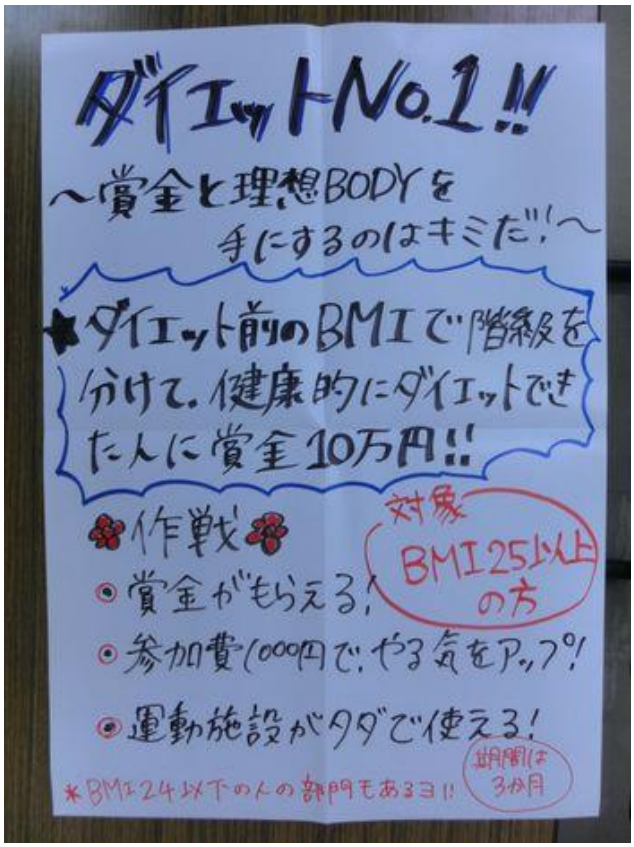
進路創造で大切にするものでの討論では、生活を重視するのが圧倒的に多く、ついで、能力判断・夢・忠告尊重だが、社会予測・自然はゼロだった。

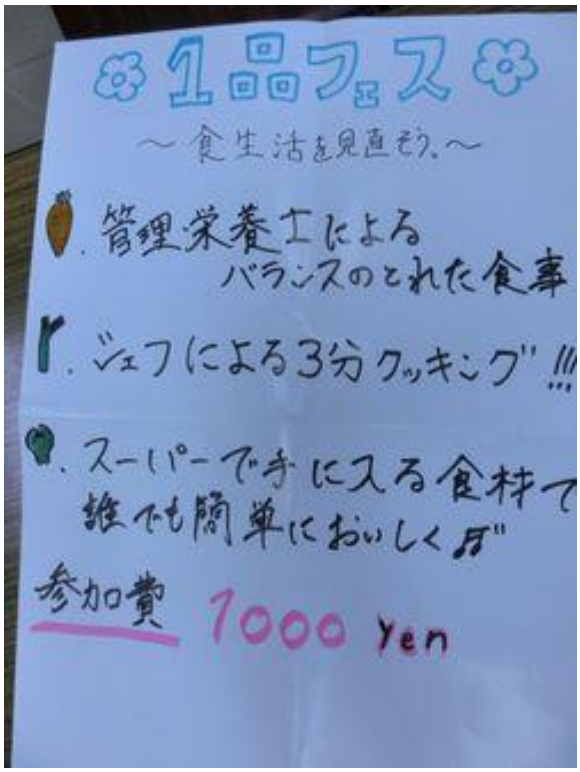
生活は、生活できるだけの収入を得るというものだ。生活対夢・能力判断との論議が盛り上がった。大学生でも、自分なりの意見を堂々と言うのは、なかなか難しいが、今回は、かなり論理的な説得力のある発言が続出だった。これまでの授業で発言するのを聞いたことがない学生が堂々発言するのを聴いて、驚き感動したというメモ書きもあった。

進路物語は、他者をどう見るか、他者が自分をどう見ているか、ということに関心が集中した。

いつものように、受講生メモからいくつか紹介しよう。
・価値観が似ている人もいれば全く違う人もいる。
・みんなが自分のことを知ってくれていて嬉しかった。
・人の大切なものが全然違うことが面白かった。
・進路では暮らしがよくなるような職業を選ぶ人が多かったが、生活するうえでお金はあるに越したことはないが、多くはいらないと思った。
・配偶者の扱いが難しい
・大切なもので、自分にとってだけでなく、子どもにとって大切なもの（地域）を挙げていてすごかった。
・普段からいろいろなものを観察しようと思った。

健康キャンペーン　　2016 年 05 月 26 日



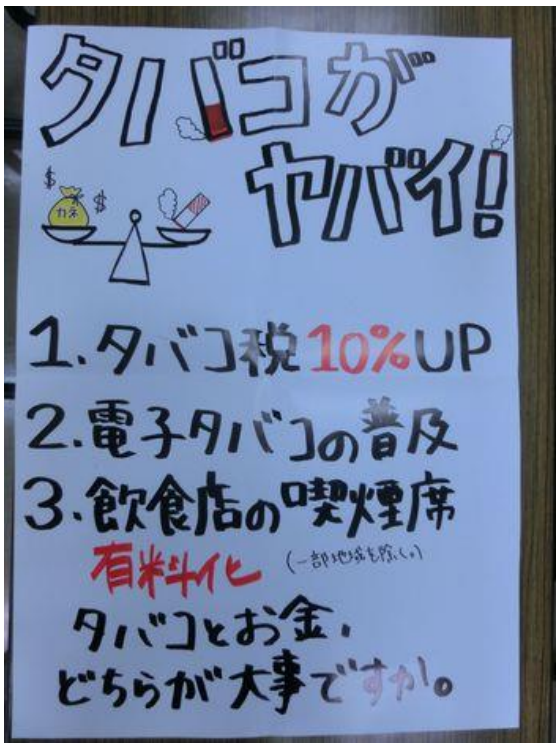


24 日授業は、健康にかかわるキーワードについて、「役立つ－役立たない」「大切にしている－いない」の規準で、表に並べ、それをめぐって討論することから始める。

ストレス、祈りといったものでも、人様々な捉え方があることを発見。

次に、グループで、テーマを立てて健康キャンペーンを行う活動。写真は、そのために作成したポスター。

後半は、次週プレゼンする、困難を抱える地域での困難打開のための活動展開の計画を立案。次週が楽しみだ。



授業最後に書いた受講生のメモをいくつか紹介しよう。

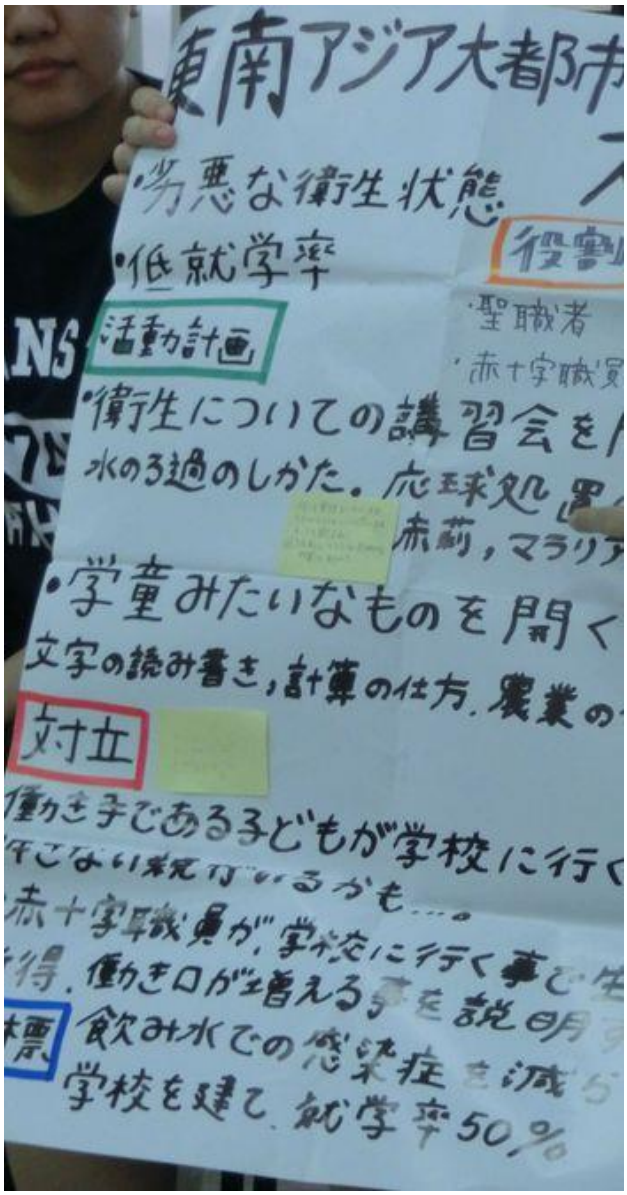
・その人の生きてきた環境によって、大切にするもの、役立つものは変化する。

・企画をつくるのは楽しかった。み

んなのアイデアすごかった。

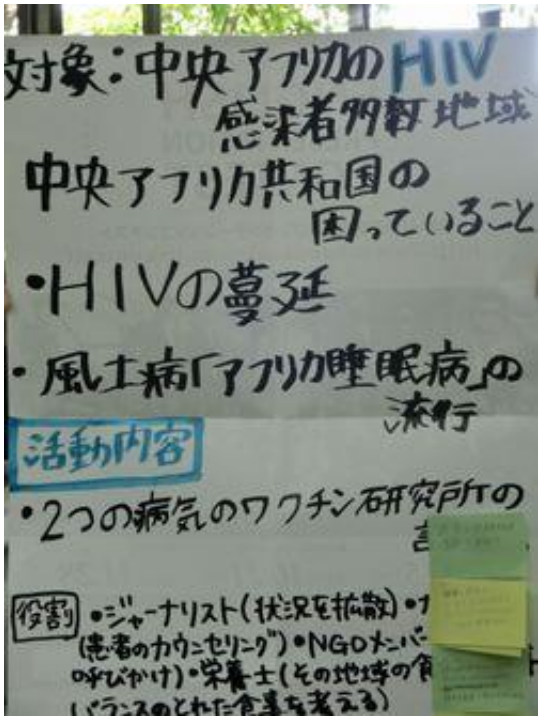
・ポスター作成を考えることが、今後自分が働くことでの参考になると思う。

・ヒマラヤ山岳地帯周辺国の社会問題を見つけるのはたやすいが、計画をたてるのは大変難しかった。

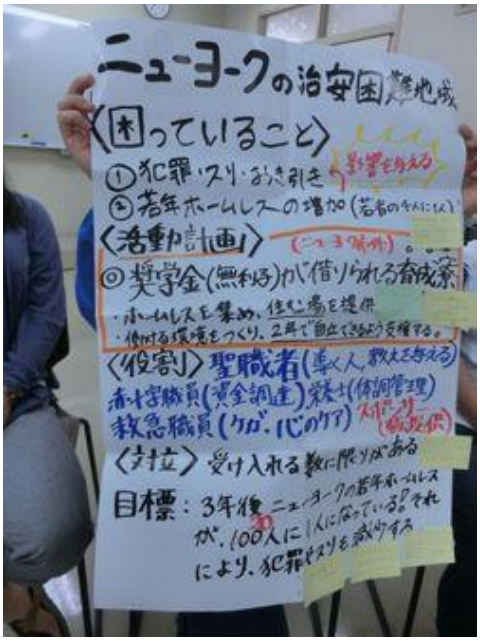


世界の困難地域に取り組む　　2016 年 06 月 02 日

３１日の授業の前半では、前回授業でアトランダムに編成した世界の困難地域に取り組むグループによる活動プランのプレゼン･討論を行った。



ここ１０年ほど、毎年この課題に取り組み、世界的な視野をもって活動計画を作成してきたが、今回も、その地域についてよく調べ、相当に綿密な計画が５つ出された。写真のようなポスターに示されたものに、グループ外から多様なアドバイスが寄せられ、各グループは、それに対応して、計画を発展させていった。



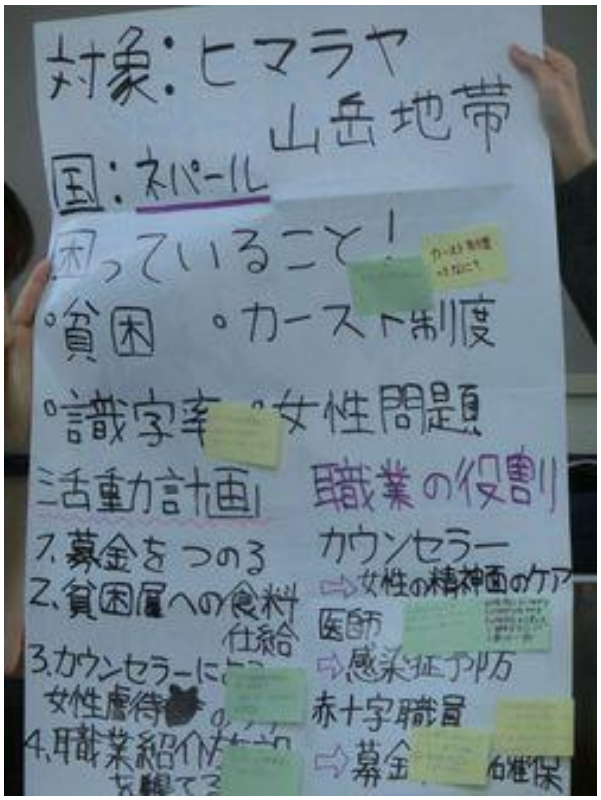
後半は、４人グループの受講生によるワークショップ。病気と闘う

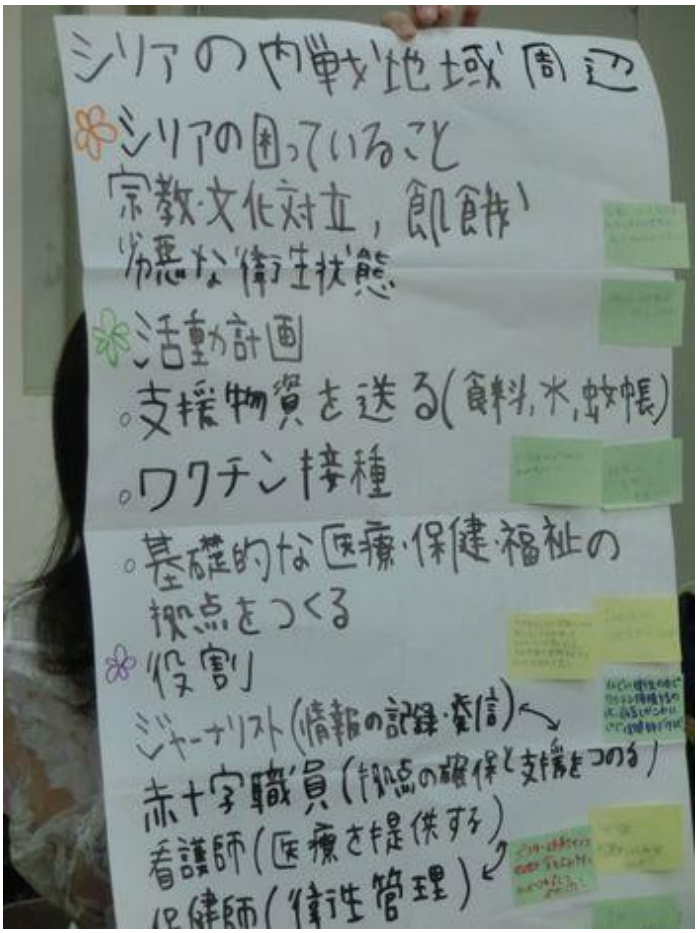
派か、バランス回復を大切にする自然派か、という肩たたき討論をおこなった。和やか、かつマジな進行の中、受講生全員が発言し、内容的にも盛り上がった。コーディネイターたちの構成の仕方、進め方は初めてとは思えない豊かなものに溢れていた。

双方とも、充実ぶりを感じさせるものだった。

特別レポート提出も最終回となったが、掘り下げたものが続出だ。いくつのもののその一部を紹介しよう。

・無難に生きていれば失敗はないし、挫折もない。挑戦したいことがあっても失敗や挫折を恐れていつも「無難」に物事を決定していた。でもそれは、私だけの考えではなく、教育の場でそうであったということも私が





無難を選ぶことが当たり前になった影響だと思われる。

わたしは、教育の現場に［無難］を求めていいと思う。実際、私自身苦しんだ経験があまりないし、このまま人生を生きられたらいいと思っている。だが、その無難の中にも知識ではない何かを蓄えなければならないし、挑戦する場､意見を言う場をもっと作るべきだとも考える。教育がこうあるべきだというのはなくて、さまざまな考えがあるのが教育であると総括したい。

・沖縄では大学への進学を諦める人がかなりいるはずなのに、それをサポートする奨学金などは日本が行っているものがほとんどなので、もっと沖縄に特化した制度の充実が求められると思う。教育が金次第になっているというのは本当にその通りだと思う。どんなに優秀でも県外で就学するとなるとお金がかかるし親の負担を

考え諦める人が多いと思う。

大学への進学と収入にはそれなりに関係がある。進学できない子が親になればまた同じことになり、連鎖はなかなか断ち切れないと思う。それはよく目にする光景だと思う。金次第ではなく、その人の学びたいという気持ちや学力はもっと注視されるべきだ。

・これまでの教育学の授業やレポートを通して、私は、「教育」とは、教育を与える側も受ける側も両方の作用があって成り立つのではないかと考えた。「教える」を「育てる」ことは、一人で行うことはできないということに気づいたからだ。また、よりよい教育とは、ただ点数を与え貰うものではなく、考えや知識を与えていくことだと思う。そのためには、教育者も学ぶ姿勢を止めずに、向上心を持って、良い学びを与えられる努力をしていくことが求められるだろうと思った。そして、その姿勢は、教育を受け手にも影響し、学習を良いものとしてとらえ，人生において大切なものとなり，自分なりの考えを持ったフリースタイルな人で、社会を豊かにしていくのではないかと考えた。

最後の授業　　2016 年 06 月 09 日

７日に、自己評価・他者評価を行い、すべて終了した。自己評価・他者評価ともに、自分自身とクラスメイトをよく見ている。見る眼が鋭くなったということか。前向きで、前進面と今後の課題を率直に書いているものばかり。毎回２コマの８回の授業という短期であったが、一人一人の成長を感じる。
２１名という少ない受講生であることも幸いした。これだけの人数だと、私も一人一人がよくわかるようになる。今時の若者は「受身的」にみえがちだが、実は、自分をきちんとかたちづくり、いろいろな世界に挑戦していることが、授業中の発言、レポートなどを通してわかる。「したたか」に生き、なにかを発見創造しているように感じる。

今後、看護師という専門職になる学習・トレーニングを経て、職業生活に入り、多様な活躍をすることが見込まれる。その未来への期待は大きい。

一人ひとりの学生は、無論個性的である。経済的事情で、自分および家族を支えることを続けなくてはならない学生、多様なチャレンジングなことに取り組みたいという学生がいるかとおもえば、「無難路線」を歩みたいという学生もいる。

「無難」といっても、行く手には、多様な「無難な路線」の選択、あるいは「無難」なはずが実は大変なものといった想定外のことが待ち受けているだろうし、「無難」を探すのも大変だ。皆についていく、流れに任せるということでは、「無難路線」を歩むことは難しい。

いずれも「指示待ち人間」ではなくて、自分なりの選択創造をしていかなくてはならない。そうしたことが出来る「個人」が出来上がりつつあるのが彼らなのだ。入学したてのころとは、かなり異なるレベルになっているのだろう。同世代の若者の印象よりは、しっかりしたものを感じる。

最後に冗談で、「私が緩和ケア病棟にいる時に、ケアしてくださいね」と話すと、明るく返す受講生たちだ。最後のレポートでも、私への優しい言葉がけ、決意表明を書く受講生がいた。

この若者たちが、看護職で活躍するころは、看護の仕事自体も、人々の病態も健康状態も、人々の生き方・人生も、今とは大きく変化しているだろう。そのなかで、どんな生き方をしていくのだろうか。再会することもあるだろうが、どんな姿になっているのか、楽しみだ。

看護大学での私の授業は、あと何年続くだろう。毎年、私にとっても、充実感溢れる出会いの時である。だから、もう少し続けたいが、限界のある私の体力・気力は、いつまでそれを可能にしてくれるだろうか。

２０１７年

2017 年 04 月 12 日

若人の新鮮な感覚　授業一回目

１１日、沖縄県立看護大学での『教育学』の授業開始。毎年前期に２コマ連続で７回半の授業をしているが、今年で、１０何回目かだ。

昨年１１月で琉球大学の授業が終わったから、授業そのものも半年近くぶりだ。

毎年のことだが、学年によってカラーが異なる。今年も、まじめさに加えて、フランクな感じがいい。そして「ういういしさ」がストレートに伝わってくる。

物語を創っていく活動、ほめ言葉探しなど、例年と同様な活動、そして「学校で学んだこと、学ばなかった事」などの活動をする。とても興味深い発見が多い。

終了後の受講生レポートからいくつか紹介しよう。

・ほめる時、「すごい」だけじゃなく、具体的に言うと、さらにうれしくなると思った。

・人との挨拶のバリエーションを増やすだけで、受ける人の印象が違う。
・生活に関する大事なことは学校では教えない。それは自分から進んで学ばないといけない。
・２０年後くらいの学校はとても今とは違うものになってるのかなと楽しみになった。
・患者役をやったときに前向きな言葉で自分をほめてくれるとやる気がでるので、ほめることは大切だとわかった
・ほめられると嬉しい。ほめると自分を高められる気がする。

他者に対するコメント
・落ち着きのある話し方で自分の話をしてくれるので、話がスッと身に入ってきてとても良いです。
・ほめ方真似したいっていわれて嬉しかった
・人とは違う魅力や視点があったので、もっと話してみたいです。

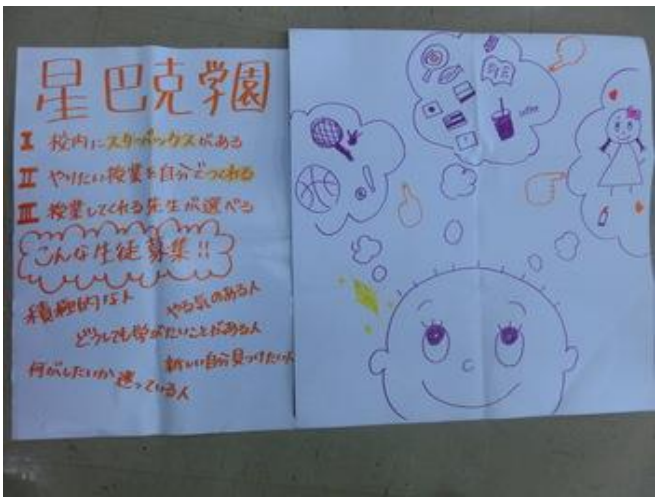
今年は、私との共通の知り合いが多い受講生が多い。極めつけは、近所の人がいた。２年前にも、同じ字出身学生がいた。実にいろんなつながりがあるものだと改めて思う。

2017 年 04 月 19 日

学校を作る　授業２回目

今回は、自己発見・他者発見ビンゴゲームの後、服装の色の濃淡で一列に並び、できたペアで相手から色選択の理由を聞き出す活動。すでに知り合っている受講生同士だが、新たな面を発見し、つながりを深める。

その後、学校で「こんな科目いらない」「こんな科目があったらいい」の活動。



それらを踏まえて、「こんな学校を作ろう」を、テーマごとに集まったグループで、リレーお絵かきで学校イメージをポスターに書きながら、アイデアを作る。プレゼンの後、ポスター討論。

４つのアイデアを写真で紹介しよう。

最後に、「今日の授業での発見」をミニレポートに書く。いくつか紹介しよう。

・皆、学校に縛られていると感じているんだなと思った

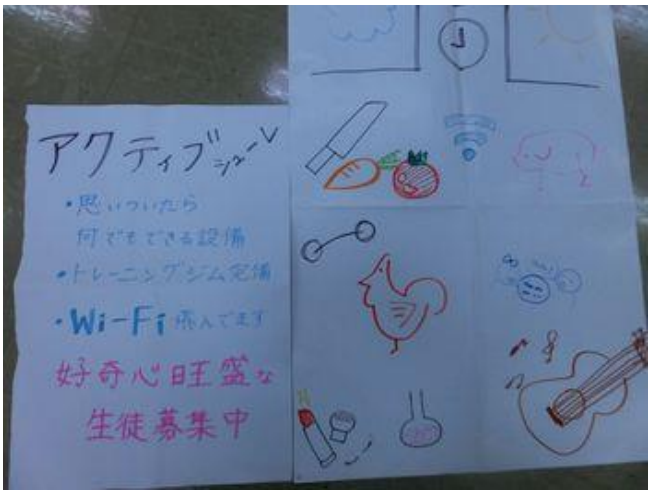
・グループメンバーと話すことで、それぞれの価値観を感じた

・自分たちでこんな学校がいいと考えてみても、予算とか周りとのつながりとか、やるべきことがたくさんある。

・人と同じことを見つけるのは難しかった

・結構みんな、「自由」な学校にあこがれている

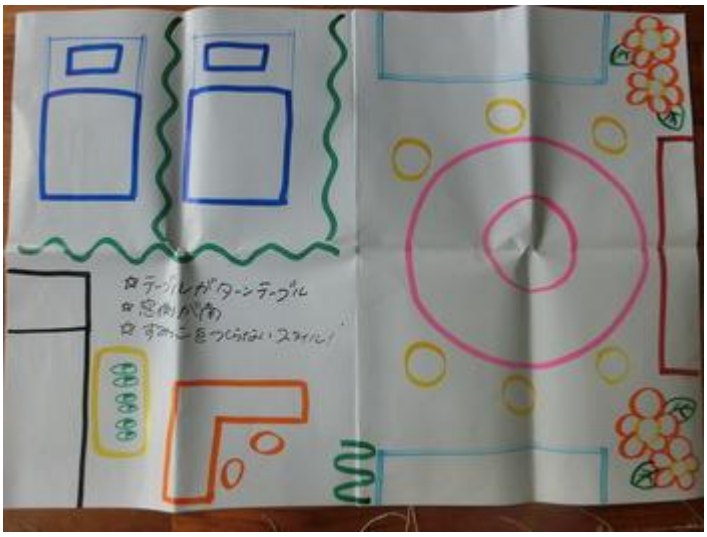
・つくりたい学校を考えると楽しかったけれど、現実では難しい。でもやりたいと思えば、フリースクールなど視点を変えたらいいと思った。



最後の写真は、作りたい学校ポスターの中に登場した私の似顔絵

2017 年 04 月 27 日

楽しい保健室物語演技を通して養護教諭の役割を考える



今回の最初は、「どんな教室・椅子・机がいいか。配置をどうするか」の活動から始めた。「疲労を取るストレッチ体操の授業」を、林のなかの芝生に上で裸足になってするアイデアなど､五つのアイデアが登場。

写真は、そのなかの一つの保健室アイデア

次は、迷っている患者を説得するロールプレイ。

そして、３番目は、保健室での物語を３つのグループに分かれて、即興劇で作っていく。数回のバージョンで、リアルでユニークな物語が生まれた。それをとおして、保健室・養護教諭の位置と役割を考えた。

即興劇なので、必死な感じで演技。救急車が飛び出したり、校長が登場したり、仮病の生徒が出てきたりと、ドタバタだが、なかなか面白い。養護教諭は具合の悪い生徒を助けるだけでなく、具合の悪い学校も助けるという感じの物語ができてきた。

いつものように、ミニレポートから紹介しよう。

・円い形の教室はなんでないのだろうと不思議に思った。
・家みたいな教室がほしいと思った
・保健室の先生は普通の先生もサポートしなければならないんだなと思いました。
・人の気持ちを理解できないとなれない仕事だと思った。
・保健室登校の子は、周りの子ども達に理解されづらく、保健室の先生として説明するのが大変だとわかった。
・保健室を通して、不登校の子たちが友達をつくることができるかもしれないということ。
・同じ場面から始めても全然違う展開になったので楽しかったです。
・保健室の先生になりたいと思っているので、今日の講義良かったです。
・養護教諭になりたい気持ちが高まった。
・柔軟な判断力と養教自身のゆとりも大切
・保健室が学校を救うって、良い言葉だなと思った

余談　毎回、２限、３限の連続授業だが、あいだに昼食休みがある。今回は、受講生と一緒に弁当を食べる。すると、４０年前の琉球大学時代の受講生が二人も通りかかって、おしゃべりをする。お二人とも、今は看護大学で重要な役割を果たす先生をしておられる。

2017 年 05 月 04 日

人生創造　授業 4 回目

今回は、人生創造にかかわる活動３つを行った。「私の人生で大切にする価値を順に並べる」「進路選択の時に、一番大切にしたいこと」「進路物語を創ろう」だ。最後に、受講生の提案で、劇めいた表現活動もした。そのなかで私が注目したのは、進路選択の際、大切にすることをめぐっての「肩たたき討論」だ。例年と大きく異なる傾向が出てきた。

半数以上の受講生が、将来の「生活」を重視することをえらんだのだ。次に、自分の「能力」をもとにするもので、他の「夢」実現、親や教師の「忠告」を大切にする、将来を「予測」して選択する、「自然」な流れに任せるはほぼゼロだった。それでは討論になりにくいと思ったのか、数人の学生が、「夢」と「自然」の椅子に座って、討論が進んだ。

例年だと、いくつかのグループにばらける。そうではなく、圧倒的に将来の生活を第一に考えるということが、確実で安定した仕事である看護師を選んだ中心的理由になっている。他の資格では、なかなか将来見通せなくなっているなかで、看護師ほど確実なものはないからのようだ。近年の若者の傾向を見せたものだろうか。来年以降もこの傾向が続くのだろうか。

いつものように、最後のミニレポートをいくつか紹介しよう。

・私は「夢」チームのように、希望たっぷりの未来を想像できなくて面白いと思った。
・考えが違う人と討論すると、自分の考えを見直すことができる。
・自分のことを皆がどんな風に考えているのか知れた
・自分は大切だと思うことが、他の人は大切にしてないと思っていて、その違いが面白いなと思った。
・テーマを決めて場面ごとのコマ撮りが意外に難しかったが、やってみると面白かった。
・１０分で劇が作れる
・人のこと考えて、その人のこと書くの、すごく楽しかったし、周りの期待がうれしかった。

2017 年 05 月 10 日

受講生によるワークショップ　授業５回目

いよいよ授業は後半に入った。受講生自身が、受講生相互を動かす方へと進む。

今回は、「１０年後の沖縄は？」という未来予測をめぐっての討論、「なりきろう」という環境教育のきっかけになる活動をした後で、受講生の三つのグループが「ボディランゲージで伝える」「４０歳になった時の年収は？」「男の仕事？　女の仕事？」を行った。

受講生によるワークショップは、当初うまくいくのか心配したが、やってみれば、立派な進行で、他の受講生の満足度も大となった。

これらを通して、多くの発見と討論が生まれてきた。いつものように、提出レポートのなかから抜き出してみよう。

「なりきろう」の活動で

・落ち葉になりきる時に、普段歩かないところを歩いて、学校にこんなに鳥がいるんだという発見があった。

・自分は「つらいな」と思う時があるけど、物の方がつらい時があるんだんあ、と思った

「年収予測」の活動で

・年収２００万未満の専業主婦希望が少なくて驚き

ワークショップのコーディネイターをして

・ワークショップを通して、人を楽しませることと実行することとの難しさを感じた。

・バタバタしたけど、難しい方を挑戦した良かった。楽な方を選ぶより、学びができたと思う。ワークショップが効率よく回るようにアシスタントすることができた。しっかり役割を決めたわけじゃないけど、やっていくうちに自然と司会とかアシスタントが決まるもんだと思った。

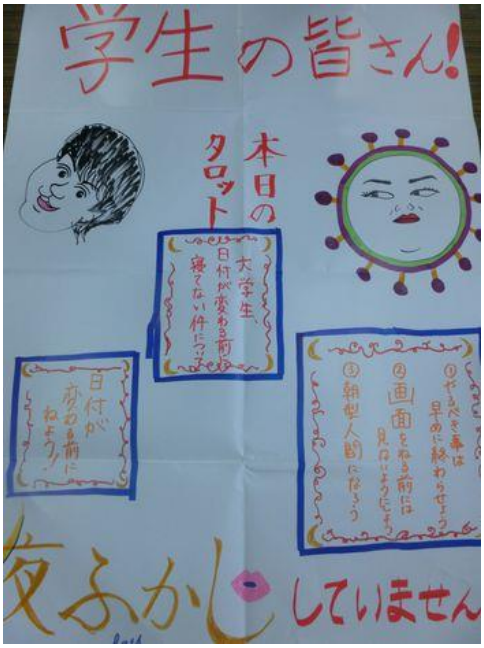
「テキスト第６章を読んでの特別レポート」から

・先生から授業で学ぶよりも友達同士で教えたり、教えてもらったりする方がわかりやすい気がします。だから、グループワークはどの授業にも取り入れるべきかなと私は思います。

・私の友人がフリーターをしながら自分のしたいことをしているが、私は怖くてそのようなことができない。だが、一方で羨ましくも感じる。私はいつの間にか社会と同じような考え方になっていた。もっと自分の意見、羨ましいと思えることを恐れずに自信をもっていえるようになりたい。しかし、言い訳がでてくる。だから、私は看護大学を必ず卒業して、その後に夢をかなえるために努力して、「夢と現実」に終わらせないようにしようと思った。

2017 年 05 月 18 日

健康キャンペーン　人生創造レポート



６回目の授業では、二つの健康観をめぐっての討論。そして健康キャンペーン企画つくりとポスター作成。

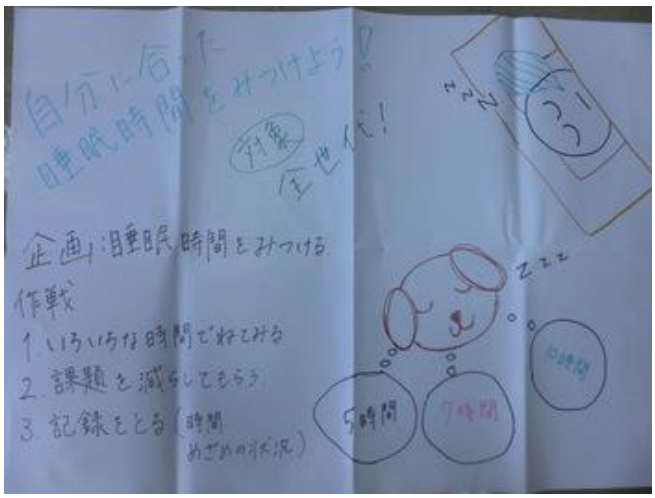
今回は、写真のように、四つの企画が登場。睡眠や食事が多いのが特徴だが、いずれの企画も、これまでにないタイプのもので、興味深い。

午後は、各地の難題に取り組む国際会議のための取り組み計画を作成。

頭を随分使う授業となった。

国際会議に向けて、次のミニレポートは印象的だ。

「日本とは環境の違う他国のための活動を考えると「～～してあげる」という感じで上から目線になってしまいそうになった。もし海外で活動できたら逆に自分が学ぶことも気付かされることもあるだろうなと思った。」



前回までの「人生創造」の授業で深めたこともかかわって、特別レポートには興味深いものが続出。いくつか紹介しよう。２０歳前後でここまで考えるのは立派。

･私の現在までの人生について発見した事、考えたこと。

「授業で自分の意見を述べる機会が増え、他の人との意見の違いを知り、人によってこんなにも意見が違うのかと感動した。」

「今までは自分の意見を求められても周りに合わせて

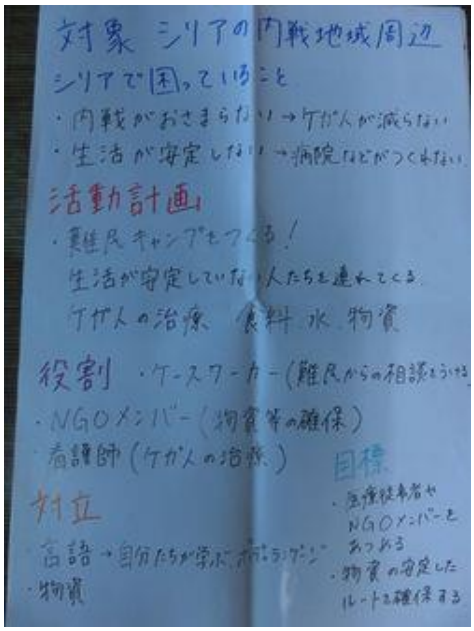
似たような意見を述べることが多かったと気づかされた」

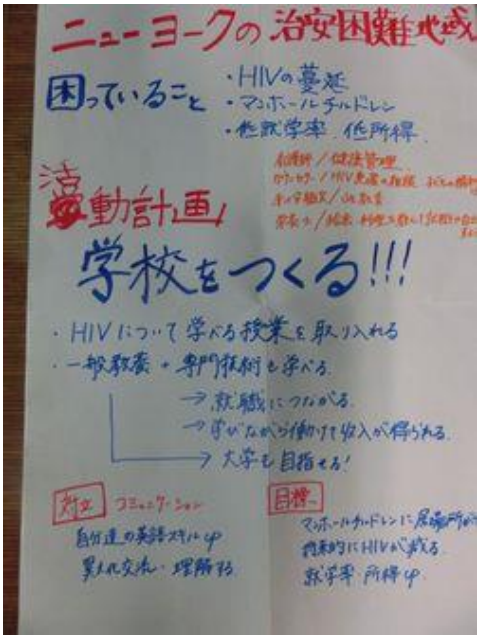
・私がこれからの人生で追求したいこと

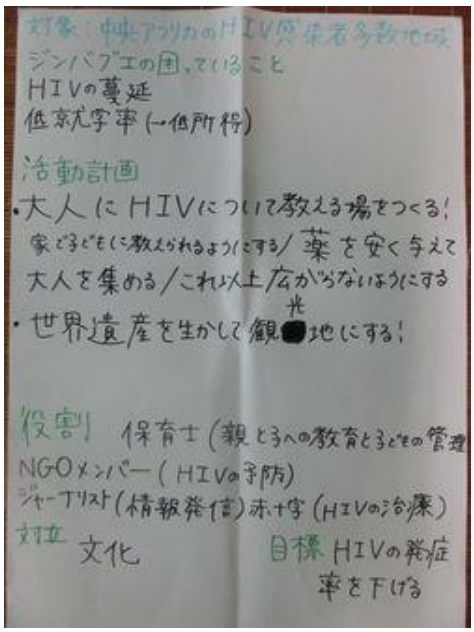
「今までの平凡な人生では選ばなかったであろう選択をして、自分の人生を今までの自分で一番幸せなのは今だと言い続けられるような人生を歩む」

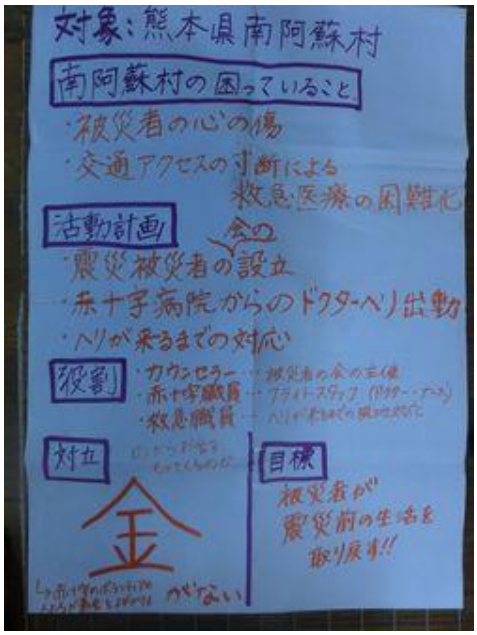
・他の人にかかわる際に、その人の人生のために大切にしたいこと。

「人から褒められたことは素直に受け入れる事。他人から何か褒められると「いえいえ、そんなことありません」と謙遜する人が多くいるが、そうすることは、褒めてくれた人の「すごい」という思いを否定し、「あなたはこれぐらいのことで『すごい』などと思うのですか」と褒めてくれた相手を非難することにもなりかねないので、人に褒められたら素直に「ありがとう」と受け入れていきたいと思う。」







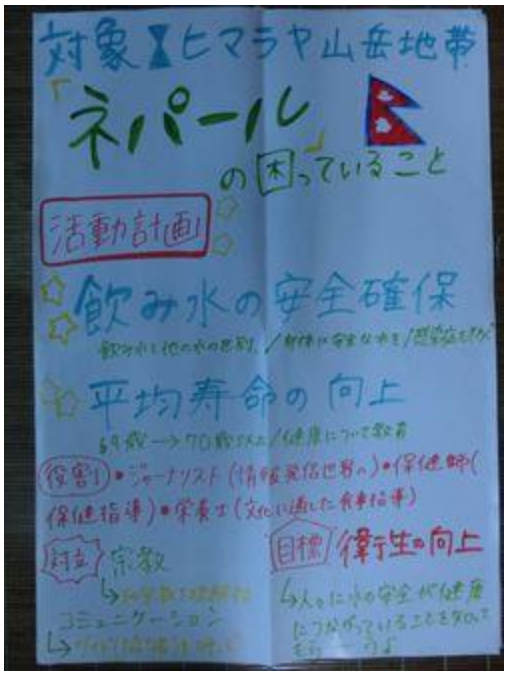


2017 年 05 月 26 日

世界の難題に取り組む企画　受講生が作るワークショップ

授業は最終盤。前回から取り組んだ、世界の難題に取り組む企画のポスター発表と討論。写真がそのポスター

後半は、受講生が作ったワークショップの実施

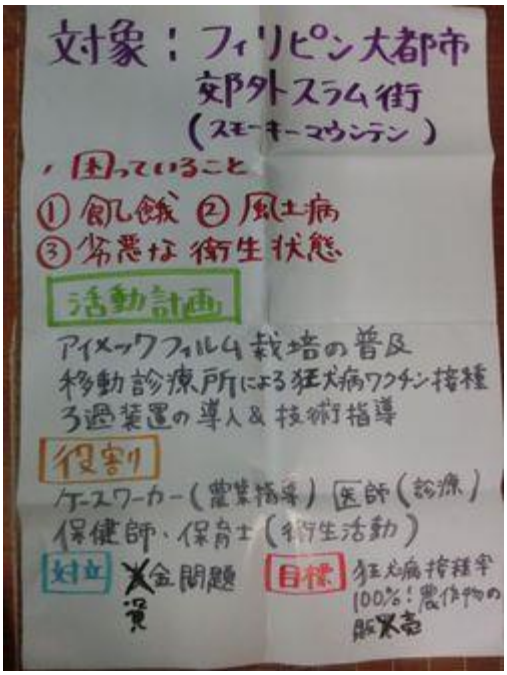


・世界の難題の取り組みにドラえもんの道具を活用する

・授業での居眠り防止作戦を考える

・こんなのあったらいいな　アイデア大会

いずれもオリジナリティあふれる企画。創造的に楽しむ



特別レポートの最終回は、拙著「沖縄おこし　人生おこしの教育」を読んでのレポート

自分自身がストレーターの道を歩んで来たことを発見・確認するとともに、そのことにどう対応していくかを綴るものが多かった。ストレーターでない生き方をする人と出会い、自分なりの創造的な生き方を模索しているとか、ストレーター的生き方をさせられてきて、指示待ち人間タイプになっている自分をどう変えていくのかとか、典型的なストレーターである自分の姿と今後について考えるとか、・・・

ストレーターという言葉を出して、沖縄の学生に提起して 10 年を超すが、ずいぶんと異なる反応が出てきている。今では、ストレーター的生き方が前提になり、それにどう向き合うのか、という事がテーマになっているのだ。こんな事態を前にして、私の思考ももう一歩踏み出していく必要がありそうだ。

２０１８年　（沖リハ授業を含む）

2018 年 04 月 12 日

授業スタート　今年も「楽」「笑」から

１０日、沖リハ一年生、１１日、看護大学２年生の授業が始まった。

いずれも、若々しい表情に満ちている。特に沖リハは入学したてなので、新鮮そのものだ。

双方とも、最初の授業は、緊張のときほぐし・やる気つくり・関係作りを軸に進む。いつものように、事前のプランはあるのだが、受講生の反応をもとに進行をアレンジしていく。

いずれも、高校時代を含めて、教師が話し学生は聞く形の授業がほとんどのようで、私のような共同創造型ワークショップは初体験のようだ。ということもあって、学生たちは驚きの中、新鮮な反応で進めていく。沖リハでは、授業のまとめを漢字一文字で表すことを恒例にしているが、「楽」「笑」が圧倒的だ。他に「新」「最」など。

私も、新鮮な受講生の反応をすごく楽しむことができた。座って聞くだけの授業だったら見えないだろう受講生の個性がありありと表現されて、興味深い。「話す - 聞く」の一対一の活動では、個性的な対話スタイルが見えてくる。物語回しの活動は、毎回、新鮮なバージョンが登場してくる。

受講生のおかげで、私も笑いの連続で、精神衛生にとてもいい。

学校側が水を用意してくれるが、双方とも飲むのをまったく忘れていた。

それにしても、生き生きと食い入るように見つめ、楽しそうに活動する姿は何だろうか。無論、最初は何が始まるのやら、と緊張躊躇する顔もあるが、１５分もすれば、すっかり様相がかわる。

沖リハは、以前は２０代半ば以降の社会人学生がかなりの比率を占めていたが、いまでは２割足らずとなった。看護大学も社会人学生が激減し、このところ、ゼロ状態が続く。多様な受講生がいると、多様な体験や知恵を持ち込んでくれて、授業展開を一層豊かにしてくれるのだが、少なくなったのは残念だ。

いずれも、１０数年、非常勤講師を続けているが、世代替わりが進んでいるなか、その年その年の個性とドラマがある。

今年はどんなドラマが生まれてくるのだろうか。

失敗もある。５限にある看護大学の授業の開始を４時３０分だと思い込んでいた。たまたま４時前に到着し、余った時間をどうするかな、と思っていたら、担当者が４時からだと告げる。タッチセーフだった。

看護大学のミニレポートを少し紹介しよう。

・自分のウリと自分を体の部分にたとえた自己紹介をすると、その人の性格も知れて面白かった。
・先生はヤバそうなんだ!
・相手のことをほめようと頑張っていると、緊張と恥ずかしさで顔がほてる発見
・こんなに楽しい授業があるのかと教育にかんしてもっと興味がわいた

2018 年 04 月 28 日

リレーお絵かき「２５年後の私と世の中」

３回目の看護大学授授業のなかで、リレーお絵かき「２５年後の私と世の中」をした。「リレーお絵かき」は、私の定番の一つだが、このタイトルは初めてだ。進め方については、いろいろなところに書いているので参照してほしい。（たとえば、「浅野誠ワークショップシリーズ７　楽しいワークショップ」）

今回は、グループ単位ではなく、全員を一つの輪にして、リレーして描いていった。とても興味深い絵が出来上がった。リレーの最後に、最初に描いた人に戻して、加筆しながら、タイトルと物語つくりをして、プレゼンする。

掲載した写真のタイトルは、母子、将来安定、強く生きる女性、自然と共に生きていく、平和。

今回の授業に即して、この活動の特徴を並べよう。

１）知性以上に、感性・身体性を使う活動

２）共同制作であること。当初の意図が次々と変化していく。最後に、一人ひとりが「おち」をつける

３）１００％の創造活動

４）とても楽しく明るい雰囲気のなかで　　今回は、ドラえもんの鼻歌が飛び出した。

５）「冗談っぽい」描きぶりのなかに「真剣さ」が忍び込む

６）夢中で進む。

７）想定外の続出を、楽しく受け止める

８）相互の将来イメージを交流し、膨らませていく。

こうしたことは、この活動を行う時にいつも見られる光景だが、今回は特に「激しかった」。スロースターターがいるのが普通だが、今回は、全員がスピードスターターだった。そして、いつもはよく見かける隅っこに少しだけ描いて始める人がほとんどいなかった。

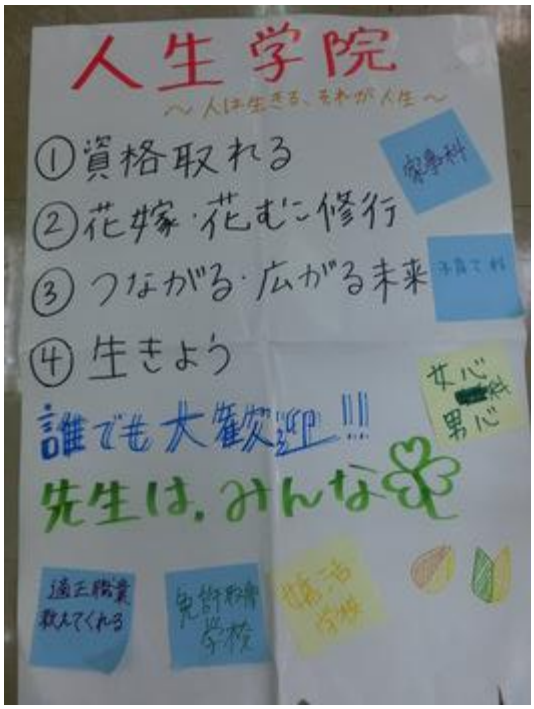
看護師などを志望していることもあろうが、今年のクラスの特性であるようにも思う。次回からの展開を楽しみにしている。というのは、私の授業のいつものことだが、当初計画をもってはいるが、受講生状況によって、どんどん変化発展していくからだ。受講生自身が運営していくやり方も広がっている。

2018 年 05 月 13 日

学生とのユンタクを楽しむ　すごいレポートに感激

久しぶりに、卒業論文相談で学生が来宅。かつては随分と面倒をみたものだが、最近は少なくなった。私が３０年ほど追求してきた「学級内クラブ」「結社」などについて関心をもった学生だ。いろいろと調べてくれてうれしい。

看護大学授業も、盛り上がっている。盛り上がり過ぎているか。このところ、共同お絵かきバージョンが続いている。「こんな学校をつくろう」（写真はその一つ）、「こんな教室・イス・机」などと続く。来週は、学生企画で「おやつ」企画がある。昔の私の授業ではいつもやっていたが、久しぶりでうれしい。



私の授業はユンタク会のようなものかもしれない。私語に悩む教師とは縁遠い。

５月１日に終了した沖リハ授業のまとめで、「ある受講生」からすごいレポートがとどいた。感動的なので、本人の許可を得て、ここに転載する。

『授業を通して発見した事、感想』

1,　人と繋がるのは勇気がいる
自分を受け入れてくれるだろうか、上手く話せるだろうか、初対面の人と繋がるのは緊張がつきまとう。大事なのは話しかける勇気、先にこちらが心を開けば、自然と相手も心を開いてくれるものなのかもしれない。
2,　伝達手段は言葉だけではない
表情、行動や目線、言葉以外にも人は様々な伝達手段を持っている。特に身振り手振りなどのボディランゲージは言葉に劣らない伝達能力を持っている。
3,　話しの聞き方
悩みや相談を受けるとき、相手が話しをしやすい位置関係を作ることが大事。実際にやってみて正面よりも横並びの方が話しをしやすいような気がした。
4.　クライエントの気持ちを読み取る
自分の意見を伝えるよりも、クライエントが何を思っているのか考えることが大切。応援や励ましよりも、理解してもらえる方が嬉しいということをロールプレイを通して気づいた。クライエントの気持ちを読み取る力、観察力をつけたいと思った。
5.　人と繋がることは楽しい
始めは緊張のあった対人援助講習も気づけば楽しみな授業のひとつとなっている。この授業ではクラスメイトの新しい一面を知ることができたり、話した事のなかった人と新たな繋がりができたりする。人と繋がることは楽しい、今はそう思うようになっている。
今後 ST となる上で多くの人との出会いがあるだろうが、ここで学んだ事、授業で感じた事を活かしながら、ひとつひとつの出会いを大切にしていきたい。

2018 年 06 月 04 日

半分終えての受講生のコメント　自分のこと。授業と浅野のこと

先週の授業で、全体の半分を終えたので、これまでの授業を終えての、「自分自身について、成長したこと・発見したこと」「この授業の特徴、担当教員浅野の特徴」を、一文字漢字または四文字熟語で書いてもらった。

次のようなものが登場した。それらのなかから興味をもったものを出してもらい、書いた本人が説明する形の話し合いをした。「エーッ」「なるほど」の続出だ。

自分自身のこと
十人十色（二枚）　開放　コミュニケーション　自由奔放　みんな違ってみんないい（二枚）　ひらめき　個　発想が無限大　発見　自分発見　自己理解　考　考力向上　親しみ　一期一会　笑　喋　多喋善断　明　粘った

授業・浅野
楽　妙　驚き　前代未聞　独特　自由（2 枚）　Free　自由万歳　気づく人　笑鍛腹筋　謎　創意工夫　親しみ　まったり　勢い　一期一会（二枚）　個　難　色黒　誠　眉　強（二枚）　宴　サクセスフルエイジング

実に多様なものが登場した。私の気持ちと響き合うものが多くて嬉しい。
　こうしたことを書き語る学生たちとの毎回９０分。実に楽しい。この年齢になって、こうした授業ができるとは、私は実に幸せ者だと思う。
　もしかすると、おじいちゃんと孫たちとの出会い・会話なのかもしれない。
　それにしても、学生一人一人の個性がどんどん溢れてくる。最初のころの緊張はどこかに消え、授業を楽しみながらも、驚きつつ考え、笑って「腹筋」を鍛えつつ、自分を出して個性を磨き、相互に親しみを増しているという感じだ。
　後半は、受講生自身が作り上げる場面が増えてくる。期待したい。前半には、おやつタイムがあった。後半はどんなものが登場するだろうか。

2018 年 07 月 16 日

学生たちのすごい協働に感動　対等平等関係　自分をしっかり表現

　看護大学授業も 14 回を終えて、次回で最後になる。徐々に受講生自身が取り組みを提起し活動を進め、進行を仕切る比重を高めてきた。14 回目は、受講生たちが 4~5 人のグループで作ったワークショップをおこなう。今回は「バイトで、いやな客に出会った時の対応策」「ダメ男と付き合う友人にどう語るか」がテーマ。現実に直面していることだから、すごい集中だし、創造的な対応が次々に生まれてくる。
　私は感心してばかり。とくに、４～5 人グループがコーディネーターとなって進める際に、全員が交代で出番

を作りながら進行していくありように驚く。しり込みしたり、だれかに頼ってしまうというのではなく、一人一人がしっかり前に出て役目を果たす姿に驚く。というのは、これまでは、グループのリーダー的位置にある学生に依存して進めることが多かったからだ。コーディネーター以外のワークショップ参加学生も、一人ひとりが自分の考えを出しながらかかわっていく。一昔前には、パスする人、「右に同じ」という感じの学生が結構いたのだが、今年はゼロなのだ。しかも、一人一人の考えが違い、ユニークなのだ。

こんな姿を目撃すると、私は感激してしまう。13 回目などは、思わず「うれし涙」がこぼれそうになってしまった。

学生を含め最近の若者を否定的にとらえる声をよく聴くが、私の場合は正反対で、学生の姿に驚き、感動している。今年の授業はとりわけそうだ。そして年々驚き、感動することが増えてきている。学生が変化してきているのだろうか。私の見方が変化してきたのだろうか（年寄りで、「甘く」なってきたのだろうか）。前半は私が仕切ることが多いが、その際に、学生とともに作り出す動き・雰囲気の作り方がうまくなってきたのだろうか。

授業の際に、学生を否定的に感じることは滅多になく、肯定的に感じることばかりなのだ。それは看護大学授業に限らない。若者との最近の他の出会いでも感じることだ。

ということで、授業が楽しくてたまらない私だ。

7 月 15 日の『琉球新報』の「晴耕雨読」欄に名桜大学の嘉納英明さんが、拙著『魅せる沖縄』触れつつ、彼が私の授業の受講生だった 30 余年以前の私の姿に触れてくれた。「鬼」から「仏」へと移っていったころのことだが、今では「仏」というより「仙人」なのだろう。看護大学の受講生たちは。私の存在を意識せずに、すごい活動を進めていく。私が発言すると、「先生もいたんだ」という感じになるらしい。毎回の授業末に書く 2～3 行のミニメモにそんなことを書いた学生がいた。

２０１９年

2019 年 04 月 12 日

変わり自己紹介　人体の部分　アイデンティティ

４月１０日、沖縄県立看護大学での『教育学』の授業がスタートした。７０歳を越して、毎週授業をするのは、この一つだけになった。といっても、半期１５回だが。

授業好きな私にとっては、とっても楽しい時間だ。明るくて健康そのものの看護学生たち。授業自体が楽しいだけでなく、彼等との出会いがまた、私の元気の源だ。それが毎年のこととなっている。

２年生の選択科目で、一年の時に、他の選択科目で履修を終了している学生が大半なので、この科目登録者は、毎年２０名前後だ。今回は１３名と少ない。

最初の授業は、数分の説明の後、すぐに出会いとつながりつくりのワークショップを、続けざまにいくつかする。そうすれば、受講生がお互いを発見しあい、つながりがぐんと深まる。

そのうちの一つは「変わり自己紹介」。３項目をカードに書いて、みんなに見せながら自己紹介する。３項目は、時々によって変える。今回は以下の通り

・自分を人体の部分のたとえると、どこか

この自己紹介を取り入れて１０年になり、累計１０００人以上の「人体部分」の話を聞くが、毎回新しいのが登場する。今回もそうだ。

手の甲　自分の手の甲は、特徴的なほどきれいだから

歯茎　　口を開けると、見えるから

膝の後ろ　自分ながら美しいと思う。

笑いを交えて楽しい雰囲気を作る

・自分のウリ

これは毎回、項目に入れる。自分を肯定的に語る雰囲気を作るうえで有益だ。

これまでに出会ったことのないものを紹介すると、

絶対音感がある

兄弟が多い。など

・アイデンティティ

これは余り試みていない。今回、試めしに取り入れてみたが、興味深い

シマンチュ　　３人

読谷人

看護学生

ゲームの中の登場人物　私だけでなく、他のほとんどの学生が知らない登場人物

こんな活動を、他にもいくつかすると、相互に新発見が多く、相互関係が深まるとともに、全体に楽しく明るい雰囲気に包まれていく。

授業の最後は、「今日の授業全体での発見」という２行レポートを書き、それに他の学生が「活躍点につい

ての他者コメント」を書いて提出する。

　いくつか紹介しよう。

・「発見」

単純な遊びだけど、頭を使う遊びだ。

３つのことだけでも相手の性格が見えてくる

ペンを使わない授業の方が先生の顔見るから、話が聞きやすい

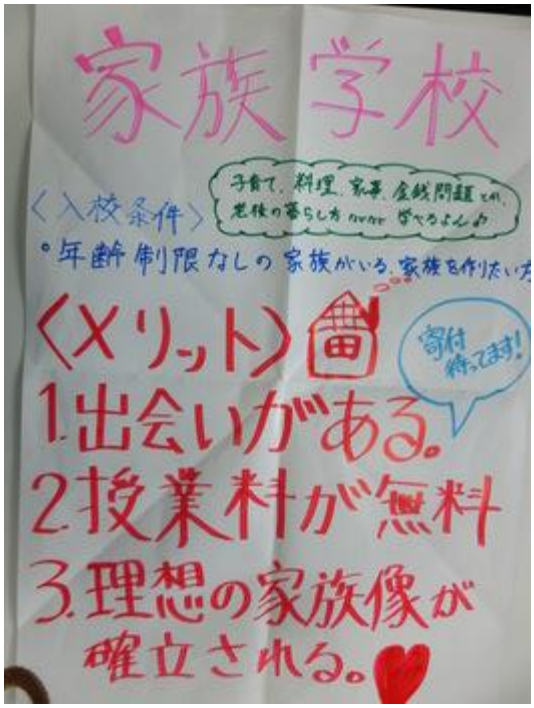
円になって楽しみながらやることで、人間関係について学ぶ機会ができた。

普段しゃべらない子と話してみて、思ったより話しやすいことに気が付いた

・「活躍点」

友達の良い所をすぐに見つけていて、すごいなと思った

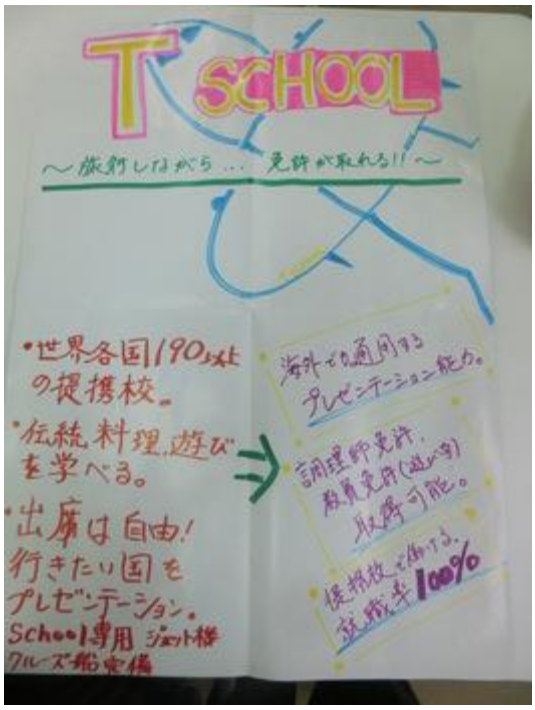
明るく積極的に参加して楽しい雰囲気造りをしていて、一緒にいて楽しかった。



2019 年 05 月 10 日

こんな学校をつくろう

　沖縄県立看護大学の「教育学」授業は、４回終了した。今年は受講生数が少なくて、じっくりした雰囲気になる。選択科目なので、一年生の時に他科目



を履修して、「教育学」履修の必要がある学生が極度に少ないことが理由。

　少人数で楽しく進める。

　８日の授業は、「こんな学校をつくろう」だ。いくつかのアイデアを出し合い、そのなかから選んだもの同士でグループをつくり、学校構想をたて、学校案内ポスターを作ってプレゼンするという運びだ。

　写真のように三つのポスターができた。

　家族学校　　これまでほとんで学んでこなかっ

たが、大変重要な家族について学ぶ学校

Ｔ－school　　旅について学ぶ学校

バラエティ学校　職業選択を豊かにする学習をする学校

これまでの学校教育の盲点をつく学校構想だ。詳しくは、写真を拡大してご覧ください。

こんな活動をしながら、教育について考えを深めて授業だ。

高校まで、与えられたものを習得するだけの受身型授業でやってきた受講生たちにとっては、びっくりするような授業だろうが、大いに楽しんでいる様子。

毎年のことだが、看護大学の学生は、自分なりの人生計画進路計画を同世代と比べれば、すごくはっきりさせている。今年は助産師志向者が多いのが特徴。そんなこともあって、家族学校が登場してきたようだ。

2019 年 06 月 05 日

即興のロールプレイ　私のワークショップで

私がすすめるワークショップでは、ロールプレイをすることが多い。場面設定と役割だけを決めて、「よーい、どん」で始め、即興ですすめていく。

この５～６月でいうと、沖縄県立看護大学の授業、沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科の授業、そして、先週行った沖縄県立総合教育センターでの講演ワークショップのいずれでも、重要な位置を占めている。

保健室に病気の子ども、保健室登校の子どもがいる所へ元気もののクラスメイトが押しかけてきた場面で、養護教諭がどう対応するか。

リハビリをいやがる患者の自宅を訪問する病院職員が説得する場面

トイレ清掃の分担区域に立候補するように説得する教員

といった場面だ。

これらは、事前にシナリオを相談せずに、即興ですすめていく。すると、当人の日常感覚が出てくる。それ

がからみあって、物語ができていく。

現場は、シナリオ通りに進む世界ではない。人間関係をつくりながら、相手の反応に応じて、臨機応変に進むのがごく普通だ。学生がするロールプレイの場合、説得される方の勢いに説得役が押されてしまうことがたびたびだ。それでも、なんとかしなくちゃと、奮闘する。

そうすると、地（ぢ）がでてきて、対応の多様さが現れてくる。その多様さから学ぶことは多い。患者宅訪問でいうと、逃げ回る患者、意味がわからないことを叫ぶ患者へのとっさの対応が求められる。その際、手を握って、「元気なら、ぎゅっと握ってください」と語り掛ける。鋏を出して、「これは何ですか」と選択肢を示して当てさせるといった対処法をとっさのうちに出す学生が出てくる。

保健室では、部屋の配置を変え、設定シナリオも変えて、物語を作っていく。

１対１説得の場合、二人の距離、そして高低差・角度などの位置関係が重要になってくる。適切な身体接触を使うこともあるだろう。さらに、説得相手への肯定的評価を具体的に含みこんでいくなど、多様な対応が必要だ。

だから、私がすすめるワークショップでのロールプレイは、その場で場面設定自体が変化発展することがしばしばなのだ。

このように、多様なアプローチを展開するなかで、自分なりの対応法を発見創造していく。

この過程は、無理強いの雰囲気なしに、「お笑い劇場」的に進める。笑いに紛れ込む事例もでてくるが、そのとき、いらだたず、一緒に笑えばいいだろう。プレイを繰り返していく中で、だんだん、新しい発見創造がうまれ、プレイも楽しく真剣なものへと発展していくのが、常だ。

進行役の私も、大いに笑い楽しみ、こんなアプローチもあるのかと、発見していく。

2019 年 08 月 05 日

嬉しい「色紙」もらう　看護大学授業終了

看護大学「教育学」が終わった。今年は、受講生数がとても少なくて、受講生との人間関係が密になり、充実した１５回の授業ができた。

最後の授業では、まとめの記入と、いろいろな話し合いをした。そして、最後に、サプライズで嬉しい「色紙」をいただいた。久しぶりだ。

まとめのなかで、「他者コメント」欄をつくり、アトランダムに５人の人のコメントを書いてもらった。その記述に「厳しいネガティブのものを予想していたのに、とてもポジティブ」なことが書かれていて、嬉しかった」といった感想が連続した。

どこの大学でもよく見られるが、学生たちは否定的な自己評価を持っていることが多いので、肯定的なものを受け取ると驚き喜ぶ。日本の教育と若者の特徴の一つだろう。

「色紙」に書かれた、私へのコメントの一部を紹介しよう。

・先生はとてもフレンドリーで、そのおかげで、初回の授業から緊張することなく参加することが出来ました。毎回毎回、今まで私が受けたことのない授業で、どんなことするのか、毎週楽しみでした。

・私の中で一週間の授業の遊びという位置で、週の真ん中の５限にある教育学がとても好きでした。

・毎回、想像もしないような授業形態で、とても楽しい時間を過ごせました。「自分たちで作る授業」は難しくて大変なイメージだったけど、実際には充実した時間で、濃い時間になった。結果的にこういう授業形態っていいなと学ぶことが出来ました。

・いままでの座学の授業にはない斬新な授業のスタイルで、生徒によく意見を求め、自分自身の考えを表に引きずり出されるような授業でした。

・ゆったりとしているけど、全員が考えていて、新しい発見が多くとてもたのしかったです。もっと色んな人と話したいと思うようになりました・

・自分の視野が広がるだけでなく、普段話さない人と話しコミュニケーションを深めるなど、講義じゃない人間性を養う授業でとても楽しかったです。

・立派な看護師になって、先生を看護できるよう頑張ります。

・こんなに眠くなく、自分から積極的に授業に参加し発言したのは初めてです。自分と違う意見をのぞくことができて、専門的な知識ではないが、人間について色んな考えを学ぶことが出来ました。

２０２１年　　※　２０２０年は、コロナのため不開講

2021 年 04 月 09 日

久しぶりの授業

８日、２０１９年前期以来の授業をした。昨年度は、新型コロナ禍があり、遠隔式授業ができない私なので、不開講となった。そのため２０２０年度は沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科での４回だけの授業を６月にしただけだ。こんなに間の空いたことは、海外研究以来初体験だ。

２年生対象の授業で、孫と同じ学年の学生たちだ。ついに孫世代を教える年齢になってしまった。

受講生たちも、昨年度は、ほとんどが遠隔式授業だったので、同学年生の間でも、半数は顔と名前が一致せず、初めて話をするという。ということで、最初は緊張気味だったが、すぐに動き出す。出会いと会話、共同作業に飢えていたようだ。「これこそ大学の授業だ」といってうれしそうに語る学生もいた。

私の授業は、スキンシップが多いのだが、コロナ対策で、いろいろな活動もエア式でやるしかない。授業開始の定番「じゃんけん列車」も、「自動車と運転手」もエア式だ。でも、それがかえって楽しさを増やしたかもしれない。

創造的な物語が次々と飛び出してくる。人体の部分にたとえての自己紹介は、なぜか首から上の部分が半分以上だった。

物語づくりも、どんどん展開していく。受講生たちの素晴らしい活躍で、頭をうんと使いながら、深みを感じる第一回目だった。

２コマ連続授業、つまり３時間余りなので、私の体力がもつかどうか心配だったが、なんとか無事終えることができた。でも、年齢による疲れは激しく、帰宅してしばらくは横になっていた。そして、２４時間かけて疲れがようやく取れてきた。なんとか、８回の授業をやっていけそうな感じがする。

毎回提出してもらう超ミニレポートから２つばかり紹介しよう。

「自分は発表・発言に苦手意識があったけれど、この授業を通して自分の思ったことを積極的に言えるようになりたい。人のことをほめつつやる気にさせることが苦手だとわかったので、普段から人をほめるように意識したいと思った。」

「『センス良いね』という褒め言葉など、自分が使わなかったものがあったので、使いたい。先生が人にお願いするときに、必ず褒めてから頼むので、嫌にならない。」

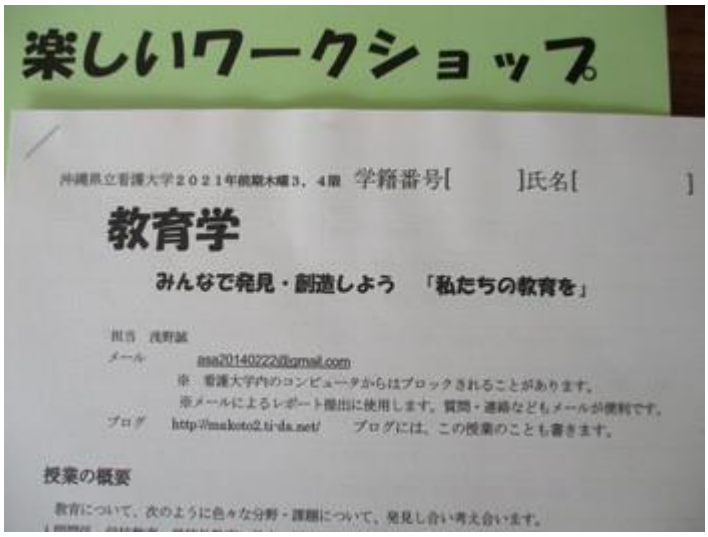
以下は、他者がレポートを書いた本人について書いたコメント

「普段進んで発表する方ではないが、今日は勇気を出して行動してよかった。新たな一面をみれた感じ。人の前で発言することが、苦手なわけでないと思う。」

「ゲームにも積極的に参加し、個人とのかかわりも作っていて協調性があると感じた。また、発表も多く視点

を変えたところからの発見がすごいと思った。」

写真は、テキスト（緑表紙）と配布したプリント集



2021 年 04 月 27 日

対面授業に飢えていた学生たちが盛り上がる

４月から始まった沖縄県立看護大学２年生対象の『教育学』授業。昨年の１年生の時は、ほとんどが遠隔授業だったので、対面授業に飢えているようだ。学生相互間の関係もそれほどできていなかったので、なおのことエネルギーを猛然と出す場となる。思わず身体距離が「密」になりそうなので、それを避けるのが大変だ。

これまで欠席者１００％ゼロ。こんなことは歴史上初体験。飢えていたのだろう。

私の授業はワークショップ型であるし、人間関係がとても「密」になるのでなおさらだ。教育や看護の物語を共同で作り出すのだが、受講生たちは、昨年の遠隔授業に加えて、高校時代までの知識伝達中心の授業の「くせ」があり、知識とリクツだけで対応しようとする。教育も看護も人間関係をベースに、しかも感性面行動面での共同過程が重視されるが、それを知識とリクツだけで対応しようとする傾向をどう突破するかが肝心なことになる。

３回６コマの授業では、「こんな看護をしたい」「こんな看護師になりたい」（写真）「こんな教室配置にしたい」（写真）「こんな学校を作りたい」といって、共同でお絵かきをする活動をうんとした。写真は、そ

の際の作品だ。

加えて、困っている患者さんを説得する場面、お互いに褒め合う場面、挨拶をつないでいく、などといった活動を旺盛に展開していく。

この後、さらに看護や教育をめぐる難題に取り組むなど、共同創造が一層増えていく。今年はコロナ対応も対象にした難題にも取り組んでもらおうと構想を練っている。

ところで、やりながら、私の疲れは半端ない状態だ。大学授業を続けられるのも、あと何年だろうか。もし、私の授業の参観を希望する人がおられたら、「いまのうち」だろう。水曜日１２時４０分～３時５０分　６月はじめまで。

2021 年 06 月 07 日

仮想コロナ対策会議と受講生がつくるワークショップ

看護大学授業は、コロナの影響で一週間先延ばしになったが、６月３日に７回目の授業をした。１０日に最後の授業となる。毎回２コマ連続して行っているので、こうなる。

３日の授業は、前回スタートした「仮想新型コロナ対策会議」の後編である。進行担当者が、オリンピック開催とコロナ対策に焦点化して討論しようと提起したので、議論が絞られる。相互のやり取りの中で、多様な論点が登場してきた。アトランダムに抜き取ったふりかえり短文で、発見感想をみてみよう。

「いろんな業界の立場に立つことで、皆一生懸命やっているから責めるんではなくて、もう一度引き締めることが大事と思った」

「行政にばかり質問や意見があり、実際の国民と行政もこのような間柄なのかと思った」

「コロナとオリンピックは想像上だといろいろと考えられても、規則や上の立場の人を忖度することで実現するのは難しそうだと思った。」

「上の者への意見が多く出たけれど、行動するのは結局国民の私たちであるから、受け身になってはいけないと感じた。」

７回目授業の後半は、受講生が作ったワークショップを行った。遭難した際に起きたいくつかの行動について、ジェンダー問題もからめての討論は、意見が大きく割れて盛り上がった。私の想定外の発言も多く、すごく学んだ。

貿易ゲームをヒントにして、コロナ禍のなかでの病院経営をめぐっての活動は、すごく興味深かった。有力病院と弱小病院との間に生じる対応の差が浮き彫りになってきた。毎年のことだが、受講生が作り進めるワー

クショップは、とても盛り上がる。

この授業は大好きなので、もっと続けたいと思うが、私の体力は、そろそろ限界に来ている。授業中に、少々気分が悪くなり、受講生からチョコレートをもらって、息を吹き返した。それにしても、帰宅するとバタンキューだった。

翌日は、オキリハの授業。６月の４回だけ担当する。言語聴覚学科の一年生対象で、専門家としてクライエントとどうつきあっていくか、ということをワークショップ・実演ですすめていく。毎年、学生が変われば反応や動きが変わる。それがまた興味津々だ。この授業は、改めて報告しよう。

2021 年 06 月 17 日

沖縄県立看護大学１５年間の授業の終了

６月３日の７回目の授業の途中で、エネルギーが切れ始め、私は座ったまま授業をしていた。いつも教室内を歩き回って受講生と話しながら進める授業スタイルではなくなっていたのだ。終了後、一人の受講生がチョコレートを持っていたので、一粒頂いて、元気を少し取り戻した。でも、帰宅してバタンキューなってしまう。

４月からの授業の終了後、毎回いつまで続けられるかと迷う日々だった。来年も「できる、できない」と考えあぐねていた。でも、３日の状況を見て、決断をした。早速、看護大学担当者に、次年度からは非常勤講師を辞退するとのメールを送った。色々なことで、本当にお世話になったことへの感謝の気持ちを添えてのメールだった。実際、授業では楽しいことの連続だったし、教職員の方々には大変お世話になった。

ということで、１０日の最後の授業をする。終了後にサプライズがあった。学長室で、学長・学部長・事務局長から、ねぎらいの言葉をいただくとともに、花束まで頂いた。非常勤講師で、これほどのことをしていただくのは、私にとって前代未聞のことだ。

ということで、２００６年から担当したから１５年間となるが、楽しく充実感のあるものになった。

授業は、他に沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科の４回のゲストティーチャー的なものをしている。これもいつまでできるだろうか。回数が少ないし、看護大学のように２コマ連続ではないし、自宅から２０分余りで行ける所なので、続けら

れそうにも感じるが、迷いはある。

思い起こせば、１９７２年から始めた大学授業は、ほぼ５０年になる。半世紀だ。ドラマにつぐドラマの私の授業だった。「私の授業史」を書くのもいいな、と思った。かなり断捨離はしたが、授業資料がいっぱい残っているし。

それにしても、体力上、いろいろなことをするのが難しくなっていることを実感するこのごろだ。大脳の方は、以前とかわらない状態なのだが。

沖縄リハビリテーション福祉学院　言語聴覚学科　「対人援助基礎演習」

２０１５年

2015 年 06 月 11 日

受講生の変化　自主的全員発言の促進

今年は、昨年に引き続いて言語聴覚学科の４コマの授業を担当することになった。６月１０日から４回だ。授業というよりは、人間関係の作り方のワークショップだ。相手は、初対面の３１名の１年生の皆さんだ。

いつどこの授業でも最初の時間に、どれだけ受講生とかみあうか、どれだけ受講生がノッてくるかということに、関心をもち、力を注ぐ。そして、その過程で受講生の特徴をつかみ、次回に生かしていく。

受講生の変化ということでいうと、学校差学科差がある。琉球大学授業のように、全学から集まり、受講生相互がほとんど初対面である場合、沖リハや看護大学のように、一つの学科の学生だけで構成されている場合の差である。

後者の場合は、受講生同士がすでに作っている関係性のなかに、講師である私が入っていくという感じだ。すでにある関係を生かして進められるという利点と同時に、すでに出来上がっている人間関係とかムードめいたものとか習慣といったものを、必要に応じて改編する必要も出てくる。

その点では、沖縄のどの学校にいっても、受講生相互の暖かい関係といったものが、とても授業進行に役立つ。他府県の、とくに大都市の大学でする場合、受講生の相互関係が、数人の仲間どうしに限定され、相互無関係の「白々しい」ものが教室を包む。そのなかで、前向きの明るい相互関係をつくり、授業テーマに向かっての大きな流れを作りだすことに苦労してきたが、そうした苦労が、沖縄ではとても少ない。

さて話は戻る。今回の沖リハクラスは、同じ学科で、入学した４月から二か月余りたち、人間関係が深まり始めていそうだが、それにしても一年生なので、今後３年たって卒業時点になると、どういう物語が作られていくのか、楽しみにしている。

もう一つ、年々の変化も大きい。ここ数年の大きな変化は、どこの大学・学校でも共通しているようだが、受講生全体を「仕切る」役割を取る人が激減していることが特徴的だ。そうした役割を取ろうとすると、距離を置かれることさえある。だから、「世話役」のような形で登場することもある。場合によっては、一番「若い」ものに、そうした役割が回っていくこともある。

今回のクラスでは、授業前に「このクラスの特徴を漢字一文字で表すと？」と何人かの受講生に尋ねてみた。応え

は「個」「乱」「混」…ということで、個性豊かの人たちが混然としているということらしい。そんななかからどんなものが生まれてくるのか、大変楽しみだ。

実際、ワークショップをすすめていくと、そんな世界を見せてくる。よくある「誰かに頼って、目立たないようにしている」タイプの学生は少なく、自分を自分なりに出しているという雰囲気だ。来週からが楽しみだ。

ところで、どの授業でも、受講生たちが、グループ内だけでなく、全体の場で、自発的に自分なりの考えを表明し討論できる世界を、授業開始数回目には実現したいと思っている。その道具として、マジックマイクロフォンという技法を使うことが多いが､マイクがまわってくると緊張しながら発言するということから始まることが多い｡それを、誰もが自発的にマイクを取るような形へと展開させていくのだ。

マイクは、マジックペンとかチョークなどをマイクに見立てて使う。教室に数本のマイクが装備されている教室ではそれを使う。

今年は、いずれのクラスでも、３～４回目の授業でほぼ全員が発言しているようだ。

2015 年 07 月 02 日

説得する　人生と仕事の一文字漢字　真剣で楽しい盛り上がり

１日に終了したが、最後の活動として、「説得する・誘う」をした。下に示すようなことを、グループ単位で、説得役とクライエント役を交代しながら、１対１ですすめる。

最初のうちは、照れている様子だったが、だんだんノッてきて、なかなか優れた説得シーンが続出し、学ぶことが多いワークショップとなった。

❶　対人恐怖的傾向をもち、人間関係の悩みをもつ人に、あるカウンセラーをすすめる

❷　腰痛でいくつもの治療を試みたが、うまくいかず１０年余り悩んでいる人に、ある治療をすすめる

❸　重度の障害がでてきそうな疾患が進行しているが、親の経済的事情から治療に専念する条件がない人に、治療に専念できるような条件を提示しながら、入院治療を説得していく。

❹　働きすぎで体をこわし、ドクターストップ状態なのに、自分がしないと業務がストップする仕事があるからといって、出勤しようとしている人に、休むようにすすめる。

❺　つらいだけで効果があがらなかったリハビリ体験のために、「リハビリにいかない」といっている人に、リハビリにいくように説得する

❻　仕事探しに疲れ、社会に自分の居場所がないといって、自宅に引きこもり始めた人に、ある仕事をすすめる。

そして、最後に、「これからの私の人生と仕事を漢字一文字であらわすと？」ということで、一枚ずつ書いて、床面に置いてもらった。順に関心をもったカードをとり、書いた人に説明をしてもらった。真剣なムードが漂い、興味深い話が続いたが、時間切れとなった。

出てきた漢字一文字を並べて見よう。

広　楽(2枚)　耐(3枚)　志　心　援　受(2枚)　支　探　祈　試　挑　笑(2枚)　幸　努　思　素　得　配　正　待　和　信　優　戦　続

2015年07月10日

対人援助とコミュニケーション　沖リハ授業で受講生が学んだこと

先週までの４回の一年生対象の授業、「対人援助とコミュニケーション」についてワークショップ風に展開した。最初は、緊張してぎごちなさを感じたが、最後には見事な展開となった。

受講生に、そこで学んだことをミニレポートを出してもらった。それらのごく一部を抜き書きして並べてみた。

・始めは、ぎこちなかった関係も、じゃんけん列車などの繋がりを持つことで、笑顔が出てきて楽しい関係が作れた。

・先生が講義初日に話していた、違う物があっていい、混合しあっていい物が作れるということが講義を通して感じることができた。

・自分の考えはみんなとは必ず同じではなく、一人一人考え方が違うということを再認識しました。

・同じ意味の言葉、挨拶でも沢山の種類があることを学んだ。

・愚痴を言うことで、溜め込みすぎず適度に出すことも必要だと実感できた。

・相談や話を聞く時は、位置も大事。

・聞き方が、上手い人に対しては、相手も話しやすくなることが、どういうことなのかわかった。

・とても簡単にできるコミュニケーションの方法を教えていただきました。

・授業を通してコミュニケーションをとる方法はひとつではないんだと気付きました。

・相手と関わる時は、謙虚な気持ちで関わる。相手の立場を考え、自分だったら、どんな気持ちになるか考える。

・言葉にはパワーがあるから、使い方を間違えてはいけない。

・相手を褒める事は、相手の心の緊張もほぐすし、リラックス効果があると感じた。私が実際に楽に感じた気がしました。

・相手に何かを伝えるときは伝えたいという気持ちが一番大切ではないかと考えた。

・相手に合わせたコミュニケーションをするには相手を見るという当たり前で一番難しいことが最も大切ではないか

と考えた。

・ボディータッチは、人や、場面に合わせて使うと良い。
・スキンシップで距離感を縮める反面、相手の特性を理解する必要性を意識した。
・友達みんなに後ろをむいてもらって、話しかける。相手に伝えたいと思う気持ちがあれば、ちゃんと伝わるんだなと感じました。伝わってきた時も、伝える時も楽しかったです。
・「こんにちは」と後ろ向きの人の中の一人への声かけで、だいたい誰に声をかけてるのかが段々わかってきたことが、とても不思議だった。

・気持ちは言語化しなくても伝えることができる。
・言語は便利ではあるが、万能ではない。
・言葉を音声や身振りなど色々な方法で表現することはとても大事なことだと思った。
・ボディランゲージで伝える事の難しさ。これは現場で患者さんが実際に感じている事だと感じた。
・ボティーランゲージ、とても難しいと思いました。もっと伝わりやすく出来るようになりたいです。

・臨床に行ったときに、どうしたら患者さんが心を開いてくれるか考えたり、他の友達がやっているところを見て、患者さんが興味を持つことを聞いたり無理やりではなく、どうですか～？と優しく接している友達をみて真似したいし友達のいいところを、沢山発見することができました。
・患者さんには色々なことをかかえてる人が多いと思うので、それを考えて声をかけたいと思いました。
・説得するロールプレイでは、クラスメイトの言葉がけや振るまい方を見て、色々な優しさの表現があると感じました。
・人を説得する際に、ワンパターンでなく他の人のを盗むという発想を持ててよかった。

・対象者だけでなく、周りへのサポートやアドバイスも大切。
・患者さんには色々なことをかかえてる人が多いと思うので、それを考えて声をかけたいと思いました。
・先生が仰っていた、強制よりも、クライエントをその気にさせること、やる気を引き出すこと、解決・前進の仕方をしめしつつということを先生の講義を受けて学べまし。生活や仕事に生かしていきたいです。
・強制するよりも、やる気を引き出すことが大事。
・拒否している人には、すぐには成果を求めず、根気強く待つ。

・スキンシップから入った授業で、劇ができるようになるまで段階を踏んでてよかった。
・浅野誠先生の授業はいつも体を動かしたりアクションが多くて、とても楽しかったです。
・この授業をしてて、私はこれから医療人になろうとしているという実感が湧いて来ることが出来ました。

・4 回の講義という短い時間でしたが、とても中身の濃い講義だったと思います。最初はジャンケンして電車を作ったりしていたのに最後には医療従事者としてロールプレイングするようになっていて、驚いたと同時に多くのことを学びました。これから実習へ行くときや、実際に就職して ST(言語聴覚士）として働くときに浅野先生の講義を思い出して、活かしていきたいと思います。短い時間でしたが楽しい講義をしてくださってありがとうございました！
・現場でのＳＴとしてなにが必要かを講義中常に仰っていたので、想像しながら講義に取り組んだ。
・講義内で学んだ事は臨床で初めて会った患者さんに自分自身を知ってもらうとても良い方法だと思いました。

・様々なロールプレイングをし、私はＳＴとして、患者さんにとって心地よいＳＴになりたいと思いました。
・最初はロールプレイングをするのにも躊躇していましたが、次第に恥ずかしさもなくなり、楽しく講義を受けさせていただきました。私もいつか現場に出て、臨床をする日がきた時には、浅野先生の講義内容を思いだし、活かしきれるようにしたいと思います。
・最後の講義で、クラス全員の「これからの仕事と人生についての漢字一文字」が並んだとき、クラスメイト一人ひとりのその人らしさが見えて、ジーンとくるものがありました。何人かの、一文字に込めた思いを聞くことができて、みんなで進級・国試合格・卒業し、同じ目標を叶えたいと改めて思いました。

２０１６年

2016 年 05 月 15 日

「対人援助基礎演習」授業

４コマ分の特別授業の第一回が、１３日午後にあった。一年生対象で、ここ数年続けている。

入学したばかりの受講生相手だが、毎年、学生の雰囲気が全く異なる。学校差とか年齢差ということもあるが、学年差もあるのが、興味津々だ。

今年はとても元気がいい。自分を出してくる。しかも、豊かな感性行動性をもって。こちらが圧倒される感じだ。かつ、とても創造的だ。

第一期生から継続して１０年以上行っている活動もあるが、それが随分個性的なものになる。

例をあげよう。

・物語作りでは、かれらのである身体部位を次々と出してくるものが登場。
・グチを言い聴く活動では、大変な学習が必要な学校生活の「グチ」が登場。
・最後のふりかえりで、書いてもらった一字漢字が、「楽」「笑」が多いのはいつものことだが、「斬（新）」「困」「変」「珍」・・など興味深いものが続出

素晴らしくノリまくりの時間だった。次回からの展開が一層楽しみだ。

こうしたクラスによる違いがでてくるのは、長年授業をしている私にも不思議なことだ。だから、授業は私にとっても楽しくてたまらない。

この楽しく前向きの活動性と今後豊かに展開しそうなクラスメイトとの人間関係は、大変な学習が要求されるこれからの難関を突破していくうえで、すごく役立ちそうだ。

いくつかの学校の授業を通して、なにか世代的変化を感じる。それは、自分から発信したいもの・発信できるものを蓄えている学生が多いということだ。「最近の若者は受身的だ。指示待ち人間だ」という声を聞くことがしばしばあるが、私はそうは感じなくなっている。若者が持っているものが出るような授業を展開すれば、とても豊かな授業が、受講生とともに創りあげられていくと思うのが、最近の私の実感だ。

2016 年 05 月 22 日

身体で「伝える」

今回は、身体で「伝える」を中心に展開。

言語聴覚士の仕事は、初めて出会うクライエント、しかも言葉の伝達で困難をもつことが多いクライエントと、コミュニケーションを取りながら進めるというのが多い。

言語聴覚士になるための基礎的な学習は、膨大な知識を習得しなければならない。そして、晴れて言語聴覚士になると、その知識をもとに、クライエントの「やる気」を高めながら、多様なリハビリ行動を始めるよう働きかけなくてはならない。基礎知識は名詞形だが、実際の業務は動詞形が中心になる。

そこで、コミュニケーションの困難を抱えるクライエントに、いかにコミュニケーションするかが鍵になる。ということで、１）「落ち着かせる」「寄り添う」「励ます」といったクライエントへの働きかけの動詞形の多様な動作を演じ、それを他の人に伝える活動、２）握り合った手を通して、「協力」「よろしく」「落ち着いて」「期待」といった簡単なメッセージを伝える活動、３）「やる気あふれていますね」「もう少しで達成ですね」といった短文で表された気持ちを多分に含んだ行動を、演技しながら、同じ演技をしている同士を発見し合う活動などを行う。

かなりムズイ活動だが、受講生たちは大胆なチャレンジをしながら、やっていく。無論、前回同様、笑い一杯の楽しい活動になった。

最後に前回同様、漢字一文字で、今回の活動を表現してもらったら、写真のようになった。今回は、前回たくさん出た「楽」「笑」以外の単語を、しかも「知的なもの」「感性的なもの」の各々を書いてもらった。
今回は、「難」が 10 枚も出てダントツ多い。そうだろうなと、私も思う。

専門職に就くということは、自分の好き嫌い・得意不得意などを横に置いて、相手を受け止めながら、相手に通じるように働きかけなければならない。かなり高度な仕事だ。
今回の活動では、そんなことを磨いていくきっかけをつかんでもらえれば、と期待する。

2016 年 05 月 30 日

コミュニケーション力の急成長

全体で９０分×４コマの授業の後半は、２７日午後におこなった。

評価する、とくにほめることは、専門職にとっても、誰にとっても、対人関係に不可欠なことだ。それをできるだけ、相手に即して具体的にすることの練習から、今回は始めた。そして、「大金を盗られて、学校を辞めようとしている人に、相手をほめながら、思いとどまらせる」場面設定での説得プレイをする。

その後、次の場面設定で、即興劇を行う。

場面設定と配役（グループと配役は、クジに類した方法で決める）

１．失語症（別のものでも可）のＡは、通院していた病院で、改善が見られなかった。勤め先も退職し、故郷に戻ってきたが、生きていくことに自信喪失さえ感じていた。病院へ通う気力は失せていた。
２．配偶者Ｂは、Ａの知らないうちに、ある病院と連絡をとり、病院からスタッフＣＤが訪問することになった。
３．実父または実母のＥ（ＥＦ）は、想定外の事態におろおろしている。

４．Ｅ（ＥＦ）の家

５．ＥまたはＦが玄関でスタッフを迎える場面からスタートして、３分間の演技。

６．年齢男女は、適切に決める。スタッフの職種も適切に決める。

この即興劇は、合計３回繰り返して、深めていった。

２回目を終えた時に、他グループへのアドバイスを全員がポストイットに記入して渡した。（前ページ写真）

２回目、３回目に重ねるごとに、恥ずかしさが消えるだけでなく、よりリアルなものになっていく。大変素晴らしいものなりそうなので、３回目の演技は、担任教師がビデオ撮影した。２年後に見て、どれだけ成長したかを発見確認しようというわけだ。

授業最後は、言葉だけでなく、身体性感性を含めたコミュニケーションについて、いくつかの実技的なことをした。

大変盛り上がり、深みを感じさせるものとなった。

最後に、「こんな言語聴覚士になりたい」というイメージを一字漢字でポストイットに記入し、床に並べた（右写真）。書かれたものを並べておこう。

頼（4枚）　笑（3枚）　和（2枚）　心（2枚）　開（2枚）

以下は1枚ずつ　人　信　誠　温　寄　感　希　輝　優　真心　変　私　察　分　苦　理

これらを見ながら、４年後、１０年後の自分たちについてのリレー物語つくりをして終えた。充実した時間だった。

受講生の皆さん（どうやら、このブログを、多くの卒業生の皆さん、関係者の皆さんがご覧になっているようなので、ご覧になった皆さんも）、この授業についての感想・意見を含んだ、私へのメッセージを、この記事のコメント欄にかいてくださると幸いです。

２０１７年

2017年06月05日

受講生の対応とともに作る授業

授業を受講生の対応に合わせてつくっていくのは、当たり前のことだと思う人がいるかもしれない。実際のところは、受講生の対応を無視して、教師の作ったプラン通りに進め、予定する対応ができない受講生には、無理やりプランに合わせてさせていくか、あるいは脱落させてしまうというのが、ごくありふれている。

そのためか、受講生は、自分の本音は抑え付けて（隠して）、教師に合わせることが上手くなる。だから、授業が指示待ち人間をつくりだすことに大いに役立っているといっていいかもしれない。

私の場合、授業前に私なりのプランをもつのは当たり前だが、それを受講生の対応のなかで、変化発展させていく。そして、受講生自身が授業を作りだす方向へと向けていく。だから、同じ授業プランであっても、受講生の対応次第で大きく変化し、二度と同じ授業というのは出来てこない。

終了した看護大学授業がそうだったし、始まったばかりの沖リハ言語聴覚学科の授業もそうだ。沖リハの授業は、対人援助演習のうちの 4 コマ分だ。対人援助職志望の受講生が、自分自身の対人援助の姿勢と力を高めることを課題にしている。だから、当然のこと、受講生次第で授業の流れは変化発展していく。

ということは、同じ学科の学生でも、年ごとに大きな差異が生まれるという事である、と同時に授業進行のなかでも、刻々と変化していく、ということだ。

今年の受講生は、とても明るく、元気がある。そのなかに何人かの社会人学生が落ち着きと思慮を加える大きな役割を果たす。また、自分の思い・考えを出すのに慣れていず、対人関係に緊張が強い学生もいる。でも、流れの中で徐々に溶け込んで、自分なりの考え・思いをだしていけそうな気配だ。

ということで、多様な世界をくぐってきた受講生たちが混じり合って作りだす世界はとても興味深い。

毎回の授業最後にやることだが、今回の授業をとおして、学んだこと、感じたこと、考えたことを一文字漢字にして示すということでは、つぎのような文字が登場した（写真）。だれでもいいが、そのなかから聴きたい文字を指示して、書いた人に話してもらうということで、授業は終わる。たとえば、「安」について、「安心できる」と話された。

これは、毎回の授業の振り返りで、10 分ほどで、考え・感想などを全員が表出しあい、共有しつつ深めていく一つの方法だ。

2017 年 07 月 03 日

個性的説得スタイル　授業終了

６月に４回だけ私が担当する（他は学年担当教員）授業が終了した。実は、看護大学も終了したので、今年の全授業が終了したことになる。次は、次年度になる。こんなに長期に授業がないのは、１７年ぶりのことだ。私の授業人生も最終盤になってきた。

受講した言語聴覚学科の今年の一年生は、とても個性的でしっかりした人が多い。社会人も混じって、年齢幅があることが、すごくプラスに働いた印象だ。４回目の今回は、「つらいだけで効果があがらなかったリハビリ体験のために、「リハビリにいかない」と言っている人にリハビリに行くよう説得する」など（６種類）といった難題を抱えるクライエントを説得することを中心に進めた。

元気のいい受講生たちの勢いに押されたクライエント役が早めに説得されるのが目立ったが、そのなかでも、年長の方のじっくりとした説得が目立った。また、大半の人が、身体を使って、良い雰囲気を作りだしつつ説得活動を展開した。それらは、各自の個性に応じたものだった。

そこで特別に、自分の説得スタイルを身体を使って表現し、要点を説明してもらうことを、全員にしてもらった。すると、個性あふれるスタイルが続出した。クライエントとの位置の角度、目線の合わせ方や合わせる頻度、姿勢の高低、クライエントとの距離の取り方、ソフトなタッチイングのやり方、さらには、坐っている両足の角度といった、多様なスタイルが登場した。

ビデオに撮っておきたいほど豊かなものであった。その個性を相手との関係のなかで、そして経験の蓄積の中で発展させていくことになる。

最後に、５年後にどんなＳＴ（言語聴覚士）になっているかについて、リレー式物語つくりをした。すると、自分のＳＴぶりに感動した患者さん自身が、ＳＴになって活躍し、よきライバルになるという物語が生まれた。

楽しく充実した授業となった。

２０１８年

2018 年 05 月 02 日

「こんな言語聴覚士になりたい」漢字一文字で表す　沖リハ授業終了

沖リハの担当授業は４回分だが、昨日５月１日終了した。まず難題を抱えたクライエントを説得するロールプレイをした。進行していくうちに、一人ひとりが自分なりの説得スタイルを見つけ創造していく。迫力が出てくる。今後の展開に期待できる。

最後に、「こんな言語聴覚士になりたい」を漢字一文字で表す活動をし、その解説をしてもらった。入学して一か月だが、なかなか深みのある発言が次々と生まれてきた。出された漢字を並べてみよう。（　）内は、同じ漢字を選んだ人で、その人数。

成　想（3）　信（2）　頼（2）　思（2）　開　笑（4）　豊　幸　楽（2）　広　安　素（2）　寄　優　認　厳　安（2）　心　努　真　理　深

なかなか興味深い。明るく楽しいクラス雰囲気を反映しているのだろうか。

さらに最後に、私の授業について『漢字一文字で表すと』を出してもらった。時間切れで解説なしになったが、その文字も並べておこう。

知　明　難　楽（8）　深　新　感（2）　笑（2）　学（6）　驚　好　向　未　成　難　考（3）　変　最

身体性、感性、知性のいずれも必要とする自己表現を他者とからみ合わせつつ出していく授業で、未体験の連続で大変だったようだが、楽・笑いなどが多くてほっとしている。

多くの受講生が我が家訪問を希望している。再会の日は遠くないだろう。

沖リハの学生・卒業生・教員・事務職員とは、いろいろなつながりがうまれ、自宅訪問も多くなった。楽しいつながりの展開だ。

大学教師を４６年もしているが、いつも学生たちの訪問者が多いが、近年では卒業生の訪問も多い。

２０１９年

2019 年 06 月 23 日

このごろの受講生たちの特性と、私の「作戦」

５月下旬から６月上旬にかけて、沖縄リハビリテーション学院言語聴覚学科一年生の授業を４回担当した。専門職として対人援助の仕事をする準備態勢つくりといった内容で、１００％実技だ。といっても、入学間もないこともあって、コミュニケーション取り方一般にかかわることに、対人援助の色彩をつけたという感じである。

また、４月から１５回にわたって、沖縄県立看護大学の２年生を対象に「教育学」の授業を、「教育と看護の物語をつくる」ことを軸にすすめている。

双方とも医療系なので、共通面が多く、将来の医療専門職としてクライエントとどのようにかかわるか、ということに焦点をあてている。

担当し始めて１０年以上たつから、学生も様変わりだ。

まず双方ともに、社会人学生が激減して、２０歳前後の受講生が圧倒的多数になったことがある。そして、沖縄県内出身者の比率が上昇し、今では１００％近くなっている。このあたりの事情の背景については、聞いていない。でも、そのことが示す受講生の変化は読み取れる。

と同時に、社会変化による変化もあるように感じる。何か統計を取ったわけではないが、私がしているワークショップ型授業への受講生の対応の変化から感じるものだ。私の授業は、同じような内容でも、その年の受講生の反応に応じて進行が変化している？　進行を変化させている？　のだ。

その受講生変化、それに応じた授業の変化について、述べていこう。

まず、かつて広く見られたような学生イメージは通用しない。

それは、影響力の強い人がいて、皆を引っ張っていくタイプが減った、というよりもいなくなったということだ。そのように、人を引っ張ろうとするキャラの人は避けられてしまう。数年前にはまだ見られたが、他の学生から避けられてしまい、学生の中での居場所をなくしてしまった例に出会ったことがある。また、現在の５０代６０代の人なら、イメージしやすいが、権威的権力的なものに反抗・抵抗して、自分たちなりにすすめ、自治とか革新とかのキャッチフレーズを掲げるといった意気込みをもつ学生に出会うことは、１０年前どころか、２０年以上前のころから無くなった。

普通科高校出身者がほとんどだが、受験専門高校というほどではない高校からの出身者が多いことが反映しているのか、テスト点数とか偏差値とかにひどくこだわる受講生は、見かけなくなった。１０年位前には、そうした学生で、成績にこだわり過ぎるタイプに出会ったことがしばしばだった。ときに、点数による序列意識を表面化させる学生さえいた。今では、そういうシーンに出会うことは少ない。

2019 年 06 月 29 日

自分をしっかりもって表現し、関係を育む受講生たち

２３日記事の続きで、今年の受講生の特徴をいくつか箇条書きで述べていこう。

「照れる」とか、「人見知りする」とかは、授業のはじめのうちの受講生に見られることだが、短期間のうちに減っていく。授業進行のなかで、受講生の相互関係を深めていくのが、私のワークショップ型授業の特性なので、当然のことだろう。

「人当たりがよい」とか、「敵を作らない」ために、「自然体」のように振る舞う。時には、自分自身をオ

ブラートに包んで、人と付き合うというのは、どこでも見られることだ。そうした付き合いを円滑に進めるために、濃いキャラとは距離を置くこともそうだ。私の授業の受講生にも見られるが、今年は、それらの傾向は薄そうだ。受講生相互の関係がすでに出来ているためでもあろう。

もしそうした雰囲気があれば、授業進行の中で組み替えていくのが、私のワークショップ型授業の特性でもある。そんな進行の中で、意見発表の際に、「前の人と同じです」といったように、なぞり合いをすることが減っていくのだが、とくに今年の場合は稀にしか見られないといっていいかもしれない。というのは、自分というものを、自分なりにしっかり持っている受講生が多いためだろう。沖リハも看護大も双方とも医療系で、自分なりの考えや決断をもって、将来進路についての見通しを持ちつつ入学してくることも関係していよう。

もう一つ、以前と大きく変わるのは、グループがあるとしても、その輪郭は薄く、グループに分かれて固まることが弱い。同じことだろうが、男女間・世代間に生まれがちな隙間はとても少ない。グループが集まっても、タテ関係ではなくヨコ関係が中心だから、「子分を作る」といったことは見つけにくい。

もし違いが生み出す隙間・境界があるとしても、それを薄く見せようとするのだろう。

私の授業では、ロールプレイが多いのだが、その際、そこそこの関係はつくるが、深い関係になるような演技は避けようとする。そのために、自分なりのマニュアルをもち、それに沿ってプレイをする傾向が出てくる。深い関係にならないように、かわすワザができると、表面上のロールプレイに終わってしまう。そこで、一皮むく作業が必要になる。そんな道具立てを用意しつつ、ロールプレイを進める。

その点では、今年の受講生は、自分をかなり出しつつ自然体で演技する。だから、意外な面を出して他の受講生を驚かせることもある。その演技が、他者の新たな演技を生み出す関係が生まれやすいのも、今年の特徴だろう。

緊張を誘いやすい授業展開なのだが、実際には、自然体で充実感溢れて楽しく進んでいくのが、今年の特徴だろう。

毎回の沖リハ授業の最後には、その日の発見・感想を漢字一文字に書いて、床に貼りだし、相互の発見・感想を共有している。今年は、多様な漢字が登場するのが特徴だ。毎年、「楽」「変」「驚」「学」といった定番の同じ漢字が多く出るが、今年は、同じ漢字が少ないのだ。

受講生の皆さんの将来に期待したい。

２０２０年

2020 年 07 月 11 日

久しぶりの授業

授業は１年ぶりだ。沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科で、７月に４回する。タイトルは「対人援助基礎演習」で、専門家が患者と付き合う際の基礎的なありようを、実践的にワークショップスタイルで行なうものだ。学科創設以来しているから、何回目になるだろうか。

今年の一年生は、信じられないほど動きがいい。初めての人が照れてしり込みする程度の百分の一程度の緊張感である。だから、予定がぐんぐん進む。笑いと驚きの大きな渦になっている。

「三密」を避けるという事なので、距離をおいて活動するが、それがまたほどよい楽しさと元気良さを生んでいる。

ところで、医療関係の専門職は国家資格で、国家試験がおこなわれるが、それは知識中心だ。ところが、実際の業務は知識だけではない。具体的な行動を通しての働きかけだ。しかも、リハビリの場合、患者自身がやる気を出すようにする必要がある。知識を伝えるだけの形で患者に対するわけにはいかない。しかも、言語聴覚士の場合、患者のコミュニケーション困難を打開しようとリハビリをするわけだから、そのための専門家の働きかけ方が大きな比重を占める。

こんなことを念頭に置いて、楽しくワークショップをしている。

写真は、毎回の授業の最後に記入する感想「一文字、二文字、四文字漢字」を記入した付箋紙だ。それを床に並べて、関心をもつカードに印をつけ、印が多かったカードを書いた人に語ってもらうという形の「ふりかえり」をしている。

この後の２回、どんな展開になるか、楽しみだ。

上写真は、１０日の授業のもの。下写真は３日授業のカードで教室の壁にはってあるもの。

２０２１年

2021 年 06 月 28 日

沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科授業終わる

２５日最後の授業を終えた。ここ１０年近くは、年 4 回だけワークショップをしている。主として、対人関係の作り方をテーマにし、将来就くであろう専門職として、クライエントにどのように対していくかを実技で展開する。対象は 1 年生だが、毎年、その学年の特徴がでる。今年は、社会人経験のある受講生が少なく、ほぼ同世代の若いメンバー25 名だ。

若々しく元気がよく、個性的だ。リーダー性あふれて世話好きなタイプの人が毎年いるが、今年は目立ちすぎる人はいず、仲良し同士の印象だ。実技をすると、照れて緊張しすぎる人が出やすいが、それを超えて、個性的に演技をする。ということで、楽しく終えることができた。

思い起こすと、言語聴覚学科がスタートして以来の 15 年余りの付き合いだが、毎年楽しく充実した時間を過ごさせていただいている。沖縄での言語聴覚士のなかに占める卒業生の比率は、かなり高いだろう。同校の教員も卒業生が半分ほどになっている。

卒業生たちは、リハビリ施設・病院などだけでなく、多様な場・分野で活躍している。期待が持てて、いろいろと楽しみが多い。

今年は息も絶え絶えに終わることができたが、私が次年度もできるかどうか、少々心配だ。楽しいから続けたくはあるが。

このところ、昨年度まで続いてきた南城市の仕事も、次への展開に向けていくつか打ち合わせを行った。そんな業務なども、いよいよ区切りがつき、ほっとして私の身体は休憩バージョンに入ってきている。

沖縄県中小企業家同友会大学

2015 年 07 月 27 日

開発創造力・協同力・個人の力を伸ばす

２５日午後、台風進路が少しそれて、予定通り沖縄県中小企業家同友会主催第２１期同友会大学で、私担当の「教育」を開く。今年は、特にバージョンを変えないで、前年通りの予定だった。ところが、これまた例年通りで、参加者が作りだす流れに沿って、計画が大きく変化していく。

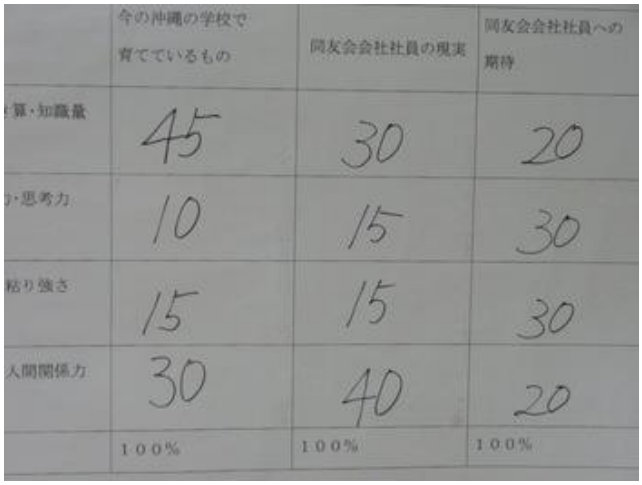
「学校・企業・社員　どんな力をつけるか」というテーマに基づいて、ワークショップスタイルで進行。

例年と異なる興味深い点を中心にいくつか記そう。

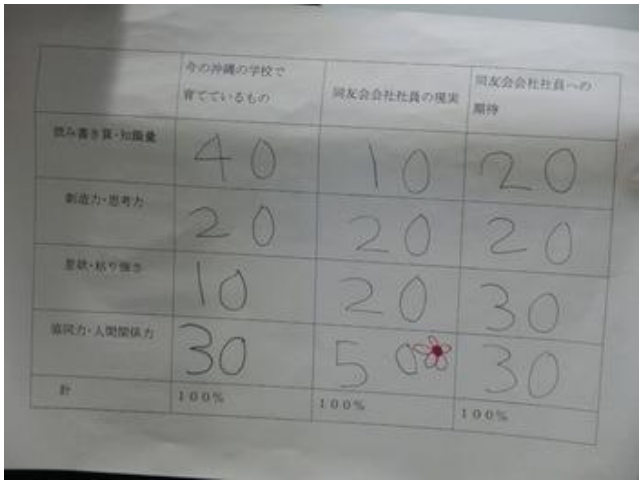
１）受講生の半数が女性という画期的構成。男女半数の良さが前面に出てくる。

２）たとえば「説得する」場面にそれが表れた。「会社の命運がかかる難関対象の営業を担当してほしい」と社員を説得するという設定。正面からエネルギッシュに説得するタイプ。相手の良さを強調しつつ、相手の感情を揺さぶる説得。・・・いろいろなアプローチがあるが、最初は照れながらも、徐々に優しく真剣に説得していく。

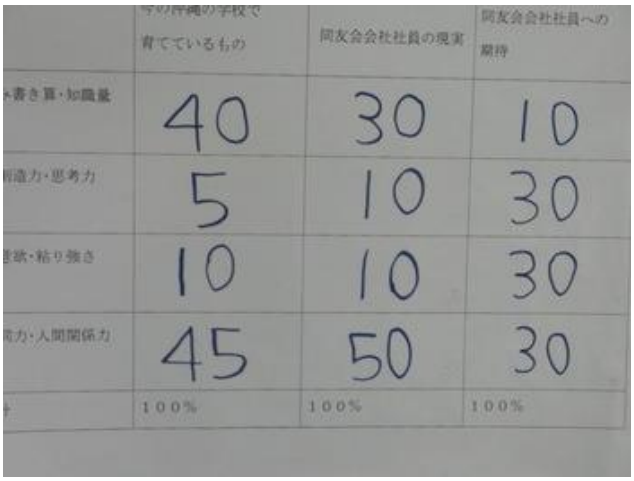
３）「沖縄教育は、途上国型？　先進国型？　沖縄独自型？」の討論。自己の主張をはっきりさせながら、論争相手にやさしく接しつつ発言。時間が許すまで発言が続く。一人でリードするという形ではなく、多様な意見が出てくる



	今の沖縄の学校で育てているもの	同友会会社社員の現実	同友会会社社員への期待
算・知識量	45	30	20
・思考力	10	15	30
粘り強さ	15	15	30
人間関係力	30	40	20
	100%	100%	100%



	今の沖縄の学校で育てているもの	同友会会社社員の現実	同友会会社社員への期待
読み書き算・知識量	40	10	20
創造力・思考力	20	20	20
意欲・粘り強さ	10	20	30
協同力・人間関係力	30	50	30
計	100%	100%	100%



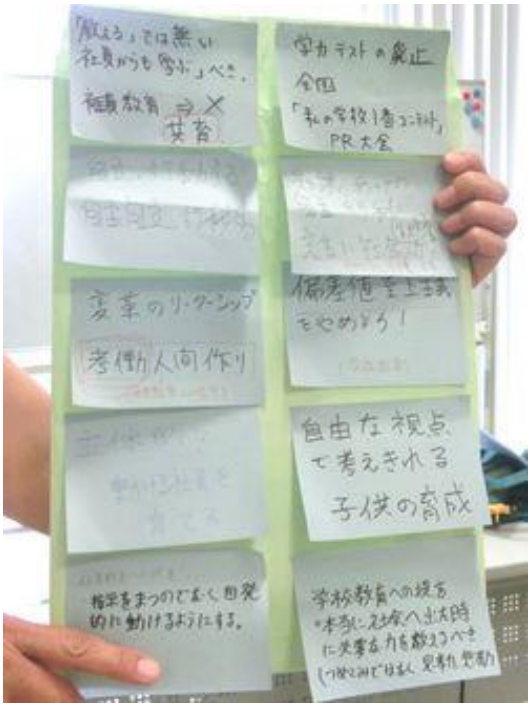
	今の沖縄の学校で育てているもの	同友会会社社員の現実	同友会会社社員への期待
書き算・知識量	40	30	10
創造力・思考力	5	10	30
継続・粘り強さ	10	10	30
協力・人間関係力	45	50	30
計	100%	100%	100%

ような配慮がにじみ出る発言スタイルが底流にできてくる。

４）休憩時間のユンタクも多様なメンバーと展開。５名余り参加した OB の方々も、楽しく混じり合う。

５）写真が示すように、このところの毎年の定番としての、％表示。

なぜか、３グループとも大きな傾向で一致。創造力・思考力と協同力・人間関係力とを強調する傾向。これまでは、ここで多様な意見が出て、まとめるのに苦労したが、あっさり進む。



６）そこで、「社員教育」「沖縄の学校教育」への提言に時間を使う。

これは実に多様な提言が登場したが、あるグループの「個人の力発揮」強調がとても印象的だった。

７）最後に、マジック・マイクロフォン形式で、振り返りの発言を全員がしたというのもは、はじめてだった。びっくりしながら、発見創造が多くて充実していたという発言が多かった。この進め方が気に入って、会社でも活用しているという OB の発言もあった。私を「変人だけど面白い」という発言も出現。

私も、多様なものを発見して満足感に満ちて終了した。企業現場でも、こんなワークショップをしてみたいなという希望が湧きでてきた。

	沖縄の学校の現実	同友会会社社員の現実	同友会会社社員への期待
知識量	25	34	20
創造力	17	18	23
継続	20	21	29
人間関係力	38	27	28
計	100%	100%	100%

2016 年 07 月 26 日

今年も盛り上がる同友会大学

２３日午後、沖縄県中小企業家同友会主催の同友会大学

で、ここ１０年来続けている講座をワークショップ形式で行う。

毎年、少しずつモデルチェンジしているが、大枠は変わりない。それでも、参加者構成に合わせて、ワークショップ内容は大きく変化する。それがワークショップ型の特性でもある。今年は男性がほとんどであり、「硬い」業種からの参加者が多いという特性が反映したか、底流に「真面目さ」が見えるものだった。

とはいっても、ユニークなものが登場し、楽しく進行した。いくつかのトピックを拾おう。

・ワークショップの最初は、「じゃんけん列車　スタート」で始めるのが定番だが、今年は、実際に動き始めるのに、

１分ぐらいかかる。これもまた、興味深いことだ。輪ができた後での「あいさつ送り」では「私は、〇〇です。よろしくお願いします」という自己紹介型が連発した。これだと、前に出てきた挨拶とかぶることがない。初めて出会う「知恵」だ。

「ほめ言葉大会」「物語おくり」は、まじめにどんどん進む。

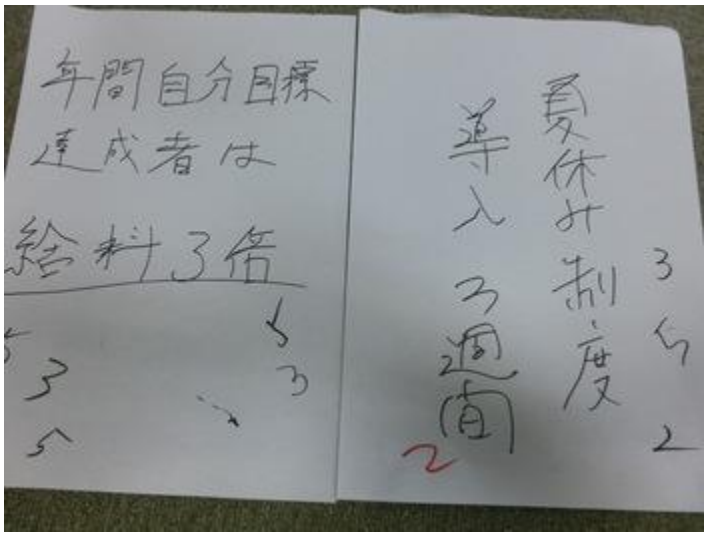
アイスブレーキングの最後にした自動車と運転手。いつもより、自動車のスピードが速い。実行力の高い参加者たちだ。

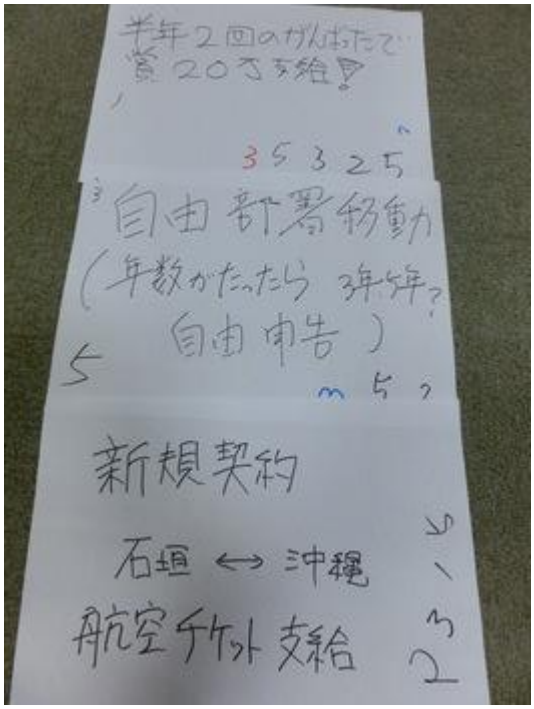
・「今の沖縄の学校教育は先進国型か途上国型か沖縄独自型か」の討論は、多様な位置に分かれたが、一人一人が鋭い意見表明するなか、深まっていった。しかも、二つの型の混合型という意見が多かったのが、今回目立った。

・ほぐれた雰囲気のなかだが、定番の学校・企業社員の知識・創造力・意欲・人間関係力の比率を埋めていくグループ作業は、グループ内での意見差でもめながらも、てきぱきと記入がすすむ。

結果は写真の通りだ。

人間関係に高い比重をかけるのは、例年通りだが、四つの力のどれも重要だという考えは、いろいろな業務を一人で担わなくてはならない中小企業の特性を反映しているのだろうか。





・最後に例年とは少し趣向を変えて、「社員教育への提言」を一人一人に書いていただき、それをめぐって討論した。

　写真では読み取りにくいので、人気を博したいくつかの提言を書き出してみよう。

夏休み制度の導入（３週間）

年間自分目標達成者は給料３倍

新規契約者には航空券チケット支給

自由部署移動（年数がたったら自由申告）　参考　プロ野球のフリーエージェント

自社の弱みを見つけて、それを十分に対応できている企業を見つけて、社員が視察し改善していく

新規事業提案大会　一位にはその部長へ昇進

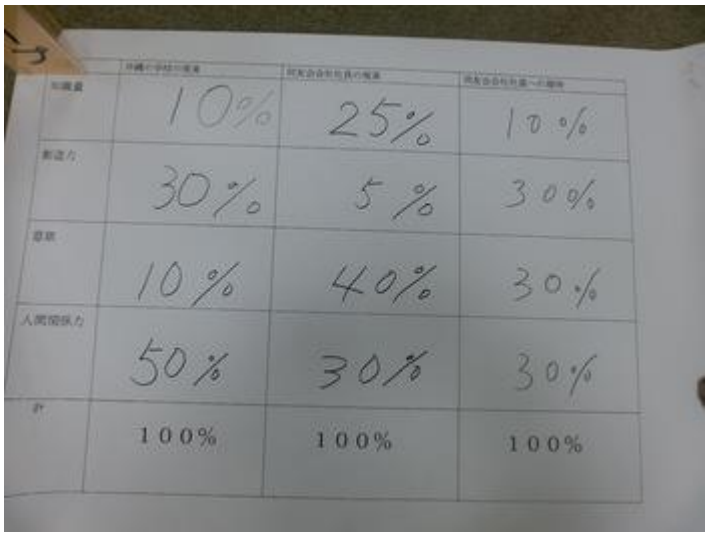
１００名の全社員で、朝まで飲み語り合う合宿

　終了後の懇親会でも語り合う。

　異業種の人達の集まりは、多様な異なる視点が出てきて、とても興味深い。私にとっても、多様な中小企業の現場の話が聞けて、興味深い。まさに耳学問だ。

2017 年 07 月 27 日

「学校・企業・社員　どんなちからをつけるか」



知識量	10%	25%	10%
創造力	30%	5%	30%
意欲	10%	40%	30%
人間関係力	50%	30%	30%
計	100%	100%	100%

２２日午後、一年に一回の講師を務める。もう１０年を越したかな。このところは、「学校・企業・社員　どんなちからをつけるか」というタイトルで、内容を定着させているが、参加者の反応のなかで進行を変化させている。今年は、受講者が多く、元気があるだけに、ノリがいい。ということで、今年なりの深みができていった。

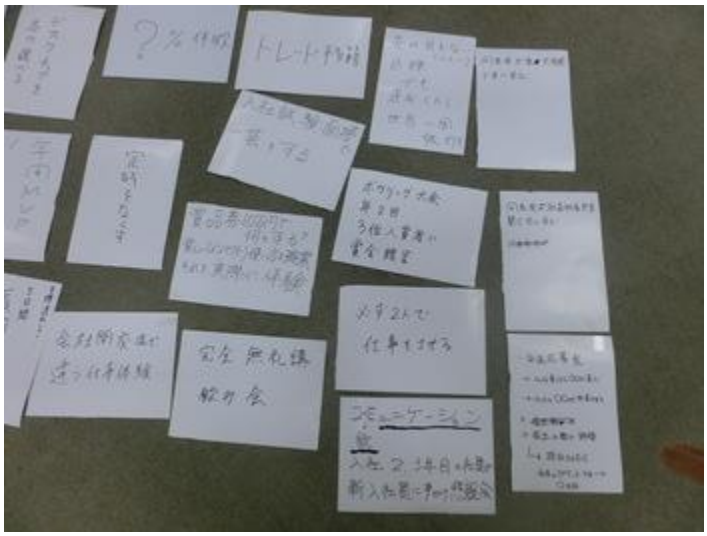
多様な業種の会社からの人たちで、出会いそのものが楽しいのも、講師を続けている魅力の一つだ。休憩時間に、代表の方から、別の組織でもやってくれないかと持ち掛けられたが、朝の６時からだという。ちょっと自信がないなと率直にお応えする。でも、いろいろな機会で、私流のワークショップをするのは楽しいし、良い経験になるから、できれば挑戦してみたいとも思う。

さて、受講者の方々は、各社を担っておられるから、私の途方もない活動提起に、最初は「難題」と感じながらも、そのうち、ぐいぐい乗っていかれた。定番の「多様な挨拶まわし」などは、短い挨拶どころか、本格的な挨拶がすすんでいく。

定番の「今の沖縄の学校教育は、先進国型か途上国型か沖縄独自型か」討論は、見事に皆さんの主張が多様になり、多様な意見に感心するばかりである。

「どんな力をつけるか」では、今年は、人間関係力は高いという現実認識が特徴的だった。それにもとづいて「同友会社員への期待」として、多様な分野での力をつけようという主張が多かった。（写真参照）

最後にした「社員教育への提言」が今年の興味深さの象徴となった（写真参照）。写真では読み取りにくいので、いくつか紹介しよう。



・会社間交流で、違う仕事体験
・年間ＭＶＰ№１にオーダースーツ
・デスクチェアを各々が選べる
・屋久島チーム別トレッキング
・入社試験の面接で一芸をする
・（部署間の）トレード移籍をする
・商品券１０万円で何をする？　楽しいインパクトのある使い方を提案する。それを実際に体験してみ

る。

こうして、多様な会社からの参加者が、自社の枠を超えて討論し、共同作業することが、多くの発見創造を生み出すが、そこが同友会大学の魅力の一つだろう。

2018 年 08 月 01 日

新入社員教育

２８日、沖縄県中小企業家同友会主催の同友会大学で、担当の「教育」を、例年同様ワークショップにて行った。例年通り参加者の奮闘と豊かさにより、大変楽しく充実したものになった。

今年は、１０年ぶりにフルモデルチェンジした。

ごく一般的に、「教育」とくに学校教育を扱うのは、10 年以上前からやめている。中小企業を担う方々の立ち位置と関心に沿って、中小企業における社員教育にひきつけて考えてきたのが、ここ数年の展開だった。それを一層中小企業の新入社員の現実と課題と見通しにかかわって展開したのが、今回のワークショップだ。

課題のおおまかのところを話し、参加者相互の人間関係を豊かにする活動をした後、三場のロールプレイを進めた。参加者を新入社員、新入社員教育担当、会社幹部に三つの役目を交代しながら、即興のロールプレイを進めた。第三場は、5 年後のわが社に焦点化して、新入社員に取り組みを提起してもらうポスター討論で締めくくった。

参加者も満足の様子だが、私も大変満足した。来年は、より一層具体的なものを展開したいな、と思う。

翻って見ると、これまでの教育学では、中小企業における社員教育というテーマは、関心の外の外という感じだった。だが、実際には、膨大な教育的な活動が日常的に展開している。その質と量は学校教育に匹敵するほどだ。日本では学校教育における評価は、テストという形にまとめあげる傾向が強い。中小企業では、現実の会社活動の形であらわれるが、それが「見えやすい」ものではなかっただけに、どのような教育がよりよいものかを問うことさえ、少なかっただろう。中小企業側にしても、社員教育を「教育学」的に検討することは稀だったろう。

このあたりにメスを入れて検討していきたいと思っている。たとえば、「知識」「意欲」「創造力」「人間関係」の四点に焦点化して、新入社員の現状と、その成長のための教育についての見通しと方法をより具体的に考えるワークショップを展開するなかで、具体的な提案が出せるようになればと思う。

2019 年 07 月 14 日

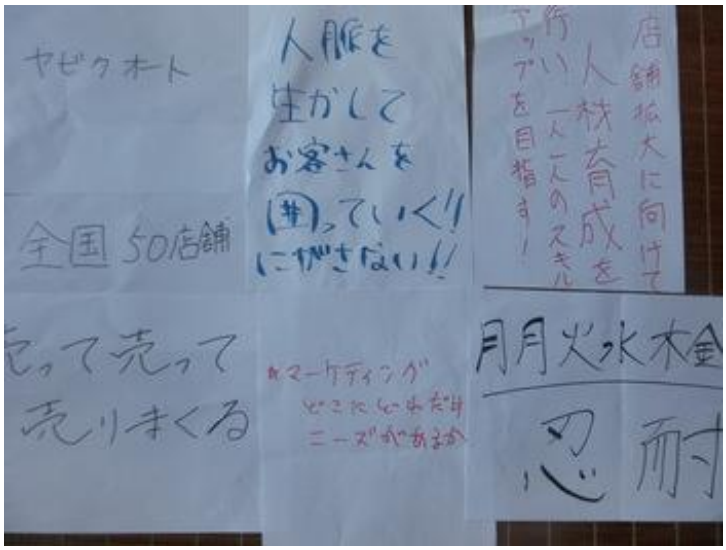
新入社員に、どんな力をつけるか

１３日午後、沖縄県中小企業家同友会主催の第２５期同友会大学で、「新入社員に、どんな力をつけるか」をテーマにワークショップを行った。長いもので、もう１５回近く担当している。当初は、沖縄の教育問題を中心にしていたが、徐々に発展させ、昨年からは今回のようなタイトルにしている。

今年も、多様な業種――コンピュータ関連、ガス供給、自動車販売、機械レンタル、医療、イベント設営、薬品、など――から、３０歳以上の年齢幅がある参加者があり、豊かな共同活動が進んでいった。

参加者相互は、同友会大学で初めて出会った人が多く、新鮮味溢れる。講義スタイルが多いなかで、私のようなワークショップは少ないので、当初は緊張感に満ちていたが、すぐに楽しく活発な展開となった。さすが経営者・幹部社員の方々である。

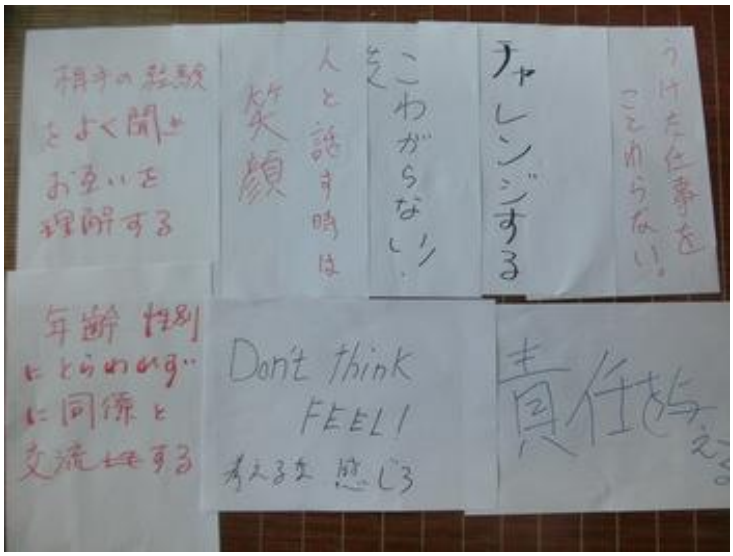
採用面接→新入社員教育という流れでのロールプレイでは、楽しいドラマの続出だった。



写真上は、「５年後のわが社の課題と私が貢献したいこと」のプレゼンで出てきたポスターのごく一部。

写真下は「新入社員教育のための発想を広げるキーワード大会」で出てきたものの、ごく一部だ。

主催する同友会は魅力的な活動で会員企業をどんどん増やし、勢いがある。そんな会社から来る参加者たちも元気で明るい。そして、日常生活で出会う身近な会社が多いので、親近感がわいてくる。



※　２０２０年、２０２１年は、コロナ禍で開催中止となった。

多様なワークショップ

※　ここまで紹介したもの以外に、いろいろな場でしたワークショップのいくつかを紹介しよう。

2015 年 07 月 16 日

活動的で創造的な南城市学童保育クラブ指導員

１４日午前、南城市大里庁舎にて、南城市学童保育連絡協議会主催の指導員研修のワークショップをした。そのレジメは次の通りだ。

タイトル――子どもたちとつながって、子どもたちを盛り上げる

じゃんけん列車　→　大きな輪ができる　→　あいさつまわし　→　信号送り　→　好きな動物の大きさ順に一列にならぶ　→　５人グループ　→　名札つくり　「名前・クラブ・ウリ」記入後　→　自己紹介　→　物語つくり　→　ほめ言葉大会　→　間くぐり　→　ほめながら頼む「おやつ準備」　→　好きな食べ物の味の濃さ順に一列にならぶ　→　６人グループ　→　自己紹介　→　私（私のクラブ）の自慢披露大会　→　頼む「自慢大会」出場　→　自動車と運転手　→　私のおすすめ学童取り組みアイデア　→　即興劇　けんかにどう対応する　・・・A　子ども１　　B　子ども２　　C　子ども３　D　離れた所にいる子ども　　E　指導員　　F　別の場所にいる指導員　AとBが口喧嘩を始めるシーン　第一場　第一場をもとに作戦会議　第二場　→　今日の感想を漢字一文字で書く　→　感想漢字への質問大会

実際の進行は、いつもの私のワークショップのように、このレジメとは大きく変わる。参加者の特性にあった展開をするためだ。類似のワークショップをしばしばするが、学童指導員、とくに今回のように「新任研修会」的要素が強い場合には、特性が出やすい。

タイトルにあるように、子どもたちとつながりながら、子ども達をもりあげていくような関わり方を学び創造することが中心的なねらいだ。

４月に初めて指導員になって、私にとっても初対面の人が多い。もっと緊張しているかと思いきや、子どもと積極的に付き合うことが好きで、個性的で創造的な人が多い。エネルギッシュなのは、ベテランにしても新人にしても共通する特性だ。

即興的な演技を求めることが多かったが、緊張しつつも創造的に対応して、どんどん進んでいくのが素晴らしい。実は、レジメにあるメニューは、通常のワークショップだと、２，３割積み残すことになるくらいだが、今回はほぼすべてをやってしまった。それほど活動的だった。

ケンカへの対処なども、多様な対処法が登場してきて、興味深いものが続出した。二場までのつもりだったが、盛り上がってきたので、三場までやり、みなさんの力をおおいに発揮していただいた。終わると満足感あふれる顔が並んだが、私も満足感にひたった。

2015 年 11 月 22 日

西崎特別支援学校高等部３年生と教職員相手にワークショップ

１９日午後、皆で２０名余りを対象にワークショップ。

今回は、相互のつながりを深めながら、新しい発見と創造をすることを狙いにして、私の定番ワークショップをする。

流れは、こんな風だ。以下は、活動進行のイメージを書いたレジメだが、出会いのなかで変化していった。

タイトル「つながって楽しいことを作ろう」

１）私の自己紹介　玉城に住んでいるおじいさん

２）輪をつくろう　手をつないで　　生徒と教職員が自由に混じり合って。

２０人以上なら、途中で、３～４のグループに分ける。

私がしたことを回していこう

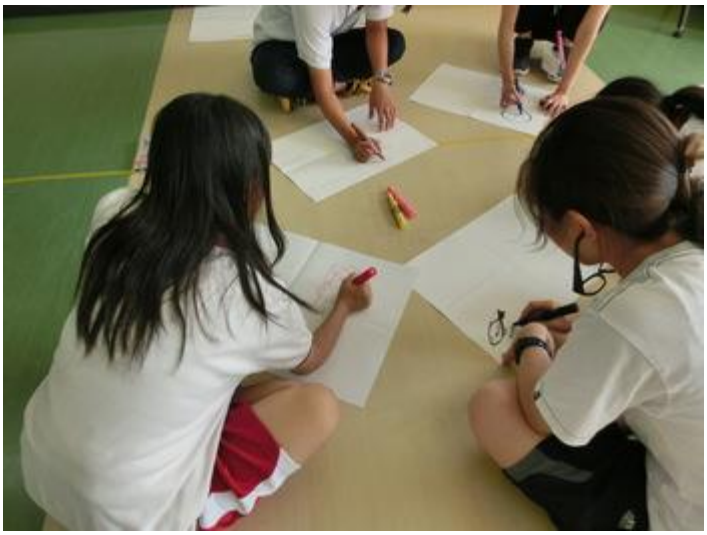
右へ　　つないだ手を上げる

左へ　　床にしゃがむ

右へ　　隣の人の肩をトントンする

左へ　　隣の人におじぎをする

隣の人を変える。　１．２．１．２．１．２　　１の人は２人向こうの人の間に座る。



右へ　　いろんなお辞儀をつくろう

左へ　　いろんな言葉であいさつしよう

３）お話を作っていこう

右へ　　今朝、起きて、「おはよう」と言いました。そして

左へ　　給食時間になりました。初めに手を洗いました。そして

４）マジックマイクロフォン

５）一列にならぼう

好きな動物の大きさ順に

１．２．３．４．１．２．３．４・・の番号をかける

同じ番号の人とどうしで集まろう

６）グループ内で

●●が得意の●●です。　●●が得意の●●さんの隣の▽▽が得意な▽▽です。・・・・

７）間くぐりゲーム

８）リレーお絵描き大会

「来年の私」

このプランを事前に見た同校の担当者は、生徒たち

はできるかな、と心配したそうだ。でも、想像以上に生徒たちが食いついてきたそうだ。ほぼ８０分ぐらい。生徒たちは継続してのめり込んできた。私の方が疲れて、終わりにした。最後のリレーお絵描きでは、最初とまどっていた生徒もどんどん描きすすめ、時間終了しても書いている生徒が出たくらいだった。

感情を押し隠そうとしがちの同世代の人と比べると、はるかに感情行動表現が豊かだ。最後に絵をもとにした発表では、自分の将来の仕事について語る生徒が何人もいたことが印象的だった。これまでの、リレーお絵描きでは、どんどん上書きをしていくことが多かったが、今回は、前の人の絵の横に書き添えていく形のものが多かったのが印象的だった。他者への気遣いにあふれているのだろうか。

ワークショップ終了後、教員への解説的な質疑応答会を１時間余りした。質問感想などをＡ４用紙に書きだす形でしたが、２０数名の参加者が３０枚ほどの質問をよせ、応答するのに、私は必死。ついに疲れて、終わっていただいた。若くてやる気溢れる教職員たちだ。キラキラしている感じ。

また続編がありそうな会だ。

2019 年 05 月 31 日

実演風ワークショップで、子ども達のやる気を育て、「人見知り」「指示待ち人間」を超える

――沖縄県立教育総合教育センターでのワークショップ――

２８日午後、沖縄県立教育総合教育センターの「講師」を務めた。テーマは、この記事のタイトルの通りだ。センターに勤める人を含め学校教員を中心にして約１００名の参加者があった。

このセンターの講演会は年４回開かれるようで、文字通り講演会が通例のようだ。そんななかで、９０分のうち説明をしたのは１０分ぐらいで、ほぼすべて参加者自身が活動するワークショップだ。ということで、驚いた参加者が多かった。

初めのうちは、緊張があったが、進行の中で、打ち解け合い、楽しい雰囲気が生まれ、創造的な共同活動が展開していった。

いつも通り、当初予定にこだわらず、参加者に合わせて臨機応変の進行をしていったが、進行はつぎのようになった。

じゃんけん列車　１０人のグループつくり

変わり自己紹介（人体の部分、ウリ、好きな生き物）

くぐりぬけゲーム

即興創作の物語まわし

自分の性格が外向き――内向きで一列に並ぶ　一列を二つにずらしてペアをつくって、聞き合う

５～６人グループつくり

誉め言葉尽くし

依頼・説得するロールプレイ

　「トイレ掃除区域に立候補してください」などなど

感想を漢字一文字で書く　質問を書く　付箋紙に

一文字の紹介と質問への回答

このワークショップが参加者の教育実践発展の手掛かりになることを期待したい。

久しぶりの人に何人かあった。「３０年ぶりかな」「いや、何年か前にお会いしましたよ」という方が、何人もいた。私の記憶力は、新しい情報はうまく保存できないという年相応を示しているようだ。

所長元所長の方々とも楽しく語り合った。「元気の源はなんですか」などと聞かれた。こんな質問を受ける経験はほとんどない。でも最近の体調上昇のおかげで嬉しく思う。そういえば、教育センターにでかけるのは、首里にあった４０年前のことだ。そのころを知っている人はもういない。

楽しく充実した時間を過ごすことが出来た。

ワークショップ・授業論

2015 年 02 月 22 日

「浅野誠ワークショップシリーズ№７　楽しいワークショップ」完成　印刷へ

　このごろの授業では、「浅野誠ワークショップシリーズ」を使うことが通常だが、残部が足りないものが出てきた。４月からの授業に必要なので、「№７　楽しいワークショップ」を１２月から作成してきて、完成にいたった。これから印刷所に入れる。多分３月末までには新本が出来上がるだろう。いつものように、自費出版の形だ。採算度外視、というか、持ち出しでの作成だ。

総計４０の活動プログラムを掲載した。多くは、これまでのシリーズにも掲載したが、加筆したところが多い。また、最近新しく行ったプログラムもいくつか含めた。

そして、書下ろしの小論を加えた。社会創造・人生創造とワークショップにかかわっての私の考えをまとめたものだ。

取得ご希望の方はご連絡ください。

目次を紹介しておこう。

第一章　参加者の関係を創造する

№１　ワークショップ・スタートの流れ

№２　自己紹介・他者発見ビンゴゲーム

№３　リレー式に物語をつくる

№４　やる気を出させる言葉がけ大会（「ほめる」大会）

№５　ボディランゲージで仲間発見

№６　身体を感じあう

№７　誘う－断る・受ける

№８　問題打開策を即興劇・ロールプレイで考える

№９　苦手な人（子ども）とのつきあい方発見

№10 リレーお絵描き

№11 「つながる・つなげる」ワークショップ

第二章　人生を創造する

№12　将来設計　尋ね人

№13　私の人生で大切にする価値を順に並べる

№14　私の人生・生活にとって大切なもの

№15　進路選択の時に、一番大切にしたいこと

№16　進路物語を創ろう

№17　○年後の年収は？

№18　女の仕事・男の仕事といえるか

第三章　地球・沖縄を創造する

№19　２０年後の地球・日本・沖縄

№20 地球を創ろう

№21　なりきろう

№22　世界を発見しよう・地球を発見しよう

№23　各地の難題に取り組む国際会議

№24　健康マップつくり

№25　討論　沖縄の教育は、先進国型？ 発展途上国型？ 独自型？

第四章　教育・学校を創造する

№26　学校で学んだこと・学ばなかったこと

№27　こんな科目をなくして、こんな科目をつくったら

№28　授業での居眠り防止法を考える

№29　どんな教室・椅子・机がいいか。配置はどうするか

№30　地域と子どもたち自身の物語をつくる

№31　こんな学校を創ろう

№32　社員にどんな力をつけるか

第五章　楽しい活動を創造する

№33　健康キャンペーン企画を創る

№34　学童クラブでの取り組み企画を創る

№35　地域で楽しい活動を創ろう

№36　１時間で、共同文化表現を創る

№37　サークル・部活・会・ＮＰＯなどの組織を新たに創る

№38　学級分析・方針づくり

№39　「特別活動」を構想する

№40　企画書を創る

第六章　社会創造・人生創造とワークショップ

はじめに

１．社会創造

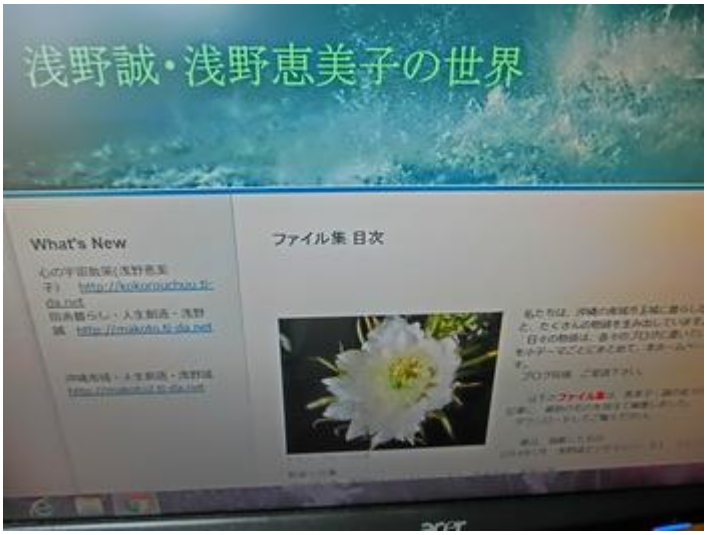
２．人生創造

３．ワークショップ

４．ワークショップの背景と教育

2016 年 03 月 19 日

「浅野誠　ワークショップ・授業　２００７～２０１４」を HP にアップロード



ここ数年、これまでのブログ記事を編集して、HP「浅野誠・浅野恵美子の世界」http://asaoki.jimdo.com に掲載する作業をしている。

このたび、私が２００７年から２０１４年にかけてワークショップと授業、ならびにそれらについてのエッセイを集約編集したものができあがったので、HP にアップロードした。

無料電子書籍のような形になっているので、どうぞご自由にご覧ください。

かなり膨大なので、好きなところだけご覧ください。

おおまかな目次を記しておきます。

１）ワークショップ

保育・学童保育

児童生徒対象

学校教師研修

大学専門学校教員研修

大学生対象

同友会大学（沖縄県中小企業家同友会主催）

多様な場面で

ワークショップ論

２）授業（大学・専門学校での）

琉球大学「特別活動の研究」

沖縄リハビリテーション福祉学院　言語聴覚学科「実践的教育学　対人援助とコミュニケーション」

沖縄県立看護大学　　「教育学」　「教育原論」

沖縄大学　「生徒指導論」「教職論」「専門演習」「問題発見演習」「教育方法論」

愛知教育大学大学院「教育方法特論」

沖縄国際大学「教職演習」

授業についてのエッセイ

私の学生との接し方の変化物語　／　大学授業での、身体交流・人間関係・レクチャー　／　学生参加型授業アイデア　／　うまい講義の仕方　／　学生と教職員がいっしょに大学授業改善を考える　／　私の授業は「一番、頭を使って体を使う」という学生の声　／　「人見知り」「人前で話すのが苦手」という学生たち　／　教員の物語と学生の物語―――大学教育・授業の物語性　　などなど

2018 年 09 月 09 日

講義式に圧倒されて、「アクティブ・ラーニング」が広がらない　問題提起連載 1

日常生活や散策中に、ふと頭に浮かぶこと、思索が想定外に展開して新たに思いつくこと、そんなことがよくある。そんなことを、数回ごとの連載にして書いてみようと思う。だから、全くの不定期不定形なものになるだろう。深い思考を経て書くものではなく、ふと考え始めるものが多くなるだろうから、「問題提起連載」と名付けた。

まず第一回目は、講義式に圧倒されて、「アクティブ・ラーニング」がなかなか広がらない現状というか、その歴史経過の背後にあるものについて考えよう。

「アクティブ・ラーニング」という用語は、日本語にすれば「活動的学習」となりインパクトがないから、英語をそのままにして使われているのだろうか。専門用語というよりは、教育行政上の流れで多用されるよう

になった印象だ。使われ始めて数年ぐらいのものだろうが、今後数年もつのだろうか気になる。

この類の用語は、これまでも形を変えて繰り返し登場してきたが、定着したり発展したりすることが少なかった。

さて、この用語が指す活動的学習と対照的なのは、説明や講義など、教員の話を生徒が聞くという学習だ。アクティブではない学習、生徒はただ聞くだけの学習というものだ。それでも頭を積極的に使えばいいが、使うと、次から次へと繰り出される話についていけないから、ともかく受身的に、つまりアクティブでない形で授業に向かうことになる。

私が生徒であったころ、そういう授業の際には、対応は二つに分かれた。話の内容が、教科書通りで新鮮味がない際には、居眠り・「内職」にいそしむ生徒が多かった。話を聞かなくても「間に合う」ものだったからだ。大学時代には、欠席という対応がある。近年では事態は変わったが、50 年前の大学授業の出席率は３０～７０％だった。大部分が欠席して出席者が 1～2 名の時は悲劇というか喜劇だった。居眠りなど手抜きができない。私の体験でいうと、興味がわかない科目の場合、なおさらだった。それでも担当教員は、数十人の受講生を相手にしているかのように「名調子」でレクチャを続けた。対話や問答のようなものは全くなかった。

もう一つは、面白くない話を変えるようにすることだ。質問をして、面白い話を引き出すことから始まって、生徒側からアクティブな授業内容へと変えていくのだ。グループ学習・調べたものを発表する学習などをした。でも、その例は生徒全体の１％もあるだろうか。私自身は高校時代日々の予習の大半を質問作成時間にあて、授業時の教師の対応を楽しんだことが結構あった。

無論、教師にも多様な形で、今言われるアクティブ・ラーニングを作り出す授業をする人もいたが、おおざっぱにいって 10%に満たない比率だったろう。

私自身が大学教師になった時は、「慣行にしたがって？」、大学ノートに 15 ページぐらい書き込んで、それを読み上げる講義式授業をした。だが、完璧といえるほどの失敗だった。講義内容のほとんどを受講生が受け止めないでいた。最終レポートにそれが表れていた。

そこで、大学教員一年目の後期から、いまでいうアクティブ・ラーニングを多様な形で試みた。受講生が 50～150 人と多かったが、ともかく試みた。

2018 年 09 月 19 日

一方向的講義　問題提起連載２

アクティブ・ラーニングの類を実践しようとする際に参考になる文献は 1970 年代前半当時皆無に近かった。とくに大学ではゼロだが、それでも小中高校教師によるものには優れたものが見つかった。そこで得られたヒントを生かして、私は多様なことをやってみた。問答と討論、グループ学習、学生による発表、模擬的な実演と討論、共同制作などなどだ。わかりやすくいうと、講義の演習化実習化である。合宿で集中的に取り組んだこともある。そのため、この授業をとると大変だということで、避ける学生さえいた。

当時の私は若くてエネルギーがあったから、受講生もそれに気おされて奮闘したという感じかもしれない。そんな学生も今や 60 歳代で、楽しい思い出話となっている。といっても、講義式よりはうまくいったにしても、成功したといえるほどのものは少なかった。

こうした模索は、約 5 年の試行錯誤を経て、やっと手ごたえを感じ、成功に近いものを得ることも出始めてきた。そこで、いくつかの授業記録を活字化した。また、公開授業とか研究授業も行った。

こうした経験をもとに、1978 年に小論「大学における講義についての教育方法論的考察（試論）」『琉球大学教育学部紀要第一部』第 22 集 1978 年を書いた。大学紀要としては稀に見るたくさんの反応があり、長い間引用されてきた。それは、大学教育実践について書いた論文に滅多にお目にかからない状況の当時としては、珍しいというか、多分はじめてのものだったからだろう。

そこで書いたことを短く紹介しよう。大学講義が空洞化していることは 1960 年代から広く言われ続けてきたが、大学のマス化などともっぱら学生の変化に原因を求め、講義・授業する側の問題として検討されてこなかった。その講義の形は、連続講演会ないしは学会における研究発表としてのものが長く続いてきた。そのありようが受講生の実情とかみあわないでいることが、授業や教師のありように起因するとはとらえられてはいなかった。

研究発表的な講義の前提としては、受講生を研究者（の卵）として扱うということがある。それは、講義で聴いた話をもとに、受講生が自分で分析検討するという研究的思考を求めるものだった。話す内容を記憶するというものではない。こうした前提構図が崩壊しているから空洞化しているのであり、新たな授業のありようの創造を必要としている。こうしたことを提起する論文だった。

他方、小中学校では事情が異なった。（高校は大学的な性格と小中学校的な性格をあわせもち、揺れていた）。小中は、戦前から、説明中心の一方向的な授業ではなく、説明に加えて問答をはじめとする多様な形態を含みこむありようが追求され、かなりの広がりがあった。

また、戦後、子ども生徒による共同創造的要素を多分に持つ授業が創造されてきた。だが、1950 年代終わりから事情が変わり始め、いわゆる「詰め込み」的な授業の要素が広がり始め、それへの批判的対応の渦中のなかで、多くの模索が進められていた。私が参照にした小中学校の授業文献もそうしたものだった。

関連して近世学校における教育方法に目を向けておきたい。近世においては、藩校における講義形式と輪読などの演習形式、そして寺子屋における師匠の示範とそれをくりかえしまねる子どもの学習という形態が中心

であり、今日言われる「アクティブ・ラーニング」めいた類は稀だった。

そのため、近世期戦前期を含めて、「アクティブ・ラーニング」の原型とか蓄積とかいったものは、ゼロに限りなく近かったのだ。そこで、「アクティブ・ラーニング」を取り入れる基盤として歴史的なものというと、小学校を中心とする問答、そして少ないとはいえ討論や共同制作などであった。そうした先駆的な実践から学ぶか、外来のものをまねることから始めるしかないのが、1970 年代以前の多くの大学教師にとっての現実であった。1980 年代になると、海外の大学教授法の著作の翻訳本が出始めたが、1990 年代初めまでその影響は微々たるものにとどまっていた。

2018 年 09 月 27 日

1980～2000 年代での一方向的講義・授業の改革への動き　　問題提起連載 3

私は、1980 年ごろから学会などで多様な角度から授業についての問題提起をし続けてきた。それへの反応には二つのものがあった。まず「公的」には、反応ゼロがつづき、いわばシカト状態が 90 年代前半まで続いた。他方、個人的には「実は私もいろいろな工夫を試みているんですよ」と声をかけてくれる方々が続出した。そのころまでは、授業工夫は「隠れて」行われ、堂々と展開されていたわけではない事態を反映している。

そんな事態に大きな変化が表れるのは、1994 年の拙著『大学の授業を変える 16 章』（大月書店 1994 年）刊行前後のころであった。それまでの論文へのシカト状態などと異なって、広汎な反響があった。同書は 8 回も版を重ねた。その後、現在 50 歳代 60 歳代の大学教員から、この本を参考にして授業づくりを進めたと声をかけられることがしばしばだった。

そして、たまたまそのころから文教施策が、大学設置基準の大綱化、自己評価や FD の推進などから始まって、多様な措置を講じ始めた。そして、90 年代末には大学授業の改善も俎上に上り始める。

こうした上からの施策だけでなく、各大学教員の自主的な動きも「隠れて」ではなく、堂々と公開されるようになってきた。1990 年代後半になると、大学授業に関する著作が次々と発刊されるようになる。また、諸学会でも授業改革を取り上げる例が激増した。各大学でも授業改革研究会がしばしば持たれるようになった。

そんななか、全国の大学・学会研究会から、私への講演要請が続いた。それを従来の講演形式でするのでは意思に反するので、すべてワークショップ形式で、具体的な授業つくりとして展開した。学生相手に公開授業をしたり、初年次科目の全担当者が参加して授業プランをつくったりなど、きわめて実践的に展開した。

さらには、話が広がって、90 年代末からは各地の専門学校や高校の教員対象でも、授業つくりのワークショップを展開した。そうした流れの中で、授業に関連する実践的な論考も立て続けに執筆した。

こうして、大学に関しては一方向的な講義形式の授業に大きな変化が生まれたかのように見える。確かに前進しただろう。にもかかわらず、私の実感としては、改革は微々たるもので進行速度は鈍い。

専任をやめた後も非常勤講師を続けてきたが、受講学生は、ワークショップ型で今風にいうとアクティブ・ラーニング式の私の授業に驚く。そんな授業を経験していないと語る。それは依然として旧態の講義式授業（連続講演会）が圧倒的な状況にあることを示唆している。わかりやすく，仮の数字でいうとすると、一方向的講義形式は、1960 年代は９９．５%、1980 年代は９８．０%、2000 年代は９０%台といったところだろうか。これが５０%台に至るのは、何十年後だろうか、もしかすると、100 年後になるのだろうか。一方向的授業は 100～150 年以上続いてきただろうから、その改革にもその年数に近い時間がかかるのだろうか。

2018 年 10 月 12 日

講義形式が一律にまずいというわけではないが　　問題提起連載４

ところで、私は講義形式を一律に否定しているわけではない。講演会ないしは学会における研究発表では、聴衆が、講義内容を自分なりに主体的に理解判断して受け止める。わかりやすく言うと、かれらも研究者であり、講師と対等の立場で議論する前提にたつ。だから、それらでは、聴衆からの質問とか反論とか存在するし、それが当たり前のことだ。そして、終了後も議論が続くことがよくある。

戦前のエリート養成の場としての大学授業にあっては同様の条件が存在したが、今日では存在比率は１%にも満たないだろう。大学院の博士課程にあっては、数十%以上といえるかもしれないが。

ちなみに、私は大学院博士課程科目を二度担当したことがある。中京大学と沖縄県立芸術大学とでだ。県芸では、沖縄教育史の視点から沖縄音楽についてレクチャした。研究上の課題についてのものであり、まさに研究レベルの話だ。レクチャの後で、研究討論をした。レクチャ２～3 割，討論７～８割だったろうか。登録受講生は一人だが、研究討論ができる人数名にも参加していただき、興味深く新鮮な議論ができた。

中京大学では「健康科学セミナー」という演習科目だが、研究ワークショップという形をとって、研究課題を巡っての討論を続けた。時に私が割り込んでレクチャすることもあった。

いずれも研究討論を軸にして、途中に必要なレクチャを挟み込むという形式であった。そうした条件が整ったところでは、レクチャはかなり有効なものだろう。

こうした研究討論を行える条件は、現在の学部教育ではかなり限定的例外的なものになっている。とすると、受講生が研究討論ができる力量を欠落させたまま、レクチャが行われていることになる。研究討論条件がないところでのレクチャは、教員が話すことで提供される知識を受講生がそのままノートに取り、記憶するという「詰め込み」型授業に近づいてしまうのが現実なのだ。

そこで、話すことだけで、研究討論に近づけるためには、教員側の想像を絶するほど高度な工夫が授業に求められる。戦前の大学では、若い未熟な教員は演習実習などを担当し、講義はベテラン教授が担当していたのは、その考えがあったからだろう。

ところが、近年では若い教員や非常勤講師に講義を担当させている。しかも受講生数が大規模であることが多い。さらにしかも1，2年生という未熟度が高い学生を対象にしている。そこで「アクティブ・ラーニングといわれるような工夫をいろいろとしてみたらどうか」とアドバイスすると、「私のような未熟なものには講義しかできない」と返されることが多い。

事柄がひっくり返っている。未熟だから、アクティブ・ラーニングの類を試みるのだ。ベテランなら講義の形を取ってはいるが、講義するだけで受講生の知的活動を展開できるという高度な授業形態を採用するのだ。といっても、それほどの力量のあるベテランも多くはないが。

ということで、講義というきわめて高度な授業形態が、安易な形態になってしまっている現実がある。そして、そのことを当たり前と受け止める学生がいるだけでなく、大学教員の間にも広く見られる。というよりも、それが普通の状態になっている、つまりは体質化しているのだろう。

暗記つめこみ教育の弊害が語られる小中高校でも、未熟な教師に限って、講義形式を取り入れる実情がある。そんななかで、アクティブ・ラーニングが言われ始めている。講義（説明）と習熟のための作業だけでは、授業効果が上がらないから、アクティブ・ラーニングといった形の工夫が求められている。つまり授業効果を上げるための便利な方法として、アクティブ・ラーニングがみなされている。

こうした理解が妥当なのだろうか。これについては次回以降述べる。

2018年10月17日

知識の効率的伝達手段ではなく、知の共同創造としてのワークショップ　問題提起連載５

アクティブ・ラーニングだけでない。ワークショップについても、授業効果を上げる便利な方法、つまり知の効率的伝達手段という理解が、小中高校の授業でも広がっている。むしろ、そうした理解の方が普通かもしれない。子どもが記憶習熟を進めるために有効な方法、便利な方法として、ワークショップやアクティブ・ラーニングをとらえるのだ。

そういうとらえ方だから、アクティブ・ラーニングやワークショップについての研修さえ、「お墨付き」の講師がレクチャ型で行う例が多い。一斉前向きの受講者に講師が話すというスクール形式の配置がいまだに圧倒的なのだ。その矛盾に気づいていない講師は低レベルのインチキだといわれても弁解の余地はない。

ちなみに書いておこう。教育方法研究者にも講義式を多用する現実がある。理論的にはアクティブ・ラーニ

ングの類について提起するが、自分自身の授業では講義式に依存するという矛盾が広く存在している。それを矛盾とはとらえず平然としている事態にしばしば出会ってきた。なかには、そうした実践ができないとあきらめて研究者になり、講義式に依存している人さえいる。

ワークショップについていうと、便利な方法、効率的伝達手段としてとらえるようでは、それは共同創造として存在するワークショップではない。ワークショップは、知をめぐる大きな変化、学校像をめぐる大きな変化と結びついているのだ。簡潔に言うと、知の伝達ではなく、創造であり、しかも共同創造なのだ。そうしたことを展開する場として学校が存在しているととらえるのだ。

そうした動向にかかわって、いくつかみてみよう。

よく紹介されるが、フィンランドの授業では、とくに高校以降では、一斉前向きの講義式はいまや少数派というか化石状態のようだ。生徒たちが知を（共同）創造するイメージの方が近いだろう。

また、PISA テストなども、そうした傾向を強めている。PISA に限らず、一つの正答にたどりつくことを求めるようなものではなく、また知を伝達習得するものよりも、知を（共同）創造するような動きが高まっている。別の言葉でいうと、ノレッジ（知識）ではなく、ノウイング（知ること）をどうするのか、という視点で知をとらえる動向だ。

日本でも、大学センターテストの廃止など、こうした新たな動向にからむものが見られる。しかし、その実施を前にしての「混乱」「未熟すぎる準備」状況は、目を覆いたくなるようである。たとえば、正解のないテストや、大量の文章回答を採点することにとまどいが見られる。

もう一つ危機的なこととして語られるのは、世界大学ランキングのなかで、日本の大学の低下である。その一例として大学教員の研究論文数の減少が言われる。あれだけ繁忙であれば、減少するのは当り前だと、元大学教員の私は思う。

また、博論の量的増加が求められる中で、安易な博論執筆形式、わかりやすくいうと、たとえば指導教員の研究課題研究方法を特定のものに対象を絞って応用する事例が結構存在している。当人の知的創造の要素が極小に抑えられているのだ。

ワークショップとは多様な参加者たちが共同で作り出すものだ。そのなかで多様な知識と知的探求が渦巻く。コーディネーター役も、進行に気を使いながらも、新たな創造に参加し、新たな知を獲得していく。だから、ワークショップは研究そのもの、研究会そのものともいえよう。

2018 年 10 月 22 日

共同の知　アクティブ・ラーニングが目指したいワークショップ的ありよう　問題提起連載６

ここで、アクティブ・ラーニングが目指したいワークショップ的ありようについて、いくつかのことを書いていこう。

一つ目は、共同の知の追求だ。

ワークショップとは対照的な一斉学習、つまり黒板や教員・講師に向かって、受講生全員が同じ方向を向いて、講師の話を聞き、その指示に従って学習するというスタイルでは、受講生間のつながりは限りなくゼロに近い。それは集団学習として行われているにもかかわらず、一斉画一型であり、「個人」を抑え込むことが求められる。だからカッコつきの「集団」学習というべきだろう。そこでは、受講生間のやり取りは抑えられる。場合によっては進行を妨害するものとして禁止される。

一斉画一型「集団」学習とは異なるものとして個人学習がある。教師と生徒間の一対一のものもあるが、職人のような指導者である「親方」の技を「盗む」学習もある。30 年近く前に、「正統的周辺参加」論として話題になったのもその類である。

それらは、創造における個人単位枠組みが強く、共同創造が弱いものだ。そうした枠組みでの集団創造となると、指揮者・統率者および基準・楽譜などが欠かせない。それらに合わせて、作業・学習が進行する。

そこでの教師・指導者が学習者に行うことは、指示命令に近いものだろう。そして、学習動機として、標準ないしは正答にどれだけ近づいたかが位置付けられる。その近づいた距離で序列が作られ、序列上昇ないしは序列下降をめぐっての競争が行われる。そして、学習者間には協力関係よりは競争関係の比重が高まり、その競争には敵対的関係さえ生まれてくる。

その場では、教師・指導者だけでなく、学習者のなかでも上位のものには権威が生まれてくる。そして、学習をめぐってだけでなく、「人格」をめぐっての序列関係が生まれ、上位者はモデルになり、ますます権威性を帯びてくる。長い間、級長の類には学習成績上位者が選ばれ、教師によって選抜任命がなされたのは、その典型だろう。

そうしたところでは、タテ関係が主軸になり、ヨコ関係の協力協同関係が弱められていく。そして、教師対生徒、教師間、生徒間関係に成立しやすい非対称的関係がますます拡大していく。それが、学習している時だけでなく、一生を通じて残るレッテル・傷のようなものになっていく。

知の獲得という豊かさに通じるものが、逆に、貧しさにつながりかねないのだ。

こうしたものとは対照的なものとして、共同で創造し保持し享受する【共同の知】を構想し追求したいものである。

2018 年 10 月 29 日

知の創造　問題提起連載 7

アクティブ・ラーニングが目指したいワークショップ的ありようの第二番目として、知の創造について考えたい。

知の創造は、まず疑問をもち、問いをたて仮説をつくり、調査・実験をして、分析し発表するという流れで展開する。それらが教室内で他メンバーとともに行うときには、討論スタイルに重点がかかり、研究会に近づいていく。

こうしたありようは大人の研究者、研究者志望者だけでなく、今では 10 歳未満の子どもたちに見ることも多い。小学校の自由研究などはその例だろう。

しかし、10 代 20 代前半における学校での授業ではそうした様相を見ることは稀になっている。問いを立てることや討論でさえも、正答への接近イメージで語られることが圧倒的なのだ。

そして、大学における卒論・修論・博論でさえ、指導教官の作った枠組みで研究をすすめることが中心になり、エビデンス集めに集中して、研究枠組みを問わないことになりがちだ。

知の創造とか研究とかは、まだ不明のことを探求することだから、不確実性がつきまとう。予め設定されたコースを歩んで正答に到達するというものとは真逆なのだ。そして、その不確実性は、緊張・不安を呼び起こしやすい。

それは、人生選択・人生創造と似ている。人生選択・人生創造も不確実な将来にかかわるものだからだ。それだけに、予め設定されたコースに乗った「指示待ち」型人生の方が容易で、研究創造型人生の方が，不安を掻き立てやすいだろう。

リスク回避のために、研究創造や人生創造を避ける動きが、若者に、さらにその親に生まれる背景にはそんなことがあろう。

だが、予め設定された正答・標準・人生コースにおける揺らぎ・不確実性が高まっている現代では、逆に創造型の方が、確実性が高くなりつつあるかもしれない。

ところで研究創造の世界では、不確実性ないしは不安定性がつきまといやすいために、知的創造を統計数値で代用し、確率レベルでの追求にする動きがますます高まっている。医療などはその傾向の一つの典型だろう。

また近年、効率主義がますますはびこっているが、効率主義は、予め正答・基準が設定されたところに生まれ、基準に沿って正答にいかに効率よく早く到達するかを中心課題にする。それは結果的に研究創造と逆行しかねない。

また、これらの動向は、基準にあわない異次元や異世界を取り込むことを避けようとする。その結果、基準とは異なる多様さを尊重し、多様さがからみあい、新たなものを生み出していくような、ワークショップ的あ

りようとは距離が広がっていく。

さらにまた、創造は予めシナリオがあるわけでなく、即興型の色彩が濃い。創造過程は一瞬一瞬で変化発展していくから当然のことだろう。似たものとしてロールプレイや即興劇がある。また、即興による集団演奏もそうであろう。ワークショップによる芸術創造には、そうした要素が強く見られる。

こうした研究創造的なワークショップの要素を多分に含んだアクティブ・ラーニングを追求したい。

2018 年 11 月 03 日

理論と実践の相互関係・循環関係　アクティブ・ラーニング 問題提起連載８

この連載も今回で閉じる。アクティブ・ラーニングが目指したいワークショップ的ありようの第三番目として、理論と実践の相互関係について考えよう。

レクチャ（講義）式が広く見られる背景には、そこで話される理論がまずあって、聞く受講生がそれを確実に受け止め、現場で実践するという、理論→実践という構図がある。それは、大学カリキュラムでよく見られる講義→演習実習という流れにも対応する。その構図を前提にして、初年次教育が言われることが多い。つまり、講義に対応する姿勢・能力が不足しているので補充するための初年次教育という発想である。あるいは高校と大学の接続ということが言われることも多い。その講義で話される内容は、研究創造レベルではなく基礎知識というイメージになる。

このように、元の構図の問題性に取り組むのではなく、それを前提にして、初年次教育や高大接続の問題にすり替えているような発言によく出会うのは残念だ。

これらの背景には、理論が上で実践が下という上下秩序、あるいは、基礎理論→応用実践、理論→現場という発想が存在している。そこには、実践→理論という逆の流れが弱く、そして両者の循環関係については、ほぼ欠落しているようだ。

あるいは、話す→聴く→実践するという構図が強く、話し合うとか、討論・思考・実践がからみあう構図が弱い。

こうしたなかで、ワークショップは実践・討論をスタートにして、あるいは軸にして、理論をもレベルアップする営みといえよう。だから、私が大学院生対象にしてきたような研究ワークショップも存在するのだ。

まとめよう。

理論のレクチャ（講義）→実践のワークショップという構図ではないのだ。ワークショップのなかに理論と

実践の相互関係・循環関係が含みこまれているのだ。

こうした視点にたって、アクティブ・ラーニングを構想し追求していきたい。